

建築と社会

Architecture and Society



(大阪中部の娯楽地区) (千日前楽天地)

特集 オープンマインドな空間

2019 vol.100

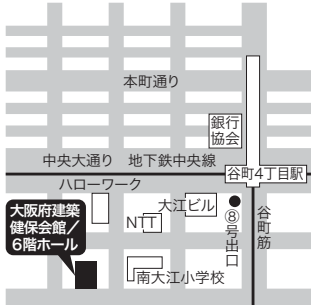
12 No.1173

日本建築協会

2019年度 建築工事实務講習会

【この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。(6単位)】

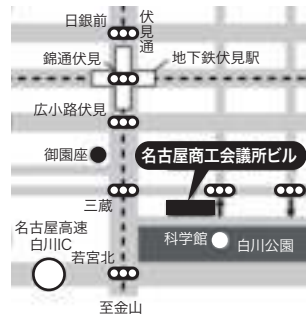
■講習会会場(大阪府建築健保会館)
交通：地下鉄谷町線・中央線谷町
四丁目駅8号出口より徒歩5分



日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

【この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。
(公社)愛知建築士会 (6単位)】

■講習会会場
(名古屋商工会議所ビル)



日 時：2020年 1月16日(木)
9:00~17:30
会 場：大阪府建築健保会館
6Fホール
大阪市中央区和泉町2-1-11
TEL: 06-6942-3622
定 員：100名(先着順)
受講料：16,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて、
①催し名「実務講習会」
②受講者氏名(年齢)
③事業所名
④受講票送付先住所
⑤担当責任者
⑥E-mailアドレス
⑦電話番号
⑧受講料支払方法
(銀行振込、郵便振替、等)
⑨CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDをお知らせ下さい。
受講料は、前納制となっておりますので、併せて銀行振込、郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票を送付します。
なお、当会HPからお申し込みいただけますので、<http://www.aaj.or.jp>をご覧ください。

■申込先

(一社)日本建築協会(担当 内山)
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp
URL: <http://www.aaj.or.jp>

<振込先>

●三井住友銀行
大阪中央支店 普通 0860034
●三菱UFJ銀行
瓦町支店 普通 0210054
●りそな銀行
北浜支店 普通 0272234
●郵便振替口座 00910-9-39975
名義 シャ)ニホンケンチクキョウカイ
一般社団法人日本建築協会

■趣旨と内容

●本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の中堅以下の技術者を対象としたものです。
●現場実務の基礎である「施工計画」と「仮設見積」に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■科目・講師

施工計画

谷本 達哉 氏

(株)浅沼組大阪本店
建築部品質管理室主任

永野 浩一 氏

(株)竹中工務店大阪本店
技術部企画管理グループ部長

施工計画は、品質を確保し、安全で効率よく経済的に本体工事を進める鍵をにぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

山口 紀宏 氏

(株)大林組大阪本店
建築事業部生産技術部計画第三課長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

施工計画

日吉 智紀 氏

清水建設(株)名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

相原 仁史 氏

(株)大林組名古屋支店
建築工事事務部建築生産技術第一課長

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

木原 陽 氏

(株)竹中工務店名古屋支店
見積部建築3グループ主任

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

日 時：2020年 1月22日(水)
9:30~17:00
会 場：名古屋商工会議所ビル 9階
愛知建築士会内
名古屋市中区栄2-10-19
定 員：60名(先着順)
受講料：16,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて
①講習会名
②郵便番号・住所
③受講者氏名・年齢
建築CPD単位申請希望者は氏名の下にCPD登録番号を明記
④事業所名
⑤申込担当者名
⑥電話番号・FAX番号・E-mailアドレス
⑦受講料支払方法(銀行振込等)
受講料は前払制となっておりますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、<http://www.aaj-tokai.jp>をご覧ください。
■締切日 2020年1月14日(火)
但し、定員に達し次第締め切ります。

■申込先

(一社)日本建築協会 東海支部
〒460-0008
名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル・9階
(愛知建築士会内)
TEL: 052-201-2201
FAX: 052-201-3601
E-mail: info@aaj-tokai.jp
URL: <http://www.aaj-tokai.jp>

<振込先>

●三菱UFJ銀行
栄町支店(普通 0167157)
シャ)ニホンケンチクキョウカイトウカイシブ
一般社団法人日本建築協会東海支部

■趣旨と内容

●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
●現場技術者の初級者を対象に、とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
●積算業務では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

(一社)日本建築協会京都支部・
(公社)日本建築家協会近畿支
部京都地域会 共催

黄檗宗大本山萬福寺修理現場見学研修会

(重要文化財萬福寺法堂ほか4棟保存修理工事現場)

昨年度に続き伝統的な日本の建築に関する研修、また文化財の修理活用設計技術者を育成する為の研修として、萬福寺の修理現場見学並びに座学研修会を開催します。萬福寺は京都府宇治市黄檗に在る三禪宗の一つ、黄檗宗の大本山です。現在、京都府文化財保護課により4棟を保存修理工事中ですが、御理解をいただき見学会開催の運びとなりました。皆様の御参加をお待ちしております。(文責 日本建築協会京都支部長 長瀬 博一)

■講師プロフィール

田中 智誠 氏

1949年生まれ。滋賀正瑞寺住職。黄檗山萬福寺文華殿(宝物殿)主管。京都府文化財建造物修理専門委員。『黄檗文華』編集出版。文華殿春・秋特別展の企画開催。資料閲覧者への対応、文化施設への出陣依頼への対応。

齋藤 忠一 氏

1939年生まれ。福島県出身。京都林泉協会副会長。東京藝術大学卒。重森三玲に師事。『日本庭園史大系』全36巻(社会思想社刊)刊行に参画。全国庭園の実測調査を担当し桂離宮庭園、修学院離宮庭園等、100余庭を実測。1977年齋藤庭園を開業。主として、杜寺庭園を専門として作庭を続ける。

■日時 2020年1月17日(金)
10:30~17:30
(昼食休憩含む)

■定員 30名(先着順)

■参加費 4,000円(午前・午後のみ
の参加可。午前1,000
円、午後3,000円。共催
の会員以外は+500円)
※萬福寺の境内拝観料
(500円)別途必要

■会場 萬福寺(京都府宇治市五
ヶ庄三番割34)

■最寄駅 JR「黄檗駅」もしくは京
阪「黄檗駅」より徒歩約
5分 無料駐車場が有る
ので車での来場も可能

■申込方法 ①研修会名「1/17 黄檗宗
大本山萬福寺修理現場
見学研修会」 ②氏名
③勤務先または学校名
④当日連絡先 ⑤E-mail
アドレスまたはFAX番号
⑥会員・一般の別 ⑦参
加内容(全参加・午前のみ・午後のみ)
上記項目を明記しFAXで
下記へお申し込みください。

※受付後連絡のため、FAX又はMailを
必ずご記入ください。

■申込先 (一社)日本建築協会
京都支部事務局
FAX 075-255-6077

■スケジュール

10:15-10:30	現地集合・受付(山門前)	
10:30-11:30頃	重要文化財萬福寺法堂ほか4棟の 保存修理工事現場の見学・解説	竹下 弘展 氏 (京都府文化財保護課)
12:00-13:00	昼食休憩(黄龍閣別館2階を食事 場所として使用可能)	
13:00-15:10	座学①「黄檗山萬福寺 境内配置 と建築」	田中 智誠 氏
15:20-17:30	座学②「萬福寺東方丈庭園-隠元 禪師が富士山を主題として 作庭」	齋藤 忠一 氏

予 告

京都スタジアム 見学会

この催しは建築CPD情報提供制度
認定プログラム申請予定です。
建築関連CPD 2単位

■日時 2020年1月28日(火)
午後~

■会場 京都スタジアム
(京都府亀岡市追分町)

■講師 (株)東畑建築事務所 設計ご
担当者様

■最寄駅 JR亀岡駅 徒歩約5分

■定員 50名(先着順)

■参加費 会員1,000円、一般1,500円、
学生500円

詳しくはホームページ、
2020年1月号に掲載いた
します



JR講演会第2弾！ JR西日本建築グループの駅づくり

日 時

2019年12月20日(金)
14時～16時(予定)

- ・ JR西日本建築グループについて
- ・ 駅の形態
- ・ 駅の作り方
- ・ 事例紹介
- ・ 将来プロジェクト

JR講演会第二弾として、建設部門の幹部を講師に招き駅を中心とした話を伺います。街中に建つ建物とは違う「駅」、誰もが「どうやって設計するのだろう？電車が走行している中、乗客が大勢いる中でどうやって工事をやるのだろう？」こんな疑問に答えます。駅の形態についても事例を紹介しながら「橋上駅、新駅、駅ビル等」の説明をしていただきます。「駅」が「人とまち、未来、そしてみんなでつないでいく」。この講演会をきっかけとして一人でも多くの方に興味を持っていただければと思っています。

(ジェイアール西日本

コンサルタンツ 梶田)



京都駅ビル



サウスゲートビルディング

■講師プロフィール

村田 直紀(むらた なおき)

1991年JR西日本入社。

多数の駅建設のほか、京都駅ビル、大阪ステーションシティの建設に関わる。

建設工事部担当部長。

大阪府出身。



大阪駅 時空の広場



広島駅



新山口駅

■申込み詳細

定 員 ●名(先着順)

参加費 会員1,000円、一般1,500円
学生500円

会 場 新大阪中央ビル 8 階会議室
(大阪市淀川区西中島5-4-20)
※新大阪ワシントンホテル
隣り

最寄駅 JRあるいは地下御堂筋線
「新大阪」駅より徒歩 5 分

■申込方法

- ①講演会名
 - ②氏名
 - ③勤務先名
 - ④E-mailアドレスまたはFAX番号
 - ⑤会員/一般(非会員)/学生の別
- 上記項目を明記しFAXかE-mailにてお申し込み下さい。

■申 込 先

日本建築協会(内山)

FAX 06-6946-6984

E-mail: jigyoka@aaj.or.jp

締 切 12月10日(火)



京都鉄道博物館

<予告> 2040委員会【2040 FUTURE VIEW vol.1】 発行のお知らせ

ただ今、未来創生プロジェクトに属する「2040委員会」のこれまで約2年間の活動を記録した、初の小冊子【2040 FUTURE VIEW vol.1】を作成しています。『建築と社会』1月号に同封して、みなさまの元にお送りする予定です。

「2040委員会」では、現在40歳前後のメンバーが、時代が大きな変革を迎える2040年のあるべき姿を思考(志向、試行)する活動を行っています。その時代を担うプレイヤーとして、迎える時代に向き合うであろう問題点を予測し、その問題点に取り組むための準備として、メンバー全員でのブレインストーミング、および建築にとどまらない様々な分野から、9名の方々に未来に向けた社会との関わり・視点を伺った、その記録が中心の冊子となっております。どうぞ期待。

お問い合わせは下記まで

「2040委員会」事務局: hensyu@aaj.or.jp



2040 FUTURE VIEW vol.1 表紙

建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2019 12

Vol.100 No.1173

■特集予告

● 1月号／大阪ベイエリアの再生

● 2月号／第26回私の空間作法

今月の表紙

「関西建築協会雑誌」vol.1 No.13より口絵「大阪市
中部の娯楽地区（千日前楽天地）」

「楽天地（らくてんち）」は、1912年（明治45年）
「ミナミの大火」によって焼失した繁華街復興の目
的で計画され、1914年（大正3年）から1930年
（昭和5年）まで大阪市南区（現・中央区）にあっ
た劇場・演芸場などを集めた一大娯楽センターであ
る。地上3階建、多くの尖塔を持ち、夜はイルミ
ネーションで彩られ、地下にはメリーゴーランド、
ローラースケート場、水族館まであった。

「楽天地」廃業後は「大阪歌舞伎座」が誕生。第二次
世界大戦の空襲で焼け野原になるも復興。御堂筋
へ移転した大阪歌舞伎座を改装し「千日デパート」
が開業するが多数の死者を出した火災の後、長く放
置され、「プランタンなんば」が建ち、現在はビック
カメラなんば店（エスカーンなんば）となっている。



特集 オープンマインドな空間

【各論】

- 1 センセイオフィス～働き方改革を職員室から～●ヴィトラ ——— 8
- 2 『DIYのいえ』 泉北ニュータウンでの試み
～DIYで団地コミュニティ活性化～●豊嶋洋子 ——— 10
- 3 開かれた寮 立命館大学分林記念館●永井 務 地田 聡 ——— 12
- 4 商店街HOTEL講 大津百町 ～大津の空き町家再生～
●玉井 淳 ——— 14
- 5 駅という概念のパラダイムシフト●二反田陽介 ——— 16
- 6 人に開いて仕事を生む空間～障害のある人とともに～●森下静香 — 18
- 7 開かれた雲の上の図書館●見目佳寿子 ——— 20

【編集後記】

会告	2019年度建築工事実務講習会（本部、東海支部） 京都支部共催 黄檗宗大本山萬福寺修理現場見学研修会/ ＜予告＞京都スタジアム見学会 JR講演会第2弾！JR西日本建築グループの駅づくり/ ＜予告＞ 2040委員会【2040 FUTURE VIEW vol.1】 発刊のお知らせ 2019年度建築工事実務講習会（中国支部）	1 2
作品作風	国立循環器病研究センター	4
gallery	ビジュアルイメージを作る●芝野健太	6
法令コーナー	許可建築物の適正な維持管理の推進等 ～大阪市総合設計制度の一部改正～●藤村雅典	24
再読 関西の建築	近代建築調査委員会報告●橋寺知子	25
設備の頁	「エネバンク®」—高性能多用途潜熱蓄熱カプセル ●矢野直達	29
建築と社会を 考える	存在の質から環境を捉え直す～地蔵盆まちづくり試論～ ●前田昌弘	30
寄稿文	1995年のこと —「西の丸迎賓館」から「中央公会堂」へ—●太田隆信	34
Member's Forum	U-35委員会企画 talk baton 14 活動報告 イケフェス2019スペシャルツアー 日本建築協会Presents！ 「天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く」リポート	36 38
第100集総目録	2019（令和元）年	40
information	特別展 生誕90年 田中一光 未来を照らすデザイン／ 坂田一男 捲土重来 格納された世界のすべて、風景の すべて／コレクション展Ⅲ 特集 もうひとつの日常／ 竹芸名品展：ニューヨークのアビー・コレクションー メトロポリタン美術館所蔵	44
月間の動き	2019年10月	46



長辺280mの建物を大きく3つに分節しランダムに穿った開口で街のスケールに馴染ませた南側外観



ガラス+和紙調フィルムの光壁を通したトップライトからの柔らかい光で包まれたエントランス

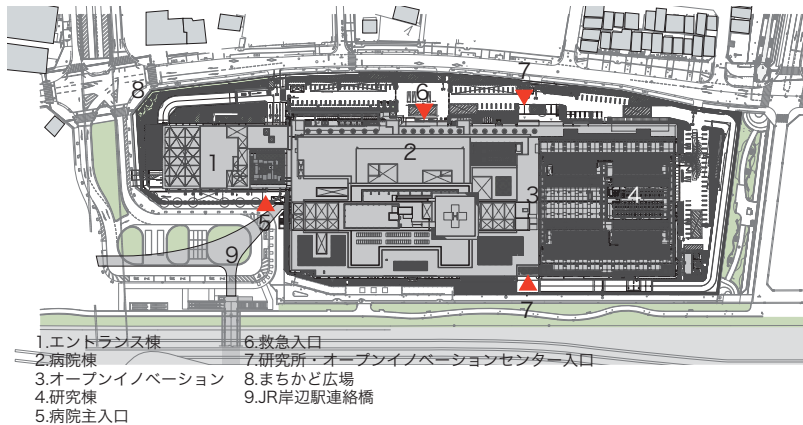
国立循環器病研究センター

建 築 主 国立研究開発法人 国立循環器病研究センター
基本設計・実施設計監修・設計監理 佐藤総合計画
実 施 設 計 竹中工務店・日本設計
施 工 竹中工務店

国立医療研究所の1つである国循は心疾患と脳疾患を同一組織で研究する世界でも稀な研究機関である。吹田市JR岸辺駅前に新たに整備された医療クラスターの中心施設として、先端医療を提供するとともにオープンイノベーションによって医療技術開発を推進し世界をリードする施設の移転建替え計画である。病床の5分の1を集中治療室とする高度専門病院（550床）と多様な医療研究機能を合理的に一体化し連携を促進するとともに、災害に対する安全性と事業継続性の高い建築により未来の医療研究・診療を支える。

建物は部外研究者や企業などと共同研究を促進する施設のオープンイノベーションセンター（OIC）を中心に置き、研究所と病院が連続的に配置されている。病院外来は明快なゾーニングと動線計画により来院者のストレスを低減。病棟はオープンエンドの廊下から自然光を取り入れた明るい空間とし、病室は個室への転換が容易に行えるプライバシーの高い療養環境としている。研究所は日々進化する研究内容に対応できる可変性のある研究室とし、各所に小ラウンジ等を設けることによりコミュニケーションの活性化を狙っている。

（石原哲／竹中工務店）



所在地 大阪府吹田市岸部新町6番1号
敷地面積 30,585.17㎡
建築面積 18,712.107㎡
延床面積 129,756.11㎡
構造規模 RC造・S造 地上10階・地下2階・550床
工期 2016年8月～2019年3月
最寄駅 JR京都線 岸辺駅
撮影 竹中工務店

建物全体俯瞰



共同研究者などセンター以外の人も共同で利用するOIC 4階にあるサイエンスカフェ



見まもりやすいオープンなスタッフステーション



患者アメニティの充実と将来個室への転換が容易な直列4床室



85室ある診察・処置室へと誘導する、120mのホスピタルストリート



外光とアートが感性を刺激する研究室フロアの小ラウンジ



外部の緑と光を取り込んだ外来用食堂

ビジュアル イメージを作る

グラフィックデザイナー
印刷設計者

芝野 健太

大阪の街に点在し、今も活用され続けている建築物を一同に公開するイベント「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」のデザイン・印刷設計を2018年から担当している。

ガイドブックを核として、チラシ・ポスターなどの印刷物から、サイネージ広告、グッズに至るまで、多岐にわたる媒体のデザイン・印刷を行った。

グラフィックデザイナーとしての仕事と、資材や工場の段取りをし、印刷現場で色調などのディテールを調整しながら、完成品である「モノ」を作っていく印刷の仕事を通して、職の分断や自動化が加速する昨今において、人が目で見て手で触れることを意識しながら、長く残っていくものを作っていくことが私の仕事です。

芝野 健太（しばの けんた）

1988 大阪生まれ

2010 立命館大学理工学部
建築都市デザイン学科卒業

2012 ノマルにてグラフィックデザイナーとして所属

2016- ライブアートボックス（大伸社）
に所属（現職）

主に美術や建築にまつわる広報物・出版物を中心に、デザインから印刷・製本におけるディレクションまでを一貫して手がける。主な仕事に、「田嶋悦子展」（西宮市大谷記念美術館、2017）、「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」（2018・2019）、京都市京セラ美術館リニューアル広報物（2019-）など。

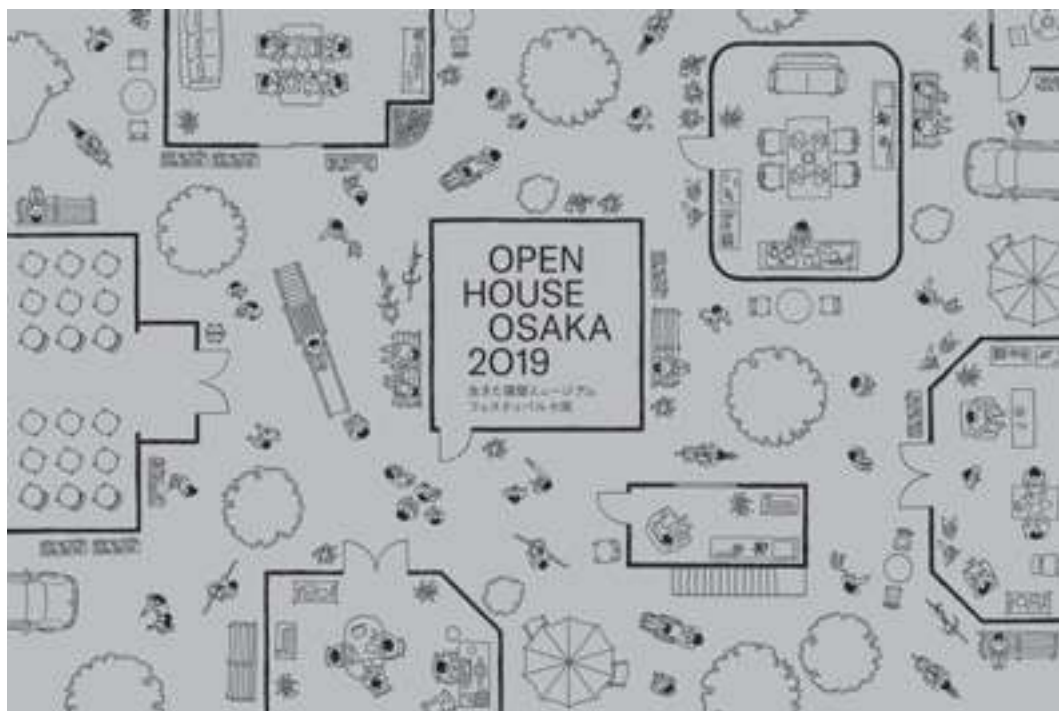
www.kentashibano.com

企画編集：高木秀晃（作品作風小委員会）

■「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2018」メインビジュアル（キーカラー：蛍光オレンジ）



■「OPEN HOUSE OSAKA 2019（生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2019）」メインビジュアル（キーカラー：水色+ブルー）



イベント時に公開建物の入口に設置されるポスターはサインとしても機能する。

人と建物、社会との関わり合いの中で、今も大切に使われている（＝生きている）大阪の建築物の姿や、建物を介する人と人との繋がり、街のにぎわいが感じられるメインビジュアルとすることで、「生きた建築が扉を開く2日間」というイベントの特性を表現した。

また、それぞれの年において鮮やかなキーカラーを設定し、色々なツールに展開させていくことによってイメージの統一を図る。同時にガイドブックを「人と人のコミュニケーションの間にあるもの」と位置づけ、ガイドブックを携えながら街を歩く参加者同士が、一目で同じイベントの参加者だとわかり、一体感を感じられるようにした。

特集

オープンマインドな空間

かつては様々な「施設」は単純であったように思う。求められる機能に対して画一的につくられてきたそれぞれの施設は、デザインや形状の差はあれど、共通言語を用いて造られてきた。「職員室」は「職員室」らしく、「図書館」は「図書館」らしくというのが当たり前であったのだが、近年、それぞれの施設に求められるものが変化してきている。もっとコミュニケーションを、もっと様々な使い勝手を、というように、利用者のマインドに変革が起き、又それらのマインドを共有したり発信したりするツールや場が進化したことにより、それぞれの空間は画一的な共通言語から脱却し、新しいプログラムによる新しい空間へと進化しつつあるのではないだろうか。しかし、この進化を辿っていくと今度は全く違う施設のそれぞれの進化の中に、「場を開く」という新たな共通言語がある事に気づく。「オープンマインド」な性格を場に持たせ、かつては閉じられていたものを開くことで、空間や、空間の持つ機能には新たな価値が付加される。こういった取り組みを目にするようになり、近年、様々な施設で「開かれている」と感じるのだろう。

インターネットやSNSによって個人は世界に向けて「オープンマインド」になってきているが、それは片手に持つスマホの中だけであって、日常の世界では逆に閉鎖的になってきているとも言われる昨今だが、インターネット上の欲求は日常世界にも波及しはじめている。極論を言えば、オープンマインドなプログラムを組み込んだ施設こそがインターネット社会と日常世界を繋ぐキー施設になりうると言える。そのプログラムと建築空間が調和して出現したとき、私たちはそこに新たな価値を見出し、インターネットを上回る“リアルな感動”を覚えるのではないだろうか。

今回、「オープンマインドな空間」というテーマで新しい取り組みを行っている施設を紹介する事で、空間、情報、人が相まって生み出す新しい文化についての考察を更に深めたいと思う。島根県の「センセイオフィス」は職員室のあり方を抜本的に変え、職員同士、職員と生徒のコミュニケーションを活性化させた非常に興味深い事例である。泉北ニュータウンの「DIYのいえ」は団地を中心に地域までコミュニティを広げ、DIYを通して新しい繋がりをつくろうと模索し、立命館大学の「分林記念館」は学生同士の接点を設ける仕組みを展開しながら、文化や街に開かれた寮となっている。又、宿泊施設の取組みも興味深い。大津市の「商店街HOTEL講 大津百町」は街に開かれた宿を点在させながら旅人が街に溶け込むようなシステムを構築し、尾道では駅中に宿泊できる「M3ホステル」が駅と街と人を繋げている。そして香芝市の「Good Job! センター香芝」では、障害者・働く・楽しむ・遊ぶ・出会うという様々な事象を、空間内に実現している好例であり、梶原町の「雲の上の図書館」は図書館という単体機能ではない新たな開かれた複合施設を生み出している。それぞれが非常に個性ある空間を創り出していることもさることながら、皆がそこに至るプロセスにも触れられている点も興味深い。今回の特集を通じて、建築を器として捉える時代は終焉を迎え、プログラムこそが建築そのものと社会的価値を創造する時代になったと再認識できるだろう。そして、この流れの先に、更なるオープンマインドな変革があることを期待せずにはいられない。

編集委員 黒柳 亮

【各論】

- | | |
|--|------------|
| 1 センセイオフィス～働き方改革を職員室から～ | ●ヴィトラ |
| 2 『DIYのいえ』 泉北ニュータウンでの試み
～DIYで団地コミュニティ活性化～ | ●豊嶋洋子 |
| 3 開かれた寮 立命館大学分林記念館 | ●永井 務 地田 聡 |
| 4 商店街HOTEL講 大津百町 ～大津の空き町家再生～ | ●玉井 淳 |
| 5 駅という概念のパラダイムシフト | ●二反田陽介 |
| 6 人に開いて仕事を生む空間～障害のある人とともに～ | ●森下静香 |
| 7 開かれた雲の上の図書館 | ●見目佳寿子 |

【編集後記】

企画：インテリア・住宅系分科会

赤川貴世友／東奈生子／今井充彦／岩田圭司／川合隆之／河西孝平／黒柳 亮／塚口洋之／ペリー史子

センセイオフィス

～働き方改革を
職員室から～

ヴィトラ

Vitra (ヴィトラ) 1950年創業のスイスの家具メーカー。世界的なデザイナーの創造性と自社の開発力によって製品とコンセプトを生み出し、そのデザインの力を通してホーム、オフィス、公共スペースの空間の質の向上に貢献。またヴィトラキャンパスにおける建築やヴィトラデザインミュージアムでの展示、ワークショップ、出版物でも知られ、多様な側面を有する。



津和野高校のセンセイオフィス

■ 変わらない職員室のイメージ

職員室といえば、先生が資料の平積みされたグレーの机に向かい、答案採点から先生同士の打ち合わせ、生徒との面談、食事まであらゆることを行う……そんなイメージが何十年も定着しているのではないだろうか。

2018年秋、島根県立津和野高校からそんな職員室の改装についてヴィトラに問い合わせがあった。

同校では、県が推進する「高校魅力化事業」を採用し、「高校魅力化コーディネーター」を配置するなどして全校生徒数が5年前に比べて1.2倍に増加した。今回、これまで生徒のみに向けられていた「魅力化」を先生にも向け、働く職場を改善することで、さらに魅力を高めたいとのことだった。

学校側が改装にあたって、教員と全校生徒を対象にアンケートを行ったところ、「収納が少なく書類整理がしづらい」「生徒との面談や教員同士で打ち合わせする場所がない」といった意見が寄せられた。

ヴィトラでは、教員の作業の質の向上はもちろん、生徒との関わり合いの面においても配慮し、世界中のオフィスで現在、採用されている最先端の設計思想を盛り込んだレイアウトを提案した。

まず職員室にあった膨大な量の書類を整理することから始め、棚の数を削減し、それによって空いたスペースを活用して、先生エリア、協働スペース、集中スペース、生徒エリアを配置するレイアウトを描いた。

■ 先生エリア（執務スペース）

書類を整理できたことで空間全体に余裕が生まれ、以前より大きな机上面のデスクを導入できた。これによってパソコンを広げながら並行して書類を使った業務が可能になり、作業の効率化が進んだ。



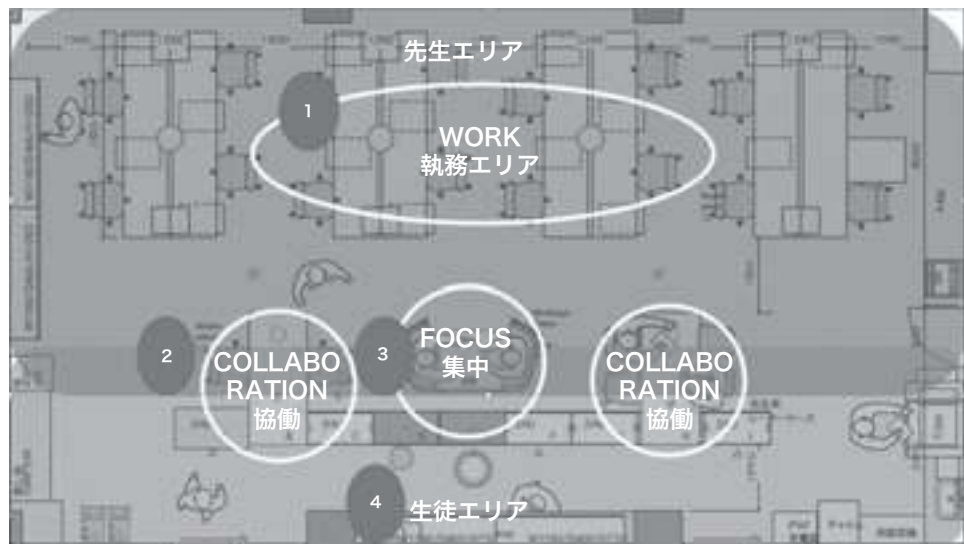
先生エリア

椅子も機能を絞った動きやすいコンパクトなものを採用した。また1席に一つのキャスター付き引き出しワゴンを設置することで、職員室内の人事異動に伴う座席変更の際にも、ワゴン一つの移動で簡単に行えるようになった。

■ 協働スペース

打ち合わせ用テーブルとモニターを設置し、モニターに書類を投影しながら会議を進行できるので、ペーパーレス化による業務効率と会議の質の向上も図った。

また短時間のミーティングの際は、ハイカウンターを利用して立ち話で済ませせることもできるようにした。



センセイオフィスのレイアウト

■集中スペース

周りの騒音を吸収する圧縮されたフェルトパネルを壁面に使用している半個室のようなブースは、周囲を気にせず業務に集中できるスペースとした。

生徒との落ち着いた面談、先生同士の機密性の高い打ち合わせ、リラックスして食事や休憩を取る場として様々な目的に合わせて使える空間となった。



集中スペース

■生徒エリア

事前アンケートで、生徒からは「職員室の中に入りにくい」「個人面談の際、周りが気になる」などの意見があったため、生徒との関わりの質を向上させ、先生とじっくり対話ができる環境に配慮することは、今回の職員室改革の中で最も重点を置いた点だった。

このため、システム家具を利用し、緩やかに先生エリアと生徒エリアを区切り、生徒が回収しに来る書類や連絡用の資料を置くことで生徒が自然と職員室に入りやすい仕掛けを工夫した。また生徒エリアに来た生徒が日常の動きの中で、先生と偶発的な会話が生まれ、

その場ですぐに相談できるようなカウンターやベンチを設置した。

■先生、生徒からの評判

こうして新しいセンセイオフィスは2019年4月に完成した。

執務エリアは、これまで書類に囲まれていた机上が書類の削減により、開放的なスペースとなり、先生同士の顔が見え、対話が増えている。また先生に実施したアンケートでも「生徒が気軽に質問に来るようになった」、「職員室内で生徒の姿を見ることが多くなった」という回答があり、生徒との関わりの質も確実に向上している。

課題が環境から運用面に移ってきたため、センセイオフィスが新任の先生にも理解しやすいよう運用ルールを策定を進めている。運用ルールには空間の利用方法、収納方法などが含まれ、ルールについて先生同士で話し合うことでさらに理解も深まっている。

■働く空間をデザインの力で改善

環境はそこで働く人の考え方や成果に影響すると考え、ヴィトラではその環境をデザインの力で改善することをミッションとしている。働き方改革を単に残業時間の削減など効率性の見直しだけに終わらず、本来その組織が何をしたいのかと改めて考えることが大切だ。

働く空間はその組織が達成したいことをサポートできる環境であるべきで、そこで働く人の健康面、精神面への配慮も欠かせない。ITの発展によって働き方が変わり、作業も効率的にできるようになった。同時にオフィスの在り方も変わらなくてはならない。

センセイオフィスが目指したように、先生と生徒のコミュニケーションの改善など、人と出会う場所として、オフィスの価値はさらに高められると考える。

写真：柿崎健太郎
(構成 日本建築協会)



先生エリアと生徒エリアの間に配置されたシステム家具

『DIYのいえ』 泉北ニュータウン での試み

～DIYで団地コミュニティ 活性化～

大阪府住宅供給公社 経営管理部
住宅経営課

豊嶋洋子

奈良県生まれ。
大阪府住宅供給公社住宅経営課団地再生グループにて、社会課題の解決を図りながら新しい取組みにチャレンジしている。

■団地の課題

緑豊かな住環境を有する泉北ニュータウン（堺市南区）に位置する公社茶山台団地は、敷地面積8.26ヘクタール、総戸数930戸の規模を持つ1971年建設の団地である。建設当時は子供が行き交う賑やかな団地だったが、現在は少子高齢化や空家増加により活気が失われ、自治会活動も立ち行かなくなってきた。中でも泉北ニュータウン全体の活性化に広域的に取り組むため、大阪府、堺市、大阪府住宅供給公社他の公的団体がともに協議・検討する場として、2010年4月に「泉北ニュータウン再生府市等連携協議会」が設立された。

これを機に、公社はニュータウン内で自社が管理する茶山台団地をリーディングプロジェクト団地に選定。「響きあうダンチ・ライフ」をコンセプトに、住民同士の交流が響きあい、「団地ならではの」新しいライフスタイルが育まれる住環境づくりに取り組んできた。

■DIY団地カスタマイズ制度の導入

公社が手掛ける団地の魅力向上の取り組みの一つとして、「DIY団地カスタマイズ制度」がある。一般的に賃貸住宅では、壁の塗装や棚取り付けをしたいと思っても、貸主の許可が必要だったり、退去時に原状回復義務が条件である等の制約がある。公社では、築年数の古い団地を中心とした空家の増加が課題となっている現状を踏まえ、2017年1月に「DIY団地カスタマイズ制度」を開始した。これは、届け出によりDIY部分の原状回復義務を緩和する制度で、入居者の部屋を自身の好みの住まいにすることで愛着を持ってもらい、長期入居を促進することが狙いである。対象は1965～1975年代に建設された高経年団地を

中心に、管理戸数の半数を超える約12,000戸とし、現在まで2年9ヶ月で20～40代の若年層を中心に制度利用者は350件を超えた。（図1）

■DIY拠点施設の導入

入居者のニーズの高まりにより、徐々に「DIY団地カスタマイズ制度」の利用者は増加しているが、まだ制度について入居者の認知は広まっていない。また、茶山台団地入居者に実施したアンケート調査の結果によると、「DIYをしたいがどのようにしたらよいかわからない」「サポートスタッフがいれば」「道具の貸出や材料の手配が相談出来る場所があれば」DIYをやりたい、といった意見も多く見受けられた。

公社は同制度の利用促進と入居者のニーズに応えることを目的としたDIY拠点施設の導入を決定。株式会社カザールホームと連携し、2019年2月から茶山台団地内に「DIYのいえ」を設置した。カザールホームとの連携は、堺市と公社ほか数企業が泉北ニュータウンの高齢化の課題解決の提案を目的とし開催した「泉北ニュータウンシニア向けサービス創出支援事業」において企業等とのビジネスマッチングを募集した際、同社からの提案がありコラボ検討を開始した。当初はDIYスクール形式の提案を受けたが、入居者のニーズ等によりこの形式での実施に至った。

この「DIYのいえ」は団地の空家2室を活用している。1室はDIY体験スペースとし、もう1室では実際にDIYした実例を見ることができる。DIY体験スペースには、DIYの工具を取り揃えたワークスペースがあり、工具を利用できるほか、専門スタッフによるDIY

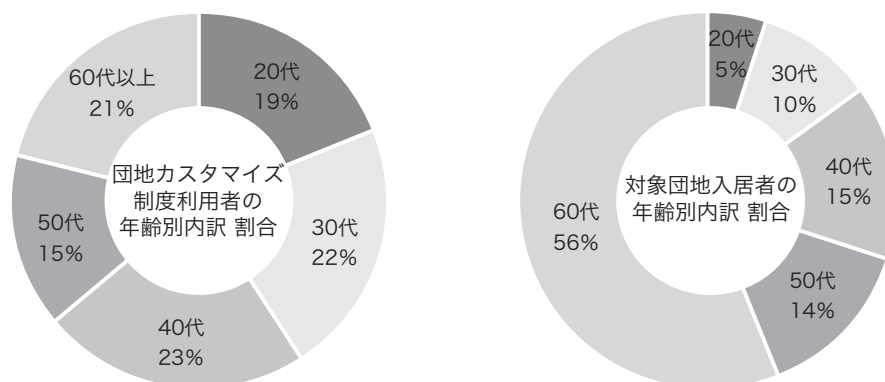


図1 対象団地の年齢層とカスタマイズ制度利用者の年齢別内訳



写真1 「DIYのいえ」外観



写真2 「DIYのいえ」内装

の技術サポートが受けられる。体験ワークショップイベントなども実施し、団地住民だけでなく地域にお住まいの方や入居を検討中の方も利用可能としている。

■「DIYのいえ」の効果

オープニングの日には、工具使用体験や子ども向けワークショップも開催され、多くの人で賑わった。参加者からは、「DIYはほとんど経験がなく、大変だったがもっとやってみたい」といった声や「子どもが小さくても遊べるスペースがあるので助かる。次回も参加したい」といった肯定的な声が寄せられた。参加者の多くは、DIYをしたことがない方々であり、初心者でも手軽に体験できるDIYメニューも準備している。こうしてオープンした「DIYのいえ」はそれから半年間で延べ来所者数360人を突破、同団地における入居者の「DIYカスタマイズ制度」利用の届出件数も2倍近くに増加した。

当初2019年9月までの期間限定としてオープンした「DIYのいえ」であるが、次第に常連の利用者が現れ、コミュニティ活性化の一端を担うようになってきた。利用者からの要望を受け、公社とカザールホームは2020年3月までの半年間の運営期間延長を決定した。固定の利用者も現れはじめたことから、ゆくゆくは事業者ではなく入居者等を中心とするDIYコミュニティ活動を見込んでいる。

■DIYカスタマイズ制度の今後の展望

現在、公社のDIY団地カスタマイズ制度利用者の多くは、40代までの若年層が中心であり、団地居住者の半数以上を占める60代以上のシニア世代に十分浸透していない（前出図1）。今後はより多くのシニア世代にもDIYを楽しんでもらえるイベントを企画すること等により、コミュニティ活性化だけではなくシニア層の生きがいづくりにつながることを目指したい。また、DIYをきっかけにコミュニティ再生の担い手を発掘し、住民たちが自主的に活動を継続し、団地コミュニティ作りへの機運を段階的に高めていく仕組みづくりが、今後の公社の重要な課題である。

■公社の役割

公社は「DIY団地カスタマイズ制度」により賃貸住宅への新規申込増加と住まいへの愛着増による入居期間の長期化を目指し、また「DIYのいえ」の運営では地域住民の交流の活発化を図った。

公社という住宅インフラを管理する団体が、地域コミュニティ再生に取り組むことに違和感を感じるとの意見もあるかもしれない。しかし団地に住む方々の繋がりを育むことこそが、21世紀の住宅まちづくりに求められる最も重要なインフラの1つになるのではないかと考える。今後も大阪府の住宅まちづくり政策の一翼を担う公共団体として、社会課題の解決を図りながら、時代の変化に合わせた柔軟な発想で様々な新しい取組みにチャレンジし続けたい。

（とよしま ようこ）



写真3 「DIYのいえ」利用状況

開かれた寮

立命館大学分林記念館

竹中工務店大阪本店設計部

永井 務
地田 聡

永井 務
1970年 静岡県生まれ
1993年 東京大学工学部建築学科卒業
1993年 株式会社竹中工務店入社
現在、設計部設計グループ長
立命館大学理工学部非常勤講師
大阪府建築士会担当理事

地田 聡
1980年 大阪府生まれ
2008年 神戸大学大学院自然科学研究科
建設学専攻修士
2008年 株式会社竹中工務店入社
現在、設計部主任

開かれた寮と題したが、何に対して開かれているのか、何が開かれているのか、その開きによって生み出されることは何であるのか。そのあたりを考えながら筆をすすめることにする。

■今日の大学の役割

2008年、政府は当時14万人だった日本への留学生を2020年までに30万人にふやすことを目指し「留学生30万人計画」を発表し、2014年に、文部科学省がグローバル化を牽引する大学として37大学をSGU（スーパーグローバル大学）に選定した。留学生は2018年で33万人を越え、目標を達成している。

一方、日本は少子高齢化を本格的に迎えるなか、まちづくりの課題をそれぞれの地域にある大学と連携し解決していく試みが広がっている。「国際化」、「地域連携」いずれも世代や国籍など多様な価値観が「交わる」ことが、今までにないものを生み出し、様々な課題を解決することが大学に求められている。

■まぜるキャンパス

これらを背景に「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」をコンセプト



写真1 OICキャンパス



写真2 立命館大学分林記念館

に掲げ、2015年春、立命館大学大阪いばらきキャンパス（以下OIC）は開設された。

茨木市が同時に整備した公園を取り囲むようにキャンパスは設けられている（写真1）。公園・大学が一体整備された「塀のないキャンパス」は、学生、教職員とともに老若男女を問わず、広く市民が集まり、交じり合うことで、多様な学びと共にまちづくりに関するイベントや活動が日々なされている「新しい大学のあり方」を表している。

■開かれた寮をもとめて

OIC開設から3年が経った2018年2月、立命館大学分林記念館の設計施工コンペが行われた。これは、2019年4月に開設される「グローバル教養学部（GLA）」のための寮と国際交流機能を併せもつ施設の建設を分林保弘氏（立命館大学OB、日本M&Aセンター代表取締役会長・創業者）の全額寄付事業にて実現するプロジェクトである（写真2）。

GLAは、リベラル・アーツの知的蓄積を継承しつつ、世界の捉え方や歴史認識をアジアの文脈から再定義し、教養を実践と結びつけることを重視した学部である。ここでは、自らヴィジョンを提示し、変化を創り出していく人材育成を目指している。

このような教育に合致する寮をいかに創り出すかが大きな目標であった。

計画に際して、国内外の学生寮、国際寮、企業寮など多数みて回った。それぞれ特徴があり、数名のクラスターで共用エリアを形成するもの、各フロアに共用エリアを形成するもの、個室を二人でシェアするものとさまざま

まであった。そこで感じたのは、一定のクラスター（人数・フロア）で構成された場合、別のクラスターとのかかわりは希薄になりがちなことであった。一度、クラスターに入ってしまうと、一定のつながりは生まれるが、そこで少し距離をとりたいときに逃げ場がない。逆に居心地が良い場合は、さらなるつながりを求めて積極的に他のクラスターにはいかないかもしれない。「開かれた寮」とするには多様な居場所を設けることで、寮生がシーンに応じて選択可能にする必要がある。このような想いのもと、200名の寮生（国内学生：留学生＝3：7）全員が、選択的に多様なつながりをもてる開かれた寮を計画した。

■つながりを生み出す開かれた寮

寮生の接点を最大化するために、みんなが集まるダイニング、リビングを、階段を持つ4層吹抜けの廻りに配置することで、フロアを越えたつながりや一体感が生まれる空間を計画した（写真3）。GLA学生にとって、寮生同士の新たな出会いは、多様な価値観、多様な文化との遭遇である。この機会をできるだけ増やし、生活の場と学びの場が融合するあらたな寮こそが、GLAの教育方針にふさわしい、ここでしか実現できない住まいと考えた。吹抜け階段は、昇り降りしたくなるように、ゆったりと歩きやすい寸法とした。階段や廊下を介して、各階で食事するダイニングの様子や、ゆったりと過ごすリビングの様子が見てとれる。視覚に映ることで、そこに行ってみたい、少し離れておきたいといった選択が生まれる。有無を言わず呼びかけら

れることもあるかもしれない。そのような場合も含めて、つながりのきっかけを与えてくれる空間をここでは開かれた寮とした。

■視線、距離感、気配

開かれた寮について、もうすこし深く考えてみる。一概に「開かれた」というが、その開き方はさまざまである。今回の計画において、吹抜け廻りはオープンでありながら、いくつもの工夫によってある一定の距離感を作り出している。

最も大きな工夫は、手摺である。これがガラス手摺であったのなら、見えすぎる緊張感から、留まることを躊躇する空間になったかもしれない。足元に大きな木パネルを配置して、上部を透かした手摺は、視線の抜けを与えながら、空間にまとまりを同時に作り出している。また、ダイニングでは、階高を抑え、それに呼応してテーブルや椅子を通常よりも低くし、開かれつつも居心地の良さを作り出している。

このように、開き方には安心感や距離感、視線の制御、気配の感じ方が大きく関係してくることがわかる。

■文化に開いた寮

寄付者である分林氏は、能楽師の家に生まれ、大学3年生時に世界を見たいという想いから、貨物船で海を渡り、全米35州をバスで横断しながら能楽公演ツアーを企画し実現した。その経験から自らの国のアイデンティティの深い理解と、異なる文化・価値観の出会いが若い学生にとって重要であり、それを後進に

伝えたいとの思いからこの寮は生まれている。この想いをかたちにすべく、寮の中に、能舞台、日本庭園のある茶室を計画した。さらに、日本の住まいの特徴である2足制の採用、囲炉裏を感じるダイニング、小上がりと縁側のあるバルコニーなど、住まいながら日本の風土、文化に触れる和の設えを持った寮を実現した。

これは、留学生にとっては、初めて体験する文化であり、やや不自由に感じるかもしれない。しかし、これを国際相互理解を深めるきっかけとなる文化の壁と捉えれば、それを乗り越えていくことが、多様な価値観との出会いであるともいえる。この点において、日本文化という基軸を与えることで、国内外それぞれの学生にアイデンティティを意識させるきっかけを与えている。文化に開く寮は、寮生の価値観を大きく刺激するものである。

■まちに開いた寮

寮の1階は、「混ぜるキャンパス」のコンセプトを発展させた新たな交流スペースとして、寮生と、学生、教職員、そして広く地域の人々が自由に行き交うストリートとした（写真4）。2019年10月開催された「Asia Week 2019～立命館でアジアとつながる国際交流フェスタ～」では、このストリートに設けられた様々なフィールドで、数多くの多国籍イベントが行われた。多様な交じり合いはグローバル化を迎える今、新しい「まち」の姿を生みだしている。

（ながい つかさ、ちだ さとし）

※写真2-4 Photo by 母倉知樹



写真3 フロアを越えたつながりを生み出す吹抜け



写真4 1階の交流スペース

商店街HOTEL講 大津百町

～大津の空き町家再生～

無有建築工房

玉井 淳

1969年京都市生まれ。1976年より大津市在住。1995年関西大学大学院工学研究科修了、同年無有建築工房に入所、建築家竹原義二に師事。個人住宅から教育施設、乳幼児施設、福祉施設、古民家の改修、店舗など多岐にわたる設計監理を手掛ける。2018年より大津宿場町構想実行委員を務める。

■大津百町

琵琶湖を間近に望む大津は、江戸時代には東海道五十三次最大の宿場町として、また三井寺の門前町、港町としても大いに栄えた。町衆たちは通りを挟んで町組を形成し、その数がおよそ百カ所あったという賑わいぶりから「大津百町」と称された。また、滋賀県は歴史的建造物の宝庫で、国宝、重要文化財の建造物数は京都、奈良に次いで3位である。国指定の重要無形民俗文化財である大津祭は13基の曳山が華やかに秋の大津を巡行する。



写真1 大津祭。商店街にある丸屋の前を巡行する曳山

■棟梁による町の再生

恵まれた観光資源や豊かな自然が身近にあるにも関わらず、インバウンドで賑わう京都の喧騒をよそに、大津駅前や商店街は人通りが少なく、今も町家が多く残る中心市街地では年々空き家が増え、駐車場やマンションに姿を変えているものも少なくない。地域工務店である、株式会社 木の家専門店 谷口工務店の谷口弘和社長は、大津の町の魅力と現状を目の当たりにするなかで、何とかして大津の町家を残したいと考えた。大津の町の様々な組織や住民との関わりを深めていく中で、大工の「棟梁」がかつては建物や町づくりを通じて地域の暮らしを支え、尊敬の念を集める存在であったことに着目した。谷口工務店は多数の社員大工を率いる工務店である。町家を再生することで大工の技術を若手に伝えながら、「現代の棟梁」を育成することが町を守ることにつながり、それこそが工務店の使命ではないかと思いついた。そして2016年に大津駅前で、閉店する和菓子屋の町家を借り受け、我々が設計監理を行い、ベテラン大工

の指導の下たくさんの若い社員大工が集結して「大津百町スタジオ」として蘇らせた。再生した町家を公開することで、大津の人たちに町家が再生できることの生きた事例を示すことができた。



写真2 大津百町スタジオ

■メディアとしての商店街ホテル

「大津百町スタジオ」の本来の用途は谷口工務店の大津支店であるが、生まれ変わった町家の空間を体験してもらう意味でも地域の会合やイベント、料理教室等に開放した。こうした足がかりのもと、棟梁による町家の再生を本格的に事業化することを考えていた谷口社長と、雑誌「自遊人」を発行し、新潟県南魚沼市で体験型宿泊施設「里山十帖」を営む株式会社自遊人代表でクリエイティブディレクターの岩佐十良氏との出会いがあった。大津の生活文化に根差した商店街を魅力的なコンテンツと捉えた岩佐氏は、町家を改修したホテルを「メディア（＝媒体）」と位置づけ、大津に泊まり、食べて、飲んで、買ってもらうことで、消費を生み出すとともに、体験者自らに大津や滋賀の魅力を情報発信してもらうという仕組みづくりを提案した。この「商店街ホテル」構想は経済産業省の平成28年度地域未来投資促進事業費補助金（まちなか集客力向上支援事業）に採択された。応募にあたっては、大津市の中心市街地活性化基本計画の一環として、民間主導の事業を大津市の都市再生課の全面的なバックアップを得ることで実現できた。事業計画において稼働率と採算性、改修費を建物の規模を元に試算する中で、用途変更の確認申請が不要な床面積100㎡以下の一棟貸しタイプを5棟（丸屋・鈴屋・萬屋・鍵屋・糺屋）、東海道に面した規模の大きな2棟の町家はホテルタイプとしてそれぞれ客室を5室（茶屋）と3室（近江屋）、そして共用ラウンジ、レセプションを

設け、計7棟・13室という規模での事業化が決定し、全体を総称し、「商店街HOTEL講 大津百町」と名付けられた。「講」とはかつての相互扶助組織のことであり、ここでは商店街を観光資源化することで消費を取り込み、旅する人に町の活性化を担ってもらおうという願いが込められている。一人一泊150円を目的税のように宿泊費に組み込み、商店街に寄付する「ステイ・ファウンディング」という仕組みが作られた。ホテルのコンシェルジュは単にホテルに常駐するだけでなく、町に繰り出し、商店街の店や地域の方と宿泊客とのつなぎ役として大津の町の魅力を伝える役割を担う。開業して1年が過ぎ、ホテルの存在が商店街や地域にとってオープンでパブリックなメディアとして定着してきている。決して観光地然とした商店街ではないが、宿泊客は高い満足度を得ながら町歩きを楽しんでいるようだ。対応する商店街の人たちの嬉しそうな顔を見ているとホテルができたことで町が再び動き出したことを実感している。

■まちもどしと現代の町家

大津の町の再生を考えるにあたり、まちづくりという概念ではなく、「まちもどし」というコンセプトを掲げている。新たに作るのではなく、もとの形に思いを馳せ、積極的に過去を辿ることによってこの町にふさわしいこれらの景観とは何かを考えることである。「鈴屋」の並び(写真3)はファサードがタイル貼りの壁や看板で隠されているが、中身はすべて木造の町家である。商店街の歴史はアーケードができた時が一つの転換期であり、その前後にファサードが付加され、看板建築となったことが推察されるが、調査し増改築の履歴を紐解いていくと、町家の構成要素である、店の間、土間(台所)、吹き抜け、坪庭があり、店舗併用住宅であったことがわかる。着手が決まると、ほぼすべての町家で吹き抜けや庭に増築、増床されていた部分を減築するところから始めた。実際に床や壁をめくってみたところ、材の腐食や構造的な問題など想定外の事態にも遭遇した。今回の改修では、地域最高クラスの客単価を想定しており、快適性を担保するために、徹底した遮音、断熱性能の確保を実現することが大前提であっ

た。隣家に住人がいる長屋、客室のすぐ前を車道が走るものといった具合に、おおそホテルにふさわしいとは言えない周辺環境といかに調停するか。難しい環境だが、実はこの制約が一般的古民家再生とは異なる空間性を獲得することに大いに寄与している。外壁面に関しては、内外どちらかは土壁下地の左官仕上げ面を残し、それにより内断熱とするか、外断熱とするかを決定した。長屋の場合、隣家と接する界壁面はロックウールを充填し、遮音シート、石膏ボード2重貼りの遮音壁とした。いずれもふかし壁となり、その面の意匠が自由になった。例えば萬屋は様々な調合による多彩な色目の土壁、鈴屋は壁紙と塗装という具合に、ふかし壁面は各棟でテーマを決めて材料選択を行った。性能を付加し、新旧の仕上を対比させながら空間を構成していく。今回の町家再生では「復元」ではなく「再編集」を丁寧に試みていった。各棟に必ず配された庭は、荻野寿也氏の手によるもので、棟ごとに趣を変え、アカマツ、ツバキ、ダイスギなど日本らしい風情を感じるものを中心に、手水鉢、灯籠などが配され、商店街に彩を与え心安らぐ小世界が実現した。大津市が宿場町の再生を目指す「大津宿場町構想」のもと、私も地元大津のために現代の町家のデザインを通して建築的課題・地域課題に取り組み、併走していく所存である。(たまい あつし)



写真3 商店街の中にある鈴屋。隣は川魚専門店



写真4 旧東海道に面したレセプション棟の近江屋



写真5 丸屋。土間から坪庭まで視線が抜ける



図1 付近見取り図。改修した町家は商店街と旧東海道を中心に点在する

駅という概念の パラダイムシフト

西日本旅客鉄道株式会社
岡山支社企画課

二反田陽介

1996年大阪府生まれ。2018年に西日本旅客鉄道株式会社に入社し、尾道駅・岡山支社企画課で勤務。主に尾道駅舎建替え事業を担当。

■「まち」と「えき」

●尾道という「まち」

尾道という場所を端的に表す表現に「箱庭的」という表現がある。北側に山が位置し、細長い平野を挟んで南側に穏やかな瀬戸内海の尾道水道が広がっており、山と海に挟まれた稀有な平野で「食」「文化」「芸能」「スポーツ」と多種多様な営みが生み出されてきた。このようなさまを指して人は「箱庭的」と呼ぶのであろう。実際に訪れてみるとその表現がずとんと腑に落ちるのであるが、列車を降りて改札を抜ければ瀬戸内海の美しい島影や海上に広がるどこまでも深い蒼天、尾道水道を吹き抜ける潮風が五感の奥深くにまで飛び込んでくるのである。さらに、これらの要素に加えて尾道はせとうちエリアの観光拠点として、またしまなみ海道に臨むサイクリストの方々の聖地として、特に近年は国内外問わず多くの注目を集めているスポットでもある。このような才色兼備たる尾道の玄関口がJR尾道駅であり、2019年3月10日に新駅舎が開業したばかりだ（写真1）。尾道駅の新駅舎設計及び建設において大切にされた「マインド」というところから各論に入りたいと思う。

●「まち」に馴染み、「ひと」に愛される駅舎であること

「まち」と「えき」、「ひと」と「えき」は不可分の関係にあり、「まち」の風土に溶け込むことまたそこで暮らす「ひと」に愛されることは「えき」が存続するうえでのまさに必要条件である。尾道新駅舎についても上記2点を念頭に置いた入念な設計がなされている。というのも、新駅舎には、日本の鉄道の黎明期より尾道の「ひと」に愛されてきた初代尾道駅舎（明治24年開業）の「瓦屋根」や「深い軒」といった特徴的な形態を踏襲した設計やプラットホーム上部の張り出し、屋根勾配を工夫することによる尾道の「まち」に馴染むようなデザインが施されている。

さらには、北に位置する山と南に広がる海をつなぐというコンセプトのもとに駅コンコースに大きな吹き抜け空間とトップライトを設置する工夫や、プラットホーム・コンコース・駅前広場が同レベルに建て付けられていることで列車を降りた瞬間から尾道を味

わうことができるような設計としているのである（写真2）。2階に目を向ければ、眺望デッキはその上部にある駅舎南側の屋根を大きくくり抜いたようなデザインとなっており、尾道水道の景色を「借景」として楽しむことができる眺望空間としている（写真3）。

このように尾道新駅舎は駅舎全体が「ひと」「まち」との調和を目指した設計となっている。



写真1 山と海に囲まれた尾道新駅舎



写真2 改札を抜けてすぐの開放的な吹き抜け空間



写真3 展望デッキから臨む尾道水道の景色

■尾道駅的设计

●「シンクロコミュニティ」

尾道駅舎建替えの背景には耐震施工の必要性や日常利用と観光利用を加味したキャパシティの問題など様々な要因が複雑に絡み合っていたわけだが、特筆すべき大きな目的はやはり将来に向けて駅としての機能を大きく昇華させること、すなわち駅とは列車に乗り目的地に向かうべくただ通りすぎるだけの通過点に過ぎないという従来の固定観念からのパラダイムシフトを目指すものであり、観光で尾道を訪れた観光客の方からコンビニの帰りに偶然駅に立ち寄ったという地元の方ま

で、多種多様な人々が集う、交流の場となるというありたい姿を実現することである。さらにもう一段階深掘りすると、交流の結果として人々が相互に作用し合うことから生まれる全く新しいアウトプットを量産できるような拠点となるようなイメージであろう。まさにこの考え方こそが「シンクロコミュニティ」であり、新駅舎設計の根幹をなすコンセプトとなったわけである。

●尾道駅「駅ナカ店舗」のミッションとは

新駅舎には飲食・コンビニ・レンタサイクル・宿泊施設など多くの店舗が揃っているが、尾道新駅舎の駅ナカ店舗が担う重大な役割について改めて述べたいと思う。尾道は観光需要の高まりがあるとはいえ、平日の旅客の7割以上が通勤通学など日常使いのお客様で占めており、やはり地元の方々の利用割合が高い駅であることはいうまでもない。ターゲットをそこに絞って大衆認知度の高いチェーン店舗を導入すれば確かに一定の需要はあるのかもしれないが、重要なのはあくまでも「駅を交流の場とするにはどうするか」という核となるマインドであることにに基づき、尾道のよさを十二分に備えた魅力あふれる店舗を導入することにより、尾道を初めて訪れた方でも到着してすぐに尾道のいいものに会うことができるようになっているのである。例えば、駅舎1階部分の「食堂ミチ」は昔ながらの大衆食堂を模した作りとなっており、地元尾道の郷土料理を気軽に味わうことができるのみならず、カウンター席をメインとした席配置となっているため隣のお客様との距離が非常に近く、そこで分け隔てなく自由なコミュニケーションが自然発生的に生まれているような店舗である。



写真4 おのまる商店

また、同じく1階部分の「おのまる商店」はレンタサイクルとカフェが併設された店舗となっており、地産商品をベースにした物販やカフェスペースなどが展開されている。また、テイクアウトメニューの中には地元の高校生と共同開発した商品があり、地域の方々の思いを感じることのできる店舗となっているのである。

尾道エリアの玄関口である尾道駅や駅ナカ店舗は、訪れたお客様が尾道のよさに出会う場となるのみならず、駅で商品を見たお客様が「街に足を運んで本店に行ってみよう」「こんなに素晴らしい商品を生み出した人に会いに行ってみよう」とワクワクすることや、そこに付随した次なる新しい出会いを創出することを目指すものであり、そのためには建物の構造としての開放性が必要なのである。構造物の内部であっても遮るものが少なく「オープンな空間」であることが、周囲のひとやものに対する新しい出会いをもたらすのだと考えている。

●駅ナカ宿泊施設「m3HOSTEL」



写真5 天井の視点

というなんとも尖った設計となっている（写真5）。

従って、いずれの客室においても高さを活かした空間となっており、3階層個室タイプのプライベートルームや2名定員のバンクベッドルーム、4人1単位のコンパートメントルームなど、個性的な部屋が揃っている。各部屋に備え付けられている積層した寝台は、75mm角の柱と梁をドリフトピンで固定するKES構法の専用金具を開発し、柱間に24mm厚の杉板を落とし込む板倉構法として強度を確保している（写真6）。



写真6 客室の空間。縦の余裕が窺える

また、客室の天井高は廊下側からは縦に二段重ねになったドアに表れている。上部の扉

は上段のベッドから宿泊者が自由に開閉できるが、廊下からは中が見えない構造になっており、客室と廊下双方に開放感をあたえている。さらに、客室の窓から、片方では尾道水道や向島までを一望できる雄大な景色、もう一方では山陽本線のどこか懐かしさあふれる黄色い列車や見事な山と空との対比というように、多様な側面の尾道を味わうことができるような工夫が施されているのである。

●オープンマインドな空間

壁が作り出すある種の閉鎖性を排除することにより生み出される空間の余裕はひとの心の余裕に繋がり、周囲に対してオープンであることは新しい出会いを一層感動的で印象的なものにすることは既述の通りであるが、ここでもう1つの特徴にもフォーカスしたい。それは「空間に対する可変性」というポイントである。余裕を備えた空間においては室内のあらゆるレイアウトが自由自在であり、空間として自由であり続けることができる。尾道新駅舎2階のブックラウンジにおいてもこの可変性が最大限有効活用されており、本棚・ベンチ・テーブルのレイアウトを定期的に変更することにより、そこで時を過ごす人々が新しい「ひらめき」や「考え方」に出会えるようにレイアウトを工夫していくのだ（写真7）。これは空間が生み出す一種の「アハ体験」であり、「オープンマインド空間」が秘めた可能性の側面であるともいえるのではなかろうか。



写真7 駅舎2階ブックラウンジ

ネット社会の発展に伴い閉鎖的であることが当然となりつつある昨今の時勢において、尾道新駅舎全体が作り出す「オープンマインドな空間」が多種多様な人々にとってかけがえのない場所となることを願って締めくくりとしたいと思う。

写真：たけくに てるあき
(にたんだ ようすけ)

人に開いて 仕事を生む空間

～障害のある人とともに～

Good Job!センター香芝
センター長

森下 静香

Good Job!センター香芝センター長。たんぼぼの家にて、障害のある人の芸術文化活動の支援や調査研究、アートプロジェクトの企画運営、医療や福祉などのケアの現場におけるアートの活動の調査を行う。2012年より、アート、デザイン、ビジネス、福祉の分野をこえて新しい仕事を提案するGood Job!プロジェクトに取り組む。Good Job!プロジェクトでは、2016年度グッドデザイン賞にて、金賞受賞。編著に『インクルーシブデザイン：社会の課題を解決する参加型デザイン』、『ソーシャルアート：障害のある人とアートで社会を変える』（いずれも学芸出版刊）など。

ここにいと、いろいろな音や声きこえてくる。カフェのスピーカーから流れる音楽やお客さんたちの声、工房の3Dプリンターやレーザーカッターが動く音、電話の音やそれをすばやく対応するコンシェルジュ担当のメンバーの声、南館と北館をメンバーとスタッフが行き来するたびにあく自動ドアの音……。いろいろな事が同時に起きるスペースなので、いろいろな音がするが不思議とうるさくはなく、その開かれた雰囲気がGood Job!センター香芝らしいと思える。



写真1 Good Job!センター香芝南館 外観

Good Job!センター香芝（以下、Good Job!センター）は、2016年9月に奈良県香芝市にオープンした。私たちはこのセンターを「誰もががはたらく喜びを実感でき、主体性をもって暮らせる社会」をめざし、障害のある人とともに、アート、デザイン、ビジネスの分野をこえて、社会に新しい仕事をつくりだす実験的な場として構想した。Good Job!センターを運営するたんぼぼの家^{*1}は、奈良を拠点に、45年にわたり、芸術文化活動を通して、障害のある人の自立と社会参加をめざし活動してきた。本項では、スタッフとして立ち上がりから関わってきたなかで感じてきた理念と建築の関わりや、建設のプロセス、オープンしてからの運営を紹介したい。

■オープンな設計プロセス

香芝市は人口が約8万人、自然に囲まれた奈良県北西部にあり、大阪近郊の住宅地として発展してきた。長年たんぼぼの家の支援者であった大阪市在住の吉本昭さまより「これからの障害者福祉の発展のために使ってほしい」との申し出をいただいたことをきっかけに、この地に建設することになった。ちょうど私たちが、障害のある人のアートを仕事にしていくながめさままなプロジェクトを

行っており、障害のある人にとつても、地域にとつても意味のある仕事をつくる場にしようと思つた。

設計者募集には103組の応募があり、東京に事務所を構える大西麻貴+百田有希/o+hに決定した。Good Job!センターがオープンしてから建築を学ぶ学生をはじめとした多様な見学者が訪問しているが、設計者をなぜo+hに決定したかをよくきかれる。Good Job!センター建設にあたっては、建築の視点、デザインの視点、そして障害福祉の視点から3人の専門家にアドバイスをもらいながら、法人が設計者を決定したが、私たち現場のスタッフが考えていたのは、建築自体に力があり、新しい人や新しい仕事を連れてきてくれるような建物であつてほしいということだつた。そしてあいまいな私たちの構想に対して、一緒に考えてくれるような柔軟な建築家がいいと思つたことが理由だ。実際に設計者が決定した2014年1月から建物が竣工する2016年9月までの約2年半にわたり、1カ月に1～2回のペースでo+hに奈良に来てもらい、議論を重ねた。ミーティングでの議論を経ながら、設計も大きく変化したり、その都度、模型もつくられた。また、地元の地場産業のメーカーや長くたんぼぼの家に関わっている研究者や、デザイナーなどいろいろな人たちと方向性について話し合う場ももつた。また、o+hと私たちスタッフが一緒に、流通倉庫の参考に企業や小売店の流通の現場を見学にいったり、他のアートに取り組む福祉施設などにも見学に行ったりもした。o+hが制作した5分の1のサイズの大きな模型をたんぼぼの家のギャラリーに展示し、セミナーや見学などでたんぼぼの家を訪れる人たちにも、私たちの新しい挑戦に対し、意見をもらうこともあつた。建物だけでなく、照明や流通倉庫の棚、サイン、そしてフラッグ、テーブルなどもクリエイターやデザイナーと一つひとつ議論し、実現されていった。^{*2}

以前にo+hがインタビューに答えた文章のなかに「その状況と一緒に流れてみる」という言葉があつた。設計の手法としての、私たちユーザーの参加型デザインというよりも、寄り道したり、迷ったりしながら、それすらも楽しく一緒に旅をしているような感覚だつた。

その都度かわる設計や模型に素人ながらにこんなに変わるものだろうかと驚いたりもしたが、最終的には土地の文化や福祉やものづくりの状況、私たちも未決定な部分までふくめて、最初のプロポーザルにあった「街並みを変えるアートの森」というもとの設計に戻ってきたようで、とても不思議だった。

■働く人にとっても訪れる人にとっても居心地のよい空間

Good Job! センターの建物は道路沿いに銀行をはさんで2棟からなる。南館には、デジタル工作機が並びオリジナルの商品開発や製造を行う工房、国内外の障害のある人が関わりつくられた約4,000種類の商品が並ぶストアと商品を全国へ流通させるストックルーム、地域の人たちも利用できるカフェ、オフィススペースがある。大きな倉庫のようなワンルームのようでありながら、斜めに立つさまざまなサイズの壁が機能をゆるやかにわけている。天井が高く、明るい広い、みんなで作業ができたり昼食をとったりできる広いスペースもあれば、木の影のように落ち着いて作業できる奥まったスペースもある。建物の入り口からは、壁を1枚へだてたソファのある休憩スペースはみえないが、奥に進むとソファがみえてきて、さらに進むと工房の奥の作業スペースが現れてくるように、視線をずらすとみえてくるものがある。2Fのストアとストックルームのスペースにも境はなく、お客さんもスタッフと同様に行き来し、購入する商品を選んでくる。カフェのお客さんが工房をのぞくこともある。



写真2 南館

平屋建ての北館は南館に比べるとぐっと天井が低く、落ち着いた空間だ。自由な創作活動に取り組んだり、うたやダンスなどのパフォーマンスアーツのプログラムを行ったり

する。南館は来客や打ち合わせなど多いが、北館はふだんはメンバーとスタッフだけが行き来するため、少し仕事や人に疲れたとき、またリフレッシュしたいときに北館に行くこともできる。



写真3 北館

GJ! センターをつくる際に意識したことに、表と裏の仕事をつくらず、すべてが表の仕事となるようにということがある。たとえば流通の倉庫というと、バックヤードというイメージがあるが、ここではすべての仕事を楽しみながら働いてほしい、そもそも仕事には表も裏もないのではないかという考えがあった。デザイン評論家で編集者の藤崎圭一郎さんは、Good Job! センターを訪問し、「裏があるから表がある。だが、この施設で「表」と対になっているのは「裏」でなく「奥」だと思った。表と裏は互いに依存し合っているが、奥は表から離れるほどに自立して表の世界とは別の世界が立ち現れる。」*3と書いた。「壁がスペースをわけるのではなく、壁が空間や活動をつないでいく」、さらには「南館の奥の奥として、道路をはさんだ北館がある」ということは、私たちの日常をよく表してくれている。

■働くことと遊ぶことが両立する空間

オープンして3年がたち、いろいろな活動や仕事が出来、日々空間をめいっぱい使っていると感じている。一番広いスペースにある大きなテーブルも、朝は納期がせまったオリジナル製品の梱包の台になり、お昼には昼食のテーブルになり、午後からは新聞を読みあうワークショップの場になり、夕方には企業の人との打ち合わせの場となるように、一つのスペースが1日のなかでも役割をかえる。

また、ときには祝祭の空間として、地域の

人に来てもらうマーケットやパーティーの場になったり、セミナーやコンサートの空間になったりもする。2018年に行った京都市立芸術大学とのアートプロジェクト「状況のアーキテクチャー」の成果のパフォーマンス公演では、南館を全面的に使い、パフォーマンスグループのcontact GonzoとヒップホップMCのShing02とGood Job! センターのメンバーやスタッフが出演し、100人を超える観客との境をもこえる時間と空間をつくりだすことができ、この建物の許容の広さを実感した。



写真4 「状況のアーキテクチャー」公演

私たちがめざすGood Job! や、新しい仕事は、最先端の技術を使ったものやトレンドの先にあるといったような意味ではない。今はまだないかもしれない仕事、まだ出会っていない人の可能性をも包摂できるような感覚から生まれてくる。そのためには、すでにある仕事や状況を当たり前ものとして受け取らずに、根底を疑ってみる、かわりうる可能性を否定しないという思いを込めている。変化していく使い方や状況にも応じてくれる建物と今後も手を加えながらつきあっていくことを楽しんでいきたいし、そこからまた新しい仕事が出来てくるのだと思っている。

*1 たんぽぽの家は、社会福祉サービスを提供する社会福祉法人わたぼうしの会、国内外の団体とネットワークを結びながら、さまざまなアートプロジェクトを行う一般財団法人たんぽぽの家、そして、任意のボランティア団体である奈良たんぽぽの会の3つの組織からなる。

*2 サインはUMA/design farm、倉庫棚と展示什器は吉行良平と仕事、ソファとテーブルは木工房ようび、照明はNEW LIGHT POTTERY、スピーカーはSonihouse、フラッグは福井恵子。建物とともに一緒につくってきたこれらの什器などにもその過程の思い出と愛着を感じている。

*3 「壁は仕切りでなく共生の証? アートで障害者の仕事を広げる『Good Job!センター』」
<https://byronjapan.com/archives/14108>

写真1～3：増田好郎

(もりした しずか)

開かれた 雲の上の図書館

高知県梼原町立図書館
館長

見目佳寿子

1996年3月京都大学文学部西南アジア史学科卒業。

1999年3月京都大学大学院人間環境学研究所修了。修士（認識人類学）。

東京の民間企業勤務を経て、2015年秋より梼原町に移住。梼原町生涯学習課にて図書館の準備開始。2017年5月から現職。2018年5月図書館開館。

ゆすはら雲の上図書館webサイト：
<http://kumonoue-lib.jp/>



高知県梼原町立図書館の全景

■ 地上の楽園

2018年5月26日、雲の上の図書館がオープンした。町においては初めての公共図書館である。

高知龍馬空港から車で約3時間。私は4年前の春、高知県梼原町（ゆすはらちょう）を初めて訪れた。春のうららかな日差しを浴びながら海沿いを走り、細い山道をくねくね登る。時折、ウグイスのさえずりが耳に心地よい。

町に入ると、電線を地中化した非常にコンパクトで瀟洒なたたずまいの街並みが目に入る。道行く高校生が明るく挨拶をしてくれる。都会ではまずない経験に驚きながらも挨拶を返し、心も伸びやかに開放されていく。

由緒ある三嶋神社は木の屋根付きの橋を渡って川の対岸にあり、橋の下に流れる川の清い深緑の流れにキラキラと魚影が見え隠れする。ここは地上の楽園かもしれない。

■ わくわくする図書館構想

「図書館づくりは人づくり」

この町に初めてつくる図書館というのは、昔のようにシーンとした館で読書だけをするのではなくて、自由に遊びに来て、知り合いと出会ってわいわい賑やかにやってもらいたい

場所で、多世代が交流する文化のコアとなる。既存の文化や絆や結いの風習を大事にしながら進取の気風を持って外部のもたらす新しい文化や知識を学ぶ。子どもたちに夢を与えるために本棚にはフィギュアを入れる、町内に子どもの遊ぶところが少ないためボウリングをつくる、美味しいコーヒーが飲めるカフェをつくり、大人たちにはワイン片手に町の将来を語り合ってもらいたい。

矢野富夫前町長が語る、わくわくする図書館への思いに、私の心は共振し始めた。

こうして約半年後に、高知県と愛媛県の県境の山間の町、「雲の上の町」梼原に、東京から移住することになった。

町の掲げる総合戦略2015年～2019年までの5か年計画「小さな拠点ゆすはらづくり」の一環に、町立図書館の建設と複合福祉施設の建設がある。町が目指す「人と自然が共生し輝く梼原構想」の中核施設として、梼原初の公共図書館づくりに着手することになる。

■ 森林の恩恵を受ける町

梼原町は、高知県西部の日本有数の清流、四万十川の源流地域に位置する山深い町である。

町名の由来は、京から土佐に入国した藤原経高が当地に照葉樹の一種、栲の木が多く自生していた様子から、栲原と命名したと伝えられている。それ以来、1100年余にわたる歴史を持つ。

ユスノキはイスノキともいわれ暖地の山に生える。九州南部では、照葉樹林の主な構成樹種となる。樹高は20～25m、幹は直径1mになるものもある。材は硬く、箸、しゃもじ、ソロバン玉などに使われる。

町面積の9割が森林で、昔から木材、炭などの林産資源を豊富に生み出し、森林の恩恵を受けながら自然との共生を目指してきた。自立した町でありたいとの思いから、森、光、風、水、大地など様々な自然の恩恵を活かしながら生きものにやさしい低炭素な町づくりを進めている。栲原町森林組合は、国内でいち早く森林の管理に取り組み、間伐を繰り返しながら広葉樹林保護に力を入れるような取り組みを行っている。そして、団体としては国内で初めてForest Stewardship Council（森林管理協議会）の認証を得た。このように、地球環境に優しい森林づくりを進めている。

町内に二か所あるセラピーロードを歩く、自然の森や植物と清流の織り成す調和的な景観に癒されることだろう。特に、水音が胎内回帰を思わせるようなリズムをもって歩く人の心身を自然に調整し、調和に満ちた明るさと優しい気持ちにさせてくれる。

■膨らむ図書館像

栲原の図書館づくりの仕事をするようになってから私がイメージしてきた新しい図書館像とは、館内では小さいカフェもあって、心地よい音楽やざわめきの中で本を読みながらコーヒーなどが飲める、雑誌などをブラウジングしつつおしゃべりも普通にできる。国内・海外問わず旅行先にわざわざ足を運ぶようになるような場所であり、旅先の土地の情報を収集することができ、来館者はのんびりくつろいで思わず嬉しくなってくるようなところである。さらに知的好奇心を存分に満たす最新の本や雑誌や情報に触れられること。最新の情報を追うだけではなく、一般書、専門書、調査研究の基礎となる基本文献・参考文献を多く取り揃えて、生涯学習を担う拠点で



左上：2階の一般書フロアを俯瞰する。
雲の上の図書館は“いろは”48の独自分類で構成される。
右上：ライブラリー4「未来への思い」から4つのライブラリーを見通す。
各ライブラリーにはテーマをイメージした海洋堂のジオラマが展開。
左下：エントランスよりゆすはら“いろは”ウォールをのぞむ。
右下：栲原の棚田をイメージしたゆすはらステージ。
龍馬脱藩の里にちなみ、脱藩ウォールと名付けた本棚を展開している。

あるにふさわしい図書館能力を持つこと等など、とオーソドックスな図書館機能を保持しつつ、愛書家は一日心ゆくまで本の森を涉猟することができ、なおかつそれ以外でも楽しみが多い。

このような図書館のイメージを膨らませながら、図書館が地域に根付き、住民とともに進化成長していくために、図書館を身近に感じたことのない人が感じるかもしれない障壁をできるだけ取り除き、子育て中の母親も臆することなく来られるようにベビールームや多目的トイレに子どもトイレを設置するなど子育て環境を整え、図書館に来ることへの心理的敷居を低くしていくことを設計側にはお願いした。

そして、図書館と地域をむすぶ協議会の太田剛アドバイザーと毎月の協議を重ねながら、「静かにしなくてはいけない」「飲食してはいけない」など禁止事項が多い既存の図書館の持つ固定したイメージからもっと自由な図書館をつくるために、一日いても楽しめる滞在型図書館にするためのアイデアを練りながらプロジェクトを進めてきた。さらに、図書館が知の拠点となるために図書館の魂ともいえる選書を充実させるため、社会教育に資する



一般書、専門書を資料として選び、収集するとともに、地元の書店から本、町内の書店からは雑誌を購入する仕組みの構築を進めてきた。

また、蔵書の配置も当館独自の本棚構成を行っている。蔵書数は5年間で5万5千冊を目指しているが、本棚にゆとりを残しながら、美しい装丁本は表紙を見せる展示をするなど洗練されたデザイン空間に合わせて工夫を凝らしている。

■森のような建築空間

雲の上の図書館の建築は、森の町栲原にふさわしく、鉄と杉によって、森のような空間をイメージして建てられた。杉はすべて栲原町産材を使用した。本来、すべて町産材にすることが目標であったが、工期の関係で松は高知県産材である。

立地は、町の中心部にも程近い旧栲原小学校の跡地で、デイケアとショートステイが可能な福祉施設と隣接した複合館である。すぐ近隣にはこども園、県立栲原高校があり、学校帰りに図書館に寄りやすい。

鉄骨の柱と天井から無数に垂れ下がる木組みで表現されたのは森の木々であり、栲原の各所に見られる棚田を模したゆるやかな階段

状の造形とともに、豊かな里山の風景を表現している。盛り上がった段々の大地はステージとしてもトークやコンサートなどの様々なイベントに利用できる。複雑な木組みは建築の構造の一部であり、単なる装飾ではない。

屋根は四国カルストの山並みを表現し、屋根と屋根との間の天窓から木漏れ日のような光を取り入れる工夫がされている。

建築空間が出来上がったときには、澄み切った冬のひんやりとした空気感のように、緊張感を失わないながらも、木の爽やかな香りと靴を脱いで利用することで自然と身体がリラックスすることを感じた。小さいこどもはもっとも反応が早いから、思わず走り出したり飛び跳ねたりしてしまう。建物の中に入っただけの解放感というのは、自然の中での解放感とはまた一味違う良さがあるようだ。

建築を完成するまで、一階床は絵本コーナー以外で靴での利用想定での設計であったが、運営直前に1階入口で靴を脱いで入館してもらう運用に切り替えた。実際に、仕事をしながら森林浴をしているような気分を味わったのでこの切り替えは結果的に大正解だった。隈研吾氏もオープン式典にご来館されたときに「この方がいいね」とおっしゃっていた。

■ボルダリングもOK

正面玄関入ってすぐのコーナーにはボルダリングウォールがあり、本格的に登ることが可能だ。心も体もわくわくさせる、動と静が共存することのできる空間となっている。高さや難易度の異なる二つの壁にルートが作られている。専用シューズも準備しているので、果敢にチャレンジしてほしい。たっぷり汗をかいても更衣スペースがある。なお、年齢は小学生以上からとなっている。



ボルダリングウォール

建物の中央部の窓は大きくて、2か所を大きく開放することができる。屋根が重なり合った部分の天窓も開けることができる。エアコンのいらない時期の晴れた日には、天窓も芝生への窓も開放することにより、心地の良い風が吹き抜ける。こども達が芝生で遊べるように、図書館開館を始めてすぐに職員のアイデアでバドミントンやボールといった遊具の貸し出しを行うようになった。お正月には凧やコマの貸し出しも行った。

多世代の交流広場の使い方は、実に様々である。

■イベントも多彩に

図書館の企画イベントとして、交流広場に置いたグランドピアノの周りで、毎月音楽コンサートを行っている。今まで行った音楽の種類は、クラシックはもちろん、童謡、フォークロアからハワイアン、ジャズなど多岐にわたる。リラックスできる空間を演出するため館内で常に軽いBGMを流している。



交流広場でのコンサート風景（上下とも）

今年の10月には、愛知県のクラフト作家と画家の共同展示「宇宙と生命」を開催した。

本物の縄文式土器や弥生式土器の欠片や流木といった自然素材をできるだけ生かした作品の持つ独特な力強さが意外に図書館空間になじんでいた。

また、台風のためにまだ実現できていないが、こども園の秋の運動会は毎年この芝生で行う予定である。来年は是非運動会が実現できればと思う。

今年も青々と茂った芝生で、9月に県内のフラダンスサークルの方たち総勢200名の踊り子達がフラを踊るというイベントを行った。不思議なことに荒天が心配されていた時期だが、祈りが天に届いたのか青空を見せてくれた。

老人会のグランドゴルフ大会も晴天のもと図書館前の芝生で行われた。

今年も秋祭りの神祭シーズンがやってきた。町内に何か所かある三嶋神社で神楽が奉納される。津野山郷の開祖、津野経高が京より土佐梶原に入国した延喜19年（919年）から代々の神職によって舞い継がれてきた国の無形文化遺産である。古式ゆかしい神社で、荘厳な趣で舞われる。軽快な笛や太鼓のリズムやビートは異国情緒を感じさせる時もある。ユーモラスな表情の神様達が楽し気に踊るのを見ていると、地域の人々のおおらかさと温もりを感じる。雲の上の図書館は、神楽が象徴するように、自由に集い、楽しく語り合い、その昔坂本龍馬を脱藩させたように、新しい時代を担う人材が育つ知の拠点となる。

最後に、矢野前町長はじめ図書館づくりに関わり、支援してくださったすべての皆様にご場をお借りして感謝申し上げます。

（けんもく かずこ）

今回の特集を組むにあたって「開かれた」先の「繋がる」という事を再認識したように思う。人々は繋がる事で新たな楽しみを得ることができし、感動することができる。それにしても、日本語の「つながる」という言葉には、ものを単につなげる「connect」という意味だけではなくそこから何かが発展していきそうな雰囲気が見えてくるように思うのは私だけだろうか。

(黒柳 亮)

今回の特集は、いままで閉じられていたものが開かれることで、新しい価値が生まれているのではないか、という議論から始まった。紹介された事例から見えてきたのは、その対象はスペースのみならず、情報・プロセス・ノウハウ・考え方と多様な広がりをみせていたことであった。そして、その為に必要なモノ・コトとして「余裕」「寛容さ」「信頼」といったキーワードが見えてきたように思う。

(赤川貴世友)

時代の変遷により空間の評価軸は、成果物の美しさが評価される時代から、作り上げるまでの過程やスキーム・作った後の社会的貢献性や存在意義が評価される時代に変化を遂げていると思う。今回の「オープンマインドな空間」は、新たな空間価値を創造する為の手法の一つであり、更には完成後に作り手の想像以上の価値が新たに創出されそうな、期待感溢れる空間ではないだろうか。

(東 奈生子)

各概論で述べられている様々な「開かれる」取り組みを拝見し、当たり前と思っていたものの枠組みを崩して、自己の領域を他者と重ねることで、新たな価値や予想外の反応を得られることを感じた。自身のワークプレイスについても、何のために、何に対して開かれるのか。デザイン事務所に囚われない何かを当てはめることで、既知感のない面白い場所を作ることができるのではと思索する。

(今井充彦)

編集後記

インテリア・住宅系分科会

かつて学習塾の学生寮だった施設を、ホテルにリノベーションした施設を見学したが、寮という利用者が限定された施設から、一般の宿泊客はもとより宿泊客以外にも利用できるようレストラン等を開放したことで、地域にも開放された施設として生まれ変わっていた。物理的・デザイン的な開放の仕方と、利活用システムの在り方が合わさって初めて魅力的な施設・空間になるのだと感じた。

(岩田圭司)

今回の特集の一つに「DIYのいえ」があります。以前と違い、最近ではよく耳にする言葉ですが、今や家をカスタマイズできる世の中にまで進んできております。最近は大工人口の減少が進んでいるので、こういった工具を使った楽しさを学んで頂き、大工さんに興味を持って、職業として増えてくれれば、今後の住宅事情も活性化するかもしれないと別の期待もしております。

(川合隆之)

オープンマインドな空間を下支えする企画者や運営者の思いが非常に強く、各々の取り組みの特徴を際立たせている。既存の社会システムに違和感を持つ人々が多い中で、これらの先駆的なプロジェクトは注目的である。これらの取り組みをプロトタイプとして、全国各地に展開されることによって、より豊かな人間活動を呼び起こせると思います。

(河西孝平)

開くこと、その加減の方法がより多くの人を対象として成立するように構造的に概念を成り立たせることを建築的に扱う一方で、例えばある一定の人数まで限定的に成立し得るような、視覚以外からも感じ取るより敏感な空間もある。空間の一回性のような、いつ来ても同じことの再現ではないという点で成熟した都市へのアプローチとしてインテリアであり、マインドという内視的観点がある。

(塚口洋之)

環境はそこにいる人の気持ちを変えることもできる。わくわくする、大人はワイン片手に……できる図書館、固定概念からのパラダイムシフト等々、今回の特集は空間作りにおける人と空間との関係を改めて見直し、新たな提案を進める機会になれるのではないかと思う。私自身が今後楽しみにしている家のリノベーションも、わくわくする「オープンマインド」を大事にしていきたい。

(ペリー史子)

許可建築物の適正な維持管理の推進等

～大阪市総合設計制度の一部改正～

藤村雅典

大阪市都市計画局建築指導部建築企画課 課長代理

総合設計制度による許可を受けた建築物の適正な維持管理を推進すること等を目的として、大阪市では、総合設計制度の基準の一部を見直し、令和元年8月1日に改正した。

改正の背景

昭和48年に適用を開始した総合設計制度は、平成31年3月末時点で、許可件数の累計が1000件を超え、大阪市における良好な市街地環境の形成に大きく寄与してきた。

とりわけ、本市の総合設計制度により生み出された公開空地の面積は、大阪城公園の1.2倍、甲子園球場35個分に相当する約135ヘクタールにおよぶなど、都市機能が高度に集積した本市の市街地における貴重な空地となっている。

本市では、こうした社会資産を適正な状態に保つことを目的として、建物所有者に対して、総合設計制度の許可要件に関わる部分の維持管理状況について報告を求めているが、これをより効果的、効率的に行うため、今回、維持管理状況の報告時期に関する基準を合理化した。

また、近年において課題となっている保育所等の設置を誘導するために、許可後の建築物の用途変更の基準を緩和した他、広告物の設置基準の見直し等を行った。

主な改正の内容

■維持管理状況報告の時期の見直し

従前から、許可後の建築物とその敷地の維持管理の状況については、建物所有者から本市に報告することを義務付けているが、報告時期は、適用した容積割増し制度の種別ごとに異なるものとしていた。

改正後は、容積割増し制度の種別に関わらず、報告時期を原則として一律に3年ごととし、建築基準法第12条に基づく定期報告制度による報告時期と同じ時期とすることとした

(図1)。

これは、定期報告制度と合わせて報告時期の案内を行うことにより、建物所有者に確実に維持管理の状況報告を行っていただくだけでなく、報告時期を統一することで、建物所有者の負担を抑えることを念頭に置いたものである。

改正前

適用制度	報告時期
一般の総合設計制度 市街地住宅総合設計制度 都心居住容積ボーナス制度 マンション建替型総合設計制度 環境配慮型容積ボーナス制度	市長が必要と認める時期
文化施設容積ボーナス制度 医療・福祉施設容積ボーナス制度 駐車場容積ボーナス制度 耐震性貯水槽設置型容積ボーナス制度	5年毎
にぎわい施設誘導型容積ボーナス制度 子育て支援施設誘導型容積ボーナス制度	1年毎

改正後

適用制度	報告時期
全て	3年毎※

※定期報告制度の報告時期と同時期

図1

■容積ボーナスを受けた特定施設の他用途への変更が可能に

本市の総合設計制度には、特定施設容積ボーナス制度という任意選択型の容積割増し制度があり、公開空地を設けることによる通常の容積割増しに加えて、保育所等の福祉関係施設や劇場等の文化施設、オープンカフェ等のにぎわい施設といった特定施設の設置面積に応じた容積率を上乘せすることができる。

今回の改正では、保育所等の特定施設の設置誘導効果を高めるため、将来、社会情勢や周辺状況の変化によってその特定施設の必要性が低くなった場合等に、特定施設容積ボーナス制度内又は制度間での特定施設の用途変更が可能となるよう、許可後の変更に関する基準を見直した。

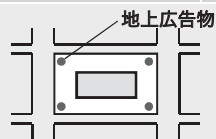
■その他の改正

大規模な建築物や敷地への広告物の設置基準の一部緩和

総合設計制度を適用した超高層建築物や大規模集客施設等における、建築物や敷地の規模に応じた広告物設置のニーズに対応するため、周辺環境に支障がないと考えられる範囲で設置数や設置面積の基準を緩和した(図2-1)(図2-2)。

改正前

地上設置の広告物の数	
都心部の商業地域内の集客施設	4以内
上記以外	2以内



改正後(次の特例を追加)

全ての広告物が、互いに水平距離で40m以上離れている場合	
都心部の商業地域内の集客施設	8以内
上記以外	4以内

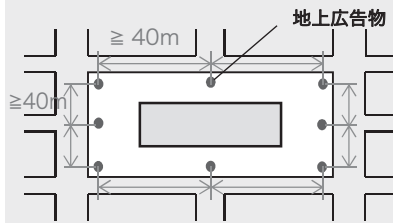
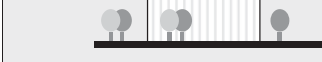


図2-1

改正前

壁面設置の広告物の面積(原則)	
建築物の高さや面積に関わらず、7㎡以下	
壁面広告物	7㎡以下/箇所



改正後

建築物の高さに応じて、最大10㎡まで緩和	
壁面広告物	10㎡以下/箇所
▽60m	高さに比例した面積以下/箇所
▽31m	7㎡以下/箇所

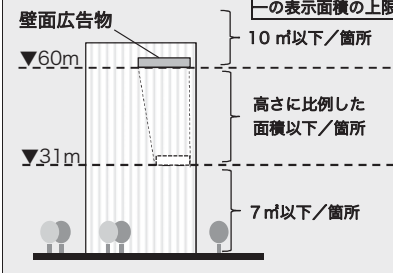


図2-2

おわりに

今回の改正によって、建物所有者には、あらためて維持管理の重要性を認識していただき、適正な維持管理に努めていただくとともに、今後も、総合設計制度がより有効に活用されることを期待している。

(ふじむら まさのり)

●藤村雅典

1974年生まれ。大阪市立大学大学院工学研究科修了。1999年大阪府役所入庁。

表 1 「近代建築調査委員会報告」掲載物件一覧

掲載年月	NO	名 称	存否	現名称（現所在地）・文化財指定等	設 計 者	所 在 地	執 筆 者
1960/01	1	泉布観	○	国重文	ウォートルス	大阪	
1960/02	2	日本生命保険株式会社旧館	××		関野貞	大阪	堀口基吉
1960/03	3	宝山寺客殿（獅子閣）	○	国重文	吉村松太郎	奈良	近藤豊
1960/04	4	国立奈良博物館	○	国重文	片山東熊	奈良	林野全孝
1960/05	5	江商神戸支店	○	旧神戸居留地十五番館・国重文		神戸	坂本勝比古
1960/06	6	初代・二代目大阪駅	××			大阪	渡江貞夫
		附・三菱倉庫	×			大阪	近藤豊
1960/07	7	京都銀行本店（元京都高島屋）	×			京都	鷺尾九郎
1960/08	8	八角議事堂（初代の兵庫県会議事堂）	××			神戸	滝沢真弓
1960/09	9	大阪府立図書館	○	大阪府立中之島図書館・国重文		大阪	林野全孝
1960/10	10	同志社の明治建築	○	国重文、国登録含む		京都	近藤豊
1960/11	11	第一銀行京都支店本館建築	×			京都	牧野忠
1960/12	12	同和火災海上保険株式会社名古屋支店	×		鈴木禎次	愛知県	竹中工務店名古屋支店
1961/01	13	異人館 鹿児島市	○	旧鹿児島紡績所技師館・国重文	英人技師	鹿児島県	大野健次
1961/02	14	居留地建築特集				神戸・大阪	
1961/03	15	新島旧邸	○	市指定		京都	近藤豊
1961/04	16	三重県庁舎	○	(博物館明治村)・国重文	伊藤平右衛門（平左衛門）	三重県	近藤豊・林野全孝
1961/05	17	オリエンタルホテル	××		ゲオルグ・デ・ランデ	神戸	坂本勝比古
1961/06	18	日本銀行大阪支店	△		辰野金吾	大阪	林野全孝
1961/07	19	京都国立博物館	○	国重文	片山東熊	京都	近藤豊
1961/08	20	三菱銀行神戸西支店（旧称三菱合資会社神戸支店）	△		曾禰達蔵	神戸	坂本勝比古
1961/08	20	三菱銀行大阪支店	×		曾禰達蔵	大阪	林野全孝
1961/09	21	奈良県庁本館・奈良国立文化財研究所・奈良ホテル					浅野清
		・奈良県庁本館	×		長野宇平治	奈良	
		・奈良国立文化財研究所	○	奈良国立博物館仏教美術資料研究センター・国重文	関野貞	奈良	
		・奈良ホテル	○		奈良	奈良	
1961/10	22	兵庫県・旧庁舎	○	兵庫県公館・国登録	山口半六	神戸	滝沢真弓
1961/11	23	京都ハリストス正教会聖堂	○	京都ハリストス正教会生神女福音聖堂・市指定	松室重光	京都	近藤豊
1961/12	24	明治高樓建築					林野全孝
1962/01	25	竜谷大学本部の諸建築	○	龍谷大学・国重文		京都	近藤豊
1962/02	26	富士銀行大阪支店と製鉄化学株式会社					林野全孝
		・富士銀行大阪支店	×		山口半六	大阪	
		・製鉄化学株式会社	×		山口半六	大阪	
1962/03	27	神戸地方裁判所	△		河合浩蔵	神戸	坂本勝比古
1962/04	28	京都大学工学部建築学教室所蔵 コンドル博士関係の図面（その1）		国重文			近藤豊
1962/05	29	京都大学工学部建築学教室所蔵 コンドル博士関係の図面（その2）		国重文			近藤豊
1962/06	30	旧武蔵山治氏邸（現鐘淵紡績株式会社舞子倶楽部）	○	旧武蔵家別邸洋館（兵庫県立舞子公園）・国登録	横河工務所	神戸	坂本勝比古
1962/07	31	聖ヨハネ教会	○	旧日本聖公会京都聖約翰教会堂（博物館明治村）・国重文	ガードナー	京都	近藤豊
1962/08	32	大阪帝国座	×			大阪	林野全孝
1962/09	33	尾山神社神門	○	国重文	棟梁 津田吉之助	石川県	近藤豊
1962/10	34	旧神戸市役所庁舎	×		秋吉金徳	神戸	坂本勝比古
1962/11	35	京都市の明治初期小学校 ー講堂を中心にー				京都	近藤豊
1962/12	36	毛馬開門と洗堰	△	淀川旧分流施設・国重文	土木技師沖野忠雄	大阪	林野全孝
1963/01	37	辰馬力氏本宅	○	旧辰馬喜十郎住宅・県指定	棟梁 山下 某	兵庫県西宮市	坂本勝比古
1963/02	38	金沢大学理学部本館（旧四高）と熊本大学法文学部本館（旧五高）					近藤豊
		・金沢大学理学部本館（旧四高）	○	石川四高記念文化交流館・国重文	山口半六	石川県	
		・熊本大学法文学部本館（旧五高）	○	熊本大学五高記念館・国重文	久留正道	熊本県	
1963/03	39	明治生命相互会社大阪総局	×		野口孫市	大阪	林野全孝
1963/04	40	旧長浜駅駅舎	○	旧長浜駅本屋・県指定		滋賀県	近藤豊
1963/05	41	京都府庁庁舎（本館）	○	京都府庁旧本館・国重文	松室重光	京都	近藤豊
1963/06	42	京都・河原町カトリック教会（天主堂）	○	聖ザビエル天主堂（博物館明治村）		京都	近藤豊
1963/07	43	旧三十四国立銀行	×		辰野片岡事務所	大阪	林野全孝
1963/08	44	日本天主教下山手教会聖ヘンリコ聖堂	×			神戸	坂本勝比古
1963/09	45	京都府立医科大学附属病院本館	×			京都	近藤豊
1963/10	46	浄土真宗本願寺派兵庫別院	×	光尊寺		神戸	坂本勝比古
1963/11	47	京都・中京郵便局庁舎（本館）	△			京都	近藤豊
1963/12	48	柳原学校旧校舎	○	(安土風土記の丘)・県指定	大工・清水吉平	滋賀県	近藤豊
1964/01	49	朝日新聞大阪本社ー初期鉄骨鉄筋コンクリート造の意義ー	×		竹中工務店	大阪	林野全孝
1964/02	50	天鏡閣と白石公民館					林野全孝
		・天鏡閣	○	国重文		福島県	
		・白石公民館	△	旧刈田病院本館・白石市指定（解体・部材保存）		宮城県	
1964/03	51	山形県田川地方事務所庁舎・荘内文化会館					近藤豊
		・山形県田川地方事務所庁舎	○	旧西田川郡役所（致道博物館）・国重文	(高橋兼吉)	山形県	
		・荘内文化会館	○	旧鶴岡警察署庁舎（致道博物館）・国重文	(高橋兼吉)	山形県	
1964/04	52	山形市立病院済生館	○	山形市郷土館（蔵城公園内）・国重文		山形県	近藤豊
1964/05	53	柏原高校記念館と柏陵会館					林野全孝
		・柏原高校記念館	○	柏陵記念館・国登録		兵庫県	
		・柏陵会館	○	旧氷上高等小学校校舎・県指定		兵庫県	
1964/06	54	鹿児島と山形の刑務所					近藤豊
		・鹿児島刑務所	×	正門のみ残る、旧鹿児島刑務所正門・県指定		鹿児島県	
		・山形刑務所	×			山形県	
1964/07	55	佐賀県の明治建築					林野全孝
		・有田異人館	○	旧田代家西洋館・国重文		佐賀県	
		・鹿児島市役所	×			佐賀県	
		・佐賀行政検察庁舎	○	佐賀レトロ館		佐賀県	
		・佐賀銀行鹿児島支店	×			佐賀県	
		・有田商工会議所	×			佐賀県	
1964/08	56	国鉄二条駅と同福島駅駅舎					近藤豊
		・国鉄二条駅	○	旧二条駅舎（京都鉄道博物館）・市指定		京都	
		・国鉄福島駅	×			福島県	
1964/09	57	仁鳳閣と興雲閣					近藤豊
		・仁鳳閣	○	国重文		鳥取県	
		・興雲閣	○	島根県指定		島根県	
1964/10	58	大阪湾に臨む明治初期の洋式灯台 ー神戸和田岬・淡路江崎・和歌山友ヶ島ー					坂本勝比古
		・神戸和田岬	○	(須磨海浜公園)・国登録		神戸	
		・淡路江崎	○	退息所は四国村へ移築・国登録	ブランドン	兵庫県	
		・和歌山友ヶ島	○	国登録	ブランドン	和歌山県	
1964/11	59	細部特集 1. 各種の近景、2. 階段廻りと手摺					
1964/12	60	細部特集 3. 柱（柱身・柱頭・柱脚等）					
1965/01	61	細部特集 4. 手摺、5. 天井					
1965/02	62	細部特集 6. 小屋組・窓・扉金具、7. 壁隅の手法・扉・切妻					

存否凡例：○現存、△一部保存、×現存せず、××掲載の時点ですでに現存せず



図2 八角議事堂（初代の兵庫県会議事堂）
（『建築と社会』1960年8月号）



図3 山形市立病院済生館（『建築と社会』1964年4月号）

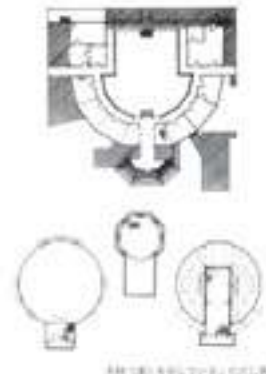


図4 旧三十四国立銀行（『建築と社会』1963年7月号）



図5 日本天主教下山手教会聖ヘンリコ聖堂
 (『建築と社会』1963年8月号)



図6 細部特集4. 手摺より (『建築と社会』1965年1月号)

62回にわたる「近代建築調査委員会報告」は、建築種別についても、記述形式に関しても多様である。図2・八角議事堂のように、既に存在せず、記録も曖昧だった建物を、古写真をきっかけに掘り起こした調査もあれば、現存で現役の建物のももある。図3は、霞城公園に移築され、山形市郷土館として活用されている済生館で、旧所在地で現役の病院として使われている頃の様子が記録されている。図4は北船場にあった旧三十四国立銀行で、前面道路が狭く外観全体は見えにくい、内外共に堂々とした銀行建築であったことがうかがえる。連載では、略図でも実測によって平面図等の図面が作成されることが多く、資料性が高い。図5は下山手カトリック教会（神戸市中央区）だが、阪神・淡路大震災で全壊、現在は「天主堂」と刻まれた門柱と壁の一部のみが残る。

連載終盤には4回にわたって「細部特集」が組まれた。連載に大きな役割を果たした近藤豊は『古建築の細部意匠』や『古建築の細部文様』の著者であり、細部意匠への関心度がわかる。近藤の写真資料のうち約6万カットは京都府立総合資料館（現・京都府立京都学・歴彩館）に寄贈され、「近藤豊撮影写真資料」として整理されている。インターネット上でも公開され、連載や著書等でも使われなかった写真も含め閲覧できる。

の被害を免れた建物や史料をできる限り調査し、記録に残すことは、学術的価値だけでなく、当時の研究者たちの体験から生じた危機感によるのかもしれない。

明治建築に関しては、戦前期にすでに重要美術品等に指定されたものもあり、調査研究が手付かずであったわけではない。建築学会は『明治大正建築写真聚覧』⁴⁾を1936(昭和11)年に創立50周年事業として発刊し、250作品を収録している。また『近代建築画譜近畿篇』⁵⁾も同年に出版されており、戦前期の関西の建築を知ることができる。滝沢は先達に敬意を示しつつも、「いままでの多くは東京中心であったり、あるいは資料の総花的羅列であったりした。ここに本委員会の意図するところは、いままでとかく手うすだった近畿地方を中心とし、「調査のできたものから逐次報告する予定である。いわゆる巧遅よりも拙速をとることとした」と述べ、関西を中心に東北や九州など地方の特徴的な近代建築を積極的に取り上げる方針を示している。

■調査された近代建築と執筆者

62回の連載で取り上げられた近代建築を表1に示す。連載最終回(1965年2月号)に「近代建築調査委員会発表建造物・件名目録」が掲載されているが、所在地や現名称、存否、執筆者等の情報を加えた。

前節で示した方針通り、地域的にも内容でも、これまでの研究調査から漏れていたものに光を当て、地方の建築を積極的に取り上げている。尾山神社神門(No.33)のように、掲載時にすでに文化財であり、歴史的価値が認められていた近代建築も含まれているが、無名の存在だったものもある。

複数の執筆者の回や細部特集の回等を除いて数えると、最も担当回数が多い執筆者は近藤豊で24回、以下担当回数順に列挙すると、林野全孝:14回、坂本勝比古:10回、滝沢真弓:2回、堀口甚吉、波江貞夫、鷺尾九郎、牧野忠、竹中工務店名古屋支店、大野健次、浅野清:各1回となる。取り上げられた近代建築は、この調査で新たに発掘されたものばかりでなく、それぞれの執筆者が以前から関心をもち、資料や情報を収集していたものが多く含まれる。委員長の滝沢真弓は八角議事堂(兵庫県会議事堂)(No.8)と山口半六設計の兵庫県庁舎(No.22)を担当している。八角議事堂は、明治初期に建てられたいわば幻の近代建築だが、注目の発端は、1931(昭和6)年に神戸へ赴任する滝沢に堀越三郎が見せた英文書に載っていた1枚の写真だったと言う⁶⁾。確かにインパクトのある画像である。兵庫県庁舎については「明治建築として、こ

れほどの傑作がなぜ本会創立五十周年記念出版の「明治大正建築写真聚覧」に登録されなかったか」、山口半六について「これだけの人物が何故に建築界の主流に浮かび出なかったか」と日本建築学会の講演会で強く主張している⁷⁾。上質の建築がほとんど取り上げられず、ひっそり神戸にあることが、研究報告連載の契機になったのではないかと思える。

最多の担当数である近藤豊は、1962(昭和37)年に博士論文『明治初期の擬洋風建築の研究』⁸⁾で学位を取得している。その緒言で近藤は、『明治初期の洋風建築』を著した堀越三郎の名をあげ、また先行研究として『明治工業史・建築篇』、『明治大正建築写真聚覧』に言及しているが、「あまりにも東京・横浜中心に偏りすぎ、それ以外の地方が全く扱われていないか、極めて軽く扱われている、これは明治建築全体として見た場合、はなはだ一方的」と、滝沢の序と同様の意見を記している。近藤の『明治初期の擬洋風建築の研究』で取り上げられた近代建築とこの連載の掲載物件はかなり重複しており、写真や図面も共通するものが見られる。連載に近藤が果たした役割は非常に大きい。

担当者と地域の関連性も深い。近藤に続く執筆者の林野全孝は、大阪に在する近代建築を中心に執筆している。大阪の近代建築は、建築専門誌に取り上げられることも多く、情報は豊富と思えるが、建物名称を見ても姿が思い浮かばないものも多い。船場の銀行建築(No.20、26、39、43)や川上音二郎で有名な帝国座(No.32)など、歴史に埋もれた名建築と感じられる。

神戸に関しては坂本勝比古が主に執筆している。坂本は神戸の異人館研究の第一人者であり、第14回の「居留地建築特集」は、神戸と大阪の旧居留地を中心に様々な論文や写真、資料が掲載され、滝沢が連載の最後に記した解散の辞で「昭和36年2月号の「居留地建築特集」の如きはすでに斯界稀有のドキュメントとして珍重されている」⁹⁾と締めくくった通り、1冊の研究書の価値をもっている。

■62回の連載の価値

70を超える掲載物件は、執筆者たちが日頃から注目し、資料を収集していたものが多く、それぞれ価値をもつ存在であったと言える。この連載で取り上げられた近代建築のうち、今でも約半数が現存し、国の重要文化財や県・市の指定文化財になっているものも多い。掲載された写真を見ると、よく言えば「生きた建築」としてフル活用され、悪く言えばボロボロで、文化的価値をもつ存在に一見思えないものもある。これだけの数が現存してい

るのは、建築の価値を見抜いた執筆者たちの鑑識眼の賜物であろう。

大阪市内の掲載物件は失われたものがかなり多い。表1にある通り、大阪市内の14件の掲載物件のうち、部分保存を含めても現存は4件しかない。一方、山形県や九州地方では、「擬洋風建築」が保存されている。個性的な姿を生かし、郷土館等に利活用されている物件(No.51、52、55)が多く、明らかに地域差がある。1960年代の船場には様式建築の銀行など、惜しいと思わないぐらい多数あったのかもしれない。大阪など都市部は経済活動が活発で、戦災に耐えた建築でも、歴史的価値より経済性の追求のため、あっけなく建て替えられたと考えられる。地方には歴史的建造物が残り、今や地域の歴史を物語る重要な存在となり得ている。

「近代建築調査委員会報告」に見る近代建築の記録は、1950年代に現存していた状況の記録としての役割を果たす。掲載の白黒写真は不鮮明なものも多いが、内外の写真は貴重である。執筆者たちは小屋裏にも上がり、写真撮影や実測図の作成を行なっている。時間をかけたであろう手描きの詳細な図面も多数掲載されており、今や貴重な資料となっているものも多い。

今日、このような大がかりな建築調査は、時間や費用、人手、安全上の配慮など、さまざまな制約があってなかなか実施できない。だが少しずつでも記録を残し、何らかの形で発表し、多くの人々と共有しておけば、のちの時代に何かの役に立つかもしれない。「近代建築調査報告」は記録と公表の大切さを考えさせてくれる存在でもある。

注

- 1)『建築と社会』と郷土建築の関連は、酒井一光:再読関西近代建築—論考・記事編—郷土建築座談会、建築と社会2016年1月号、p.46-47に詳しい。
- 2)松原紀之、足立裕司、中江研:滝沢真弓とその建築理念に関する研究、平成13年度日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、p.921-924、2001年
- 3)同上
- 4)建築学会明治建築資料に関する委員会編:『明治大正建築写真聚覧』建築学会、昭和11年
- 5)近代建築画譜刊行会編:『近代建築画譜近畿篇』近代建築画譜刊行会、昭和11年
- 6)滝沢は八角議事堂を他の論文でも扱っている。滝沢真弓:八角議事堂—調査顛末記—、建築雑誌、1958年4月号、p.29-33に、写真との出会いを詳しく述べている。
- 7)滝沢真弓:特別講演要旨 神戸の明治建築—うらばなし三題—、建築雑誌、1966年3月号、p.95-97
- 8)近藤の博士論文は、1961(昭和36)年の執筆から約40年後、ご息女の手によって刊行された。近藤豊:『明治初期の擬洋風建築の研究』、理工学社、1999年。
- 9)滝沢真弓:近代建築調査委員会報告—解散の辞を兼ねて—、建築と社会、1965年2月号、p.35

「エネバンク®」— 高性能多用途 潜熱蓄熱カプセル

矢野直達

株式会社 ヤノ技研 代表取締役

はじめに

ここに紹介する「エネバンク」は、高性能蓄熱材をコンパクトなカプセルに充填した株式会社ヤノ技研が開発した製品である。潜熱蓄熱材（PCM-Phase Change Material）はある一定温度（融点）においては、熱を加えても温度は上がらず、性状だけが固体から液体に変化する。このとき蓄えられた熱を潜熱といい一定温度の大きな熱が蓄えられ、固体から液体、あるいはその逆の液体から固体への相変化時には、そのとき発生する大きな冷熱や温熱を利用することができる。エネバンクは潜熱蓄熱材をポリエチレン製のカプセルに充填した製品（PCMカプセル）で、潜熱蓄熱材に塩化カルシウムを材料として使用しているため、無毒無臭で火災時でも燃えることはない。

温室での利用例

—暖房費削減「省エネ温室」

外気温が低下する夜間になると、温室は室温維持のためにヒーターによる加温が必要となる。図1のように温室内に設置されたエネバンクは、昼間に吸熱・蓄熱した太陽熱を、夜間に温室内でその熱を放出し、加温用燃料費を節約する。さらに昼間には過剰な太陽熱を吸熱することにより温室内温度が過昇温することを抑制する効果ももたらす。エネバンクはこれら優れた熱特性により全国各地の温



図1 温室内におけるエネバンクの設置例

室で採用されており、燃料費の節約とともに省エネルギー、地球温暖化ガスの排出削減にも寄与している。

空調での利用例

—住宅セントラル空調システム

これからの日本の戸建て住宅を考えると、高気密・高断熱化はますます進み、冷暖房には換気を含めたセントラルシステムが必要と思われる。24時間全館空調を前提に考えると建物に熱容量があることが室内の気温や表面温度の変動を抑え、快適な温度環境を作りやすくなる。例えば、蓄熱は深夜電力や単相・3相の200V電力を利用して行い、必要な時に熱を取り出して空調する。図2のようにエネバンク（PCMカプセル）を積み重ねて蓄熱装置としてエアコンに繋げ、ダクトを通じて各部屋に空気を送る。ただし、冬は何らかの加湿が必要である。

この潜熱蓄熱材（PCMカプセル）を使用した24時間全館空調システムをすでに開発している。市販のヒートポンプエアコン（2～3馬力）と空調コントローラーで構成するので、システムはシンプルでありメンテナンス部材も少ないため、長寿命住宅に適している。

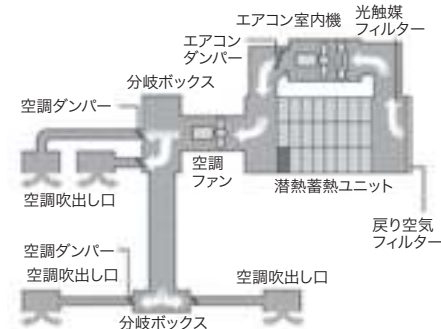


図2 全館蓄熱空調のシステム概念図

その他の利用と効果

エネバンクの利用目的には、温室や空調のほかにも多様なものがある。

①蓄熱のためのスペース効率の向上として、一般に蓄熱媒体として用いられる水と比べて約1/5の容積で同容量の熱を蓄えることができる。②太陽熱利用暖房システムでの活用として蓄熱層内の容量縮小や建築内装材と複合化させることにより室内熱容量の増大など、スペースの有効利用が図られる。③給気温度の脈動の緩和として室温の安定平滑化が期待できる。④温度保持装置としての利用もある。停電時や場所の移動時での温度保持装置としても有効に用いられる。また、一定時間温度保持装置として防護服の防暑対策、手足を温めるあんかとしての利用にも適している。

以上のように、エネバンクは建築、農業、機械、物流など、多くの分野において様々な利用の仕方がある。

製品の種類

エネバンクに使用している潜熱蓄熱材は、塩化カルシウムを主体としていて不燃で、体積当たりの潜熱蓄熱量が有機系パラフィンの1.58倍もある。（温度18℃でエネバンクの密度：1.54g/cm³、潜熱蓄熱量：174J/g、体積当たり潜熱蓄熱量は174×1.54=268J/cm³。パラフィンは同様にそれぞれ0.86、198、198×0.86=170となり、268/170=1.58となる）

多様な用途に適合すべく、多種の相変化温度レベルの潜熱蓄熱材と各種形状のカプセルを製品化しており、相変化温度が-20℃～+90℃程度の範囲で製造可能だ。温室で10年、住宅で17年間の耐用年数の実績を有している。

また、図3のようにカプセルに設けられた貫通孔を利用して容易に集合・積層化が可能で、必要蓄熱量、蓄熱体周囲の気流（または水流）方向およびスペース条件などに応じて様々な形にブロック化することができる。

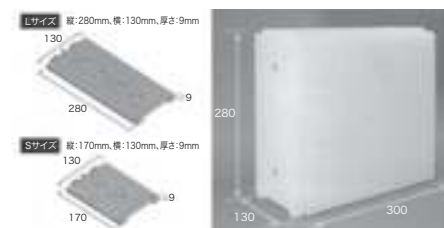


図3 PCMカプセル(左)とPCMブロック(右)
カプセルはLサイズ(mm)：縦280横130 厚さ9
Sサイズ：縦170横130 厚さ9
右図のブロックはカプセルを約30枚重ねた製品

おわりに

1970年代の第1次オイルショック時から民間エネルギー使用の抑制と施設農業の脱石油を求めて潜熱蓄熱材の開発をスタートした。その後、石油価格や市場環境の変化をくぐり抜けて住宅・建築での省エネ可能な複合蓄熱建材と施設温室で省エネ率20～25%を達成し、現在ではいろいろな用途の事業拡大を進めている。

(やの なおみち)

●矢野直達

1970年 理学博士（大阪市立大学）
1970年 株式会社クボタ入社、住宅建材、機器、ソーラー、蓄熱材の研究開発事業化に従事。2002年12月 有限会社 ヤノ技研設立、2005年 株式会社化。
2012年12月 近畿経済産業局より「パッシブソーラー省エネ蓄熱温室装置」が関西モノづくり新撰2013に選定される。2018年12月 尼崎信用金庫より「あましんグリーンプレミアム」最優秀賞。

存在の質から 環境を捉え直す

～地蔵盆まちづくり試論～

京都府立大学大学院
准教授

前田昌弘

1980年奈良県生まれ。京都大学を卒業・修了後、京都大学大学院助教、同・講師を経て2019年10月より現職。専門は建築計画学、まちづくり、防災・減災学。博士（工学）。著書に「津波被災と再定住」（単著、京都大学学術出版会、2016年）、「建築フィールドワークの系譜」（共著、昭和堂、2018年）等。主な受賞に日本建築学会奨励賞、都市住宅学会著作賞、財団法人住総研研究選奨等。

■序：「孤」の時代の地域居住

都市とは本来、人が「独り」でもいられる自由な場所である。しかし、近年の日本の都市では、「孤立」や「孤独」が深刻な問題であり、「孤」や「独り」であることの負の側面を意識せざるを得ない状況にある。かつてみられた職住近接の暮らし、地縁・血縁といった社会的繋がりの変容・衰退がその要因であることは確かである。しかし、それだけであろうか。そもそも、私たちが都市に“住んでいる”とはどのような状態なのか。おそらく、ただ居を構えているだけではなく、人が都市と何らかの“関わり”を持って暮らしているということであろう。しかし、現代の日本では、ささやかな“関わり”を持つことでさえ難しくなっている。このことが「孤」をめぐる問題の本質である。それは私が暮らしている京都でも例外ではない。

このような問題について漠然と考えながら、私は地蔵盆という行事の研究にこれまで取り組んできた。地蔵盆は京都では今や唯一と言ってよいほど、地域に暮らす多様な人々が関わりを持つ機会である。近畿圏では夏の風物詩として比較的良好に知られた行事であるが、多くの人にとって地蔵盆は馴染みの薄い行事であろう。

本稿では、まちづくりと地蔵盆の関係について紹介し、さらには、地域コミュニティの核としての地蔵盆の意味について考えてみたい。

■地蔵盆とはどんな行事か？

地蔵盆とは8月24日を中心として地域の人々が地蔵を祀り、町内の安全や子供の健全な成長を願う行事である。地蔵菩薩の縁日である24日、特に盆明けに行われることから、地蔵「盆」と呼ばれる。地蔵菩薩は子供の守り神であるとい一般的に信じられており、地蔵盆でも子供を楽しませる行事が定番である。

地蔵盆当日の流れの例をみていく。地蔵盆の当日、町内の人々が集まり、会場の設営を行う。町内の適当な場所に祭壇を設け、普段は町内の祠の中に安置している地蔵を移動させ祭壇に祀る。その後、町内の人々からのお供えを受け付け、つづいて僧侶が来て読経が始まる。読経の際は参加者が祭壇の前で祈り、数珠回し（参加者が輪になって大きな数珠を回す）を行う。読経が終わると僧侶の話があ

り、それが終わると子どもたちのお楽しみの時間である。おやつや配布があり、昼食を挟んで午後もしいか割りや子ども用福引等の行事が続く。また、大人用の福引やビンゴゲーム等、大人も楽しめる行事が行われる。行事がひと通り終わると全員で片付けを行い、地蔵盆は終了である。町内によっては町内の人々が一緒に食事をしたり、次の日に旅行に行くこともある。



地蔵盆における数珠回しのようなす

地蔵盆に際しては、祭壇の設置や子供の遊び、ゲーム、福引等の行事のために町内の様々な空間が活用される。住宅事情の変化や自動車の増加により現在では少なくなったが、町家のミセの間や路上の空間が地蔵盆当日には地域に開放され、「いえ」と「みち」が一体的に利用される。また、当日だけでなく事前の準備も含めて様々な役割が発生する。祭壇のお飾りや片付け、おやつや福引の景品の買い出し、ゲームの企画、当日の交通整理等、町内の人々が協力して様々な役割を分担する。

近年、子供の数の減少や生活様式の変化等から地蔵盆の行事の内容は簡略化されてきた。それでも、地蔵盆には町内に新しく移り住んできた住民の参加もみられ、多様な住民、多世代が地域に参画する機会が生まれている。



「いえ」と「みち」の空間の一体的利用

■地蔵盆への期待と課題

近年、行政や市民からの地蔵盆への期待がにわかに高まっている。京都市では平成26年度、地蔵盆を「京都をつなぐ無形文化遺産」

第3号（登録名：京の地藏盆 地域と世代をつなぐまちの伝統行事）に指定し、地藏盆の由来や地藏盆における様々な行事を紹介する冊子を発行する等、地藏盆を市民全体で守り、育てていく機運を盛り上げている。ちなみに、京都市が実施したアンケート調査によると、市内の地藏の数は少なくとも1万體、地藏盆の開催数は少なくとも2950箇所とされている。しかし、地藏の設置や地藏盆の開催は住民が独自に行っており、開催の単位も町内会を基本としつつ個人やその他の団体によるものもあるため、正確な数の把握は困難である。いづれにせよ、地藏や地藏盆が京都の人々にとって今も身近な存在であることは確かである。

また、京都市では近年、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標。2015年9月の国連で採択された、気候変動、自然災害、生物多様性、貧困・飢餓対策など、国内外の課題解決に向けて掲げられた17の目標。）の推進と関連して、「京都市レジリエンス戦略」を策定している。この中で、地域のレジリエンス（危機や変化に対してしなやかに対応し回復する力）の資源として地藏盆が挙げられている^{注1}。

レジリエンス（Resilience）は日本では特に東日本震災以降、注目されるようになった概念である。私は2012年頃から地藏盆がコミュニティ形成に果たす役割について、レジリエンスの概念を用いて分析してきた。後述するように、地藏盆は時代によって形を変えながらも存続してきた。地藏盆の持つこのような特徴がレジリエンスに合致すると考え、「多様性」（Diversity）と「冗長性」（Redundancy）というレジリエンスの条件を地域コミュニティに適用し、評価を試みたのである。

ここで、「多様性」とは、多様な主体が地域に関与していること、「冗長性」とは、地域に関わるための経路が複数あることだと解釈できる。かつては、地藏盆等の行事を核として、都市を行き交う多様な人々が地域に包摂され、また、冗長な関係は「ゆとり」やいざという時の助けとなっていた。しかし、社会全体が縮小していく中で、主体の多様性は価値観の対立や担い手の不足に転じ、また、冗長な関係は非効率で無駄なものとして切り捨てられるようになってしまった。

このような転換を象徴するエピソードをひとつ紹介したい。京都の街なかのある町内で、ある時、地藏盆の会場として長年使用してきた住宅が家主の事情により使えなくなった。町内の住民が集まって話し合ったところ、地藏盆の廃止を強く要求する人がいて、継続か廃止かで散々揉めたという。町内の古株の住民が地藏盆を長年担ってきたが、近年、地藏盆に参加するのはマンションに住む子育て世帯ばかり。しかし、マンションの住民は町内会に入ろうとしない。高齢化と人口減少により、町内会の運営が苦しくなる中、自分たちだけが負担するのはもう我慢できない。これが廃止派の言い分である。継続を望む住民は、自分たちも子供の時には上の人の世話になったのだからと、廃止派を説得する。そしてようやく、行事を僧侶による読経だけにする等、内容を大幅に簡略化することでその年も何とか継続することになった。

このエピソードにみられるような社会的葛藤（個人・集団間の利害・価値観の相違に起因する緊張状態）は、都市の発達のある段階において必然的に経験されるのかもしれない。社会学者リチャード・セネットは、19世紀後半の西欧社会において儀式や慣習から成る「非個人的な領域（公共圏）」が個人の欲望や承認を求める「親密圏」の侵食を受けて崩壊しつつある状況を危惧した。都市のコミュニティとは本来、見知らぬ者の集まりであり、未知のものと出会う過程を通じての成長の場である。そのような場であって、見知らぬ人間、理解できない人間との関係を「演劇的」に仲介する「公共的スキル」を持った人々が「公共的人」（public man）である。セネットは人々の私的領域への逃避による都市コミュニティの矮小化、公共的人の衰退に警鐘を鳴らしたのであった。

京都の都市コミュニティもまた、セネットの言葉で言えば「公共的スキル」を高度に発達させてきた。上田篤は京都の町家コミュニティ（職住一致の集住社会）における人間と空間に関する論考の中で、「義理の共同体」という興味深い概念を提出している（上田1976）。町家コミュニティでは、町内の行事（十日汁、お千度参り、地藏盆等）の中で、私的なつきあいさえも様式化・形式化され一種の公的な交流となっている。これは、町家

コミュニティを構成するのは商家であり、それぞれが隣人であると同時に「商売敵」であることと関連する。隣人に情を移したせいで、共倒れになってはいけない。そのために、個人が分担する責任を義理と礼儀が要求する範囲に制限するのである。そのような関係性は上述した行事だけでなく、日常的な行動規範や京詞、鰻の寝床、格子窓等の人工的な相互緩衝物といった要素にも通底している。

上述したレジリエンスの条件（多様性、冗長性）は今や社会的葛藤の要因へと転換しつつある。これも、公私の関係に均衡をもたらす緩衝資源とその活用に向けた「公共的人」の衰退が原因ではないだろうか。公私の緩衝資源および「公共的人」の現代的再生が急がれる。

■そもそも「地藏」とは？

地藏盆について深く考える上で、地藏信仰への理解が避けられない。地藏盆の信仰的側面を主に扱う仏教学や民俗学といった学問について私は全くの門外漢であるが、これまで自分なりに理解したことをここでは紹介したい。

地藏はサンスクリット語では「クシティ・ガルバ」という。クシティ＝「大地」、ガルバ＝「胎内」、「子宮」の意味である。地藏の対となる存在として「空蔵」があり、どちらもインドから中国大陆を経て日本に伝播したと考えられるが、広く定着したのは地藏のほうである。民衆にとって母なる大地を想起させる地藏はより身近な存在であったのかもしれない。

地藏菩薩の由緒を記した經典のうち特に重要なものに以下の3つがある。

- ・『大乘大集地藏十輪經』10卷（唐・玄奘訳）
- ・『占察善惡業報經』2卷（隋・菩提灯訳）
- ・『地藏菩薩本願經』2卷（唐・実叉難陀訳）

これらの經典を要約すると、地藏菩薩には、①救済能力がきわめて高く、②定位置をもたないという特徴があるようだ。「五濁惡世の無仏世界の菩薩」とも表されるように、地藏菩薩は六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）のどこにでも現れ、あらゆる人々を救済してくれる。このような地藏菩薩の性質は、大乘仏教の「唯識」思想^{注2}にも通じると言われる。平安時代末期以降、地藏信仰は民間を中心に広まり、地藏は様々な姿かたち（身代わり地藏、地藏の田植え、地藏の看病等）で

説話等に登場した。さらに、中世末期から近世にかけて、現世利益への過剰な期待とともに多様な意味づけをもつ地藏（追善供養、子安地藏、境界神、町内安全、延命地藏等）が全国各地で誕生した。このような展開は、上述した地藏が本来的に備える特徴と救いを求める民衆の柔軟な解釈が合わさることで加速していったのであろう。

地藏盆について、民間を中心に広まった行事であることもあり、その成立と展開については長らく謎が多かった。しかし、近年は優れた研究が蓄積され、詳細が明らかになりつつある。

京都の地藏盆が初めて記録に現れるのは曹洞宗の僧侶・鈴木正三が記した『反古集』（1638）という書物においてである。当時は「地藏会」「地藏祭」と呼ばれ、拾ってきた石仏や石ころを地藏として祀る遊びが子供たちの間で流行した。17世紀の京都の都市発展を通じて、土木事業の際に地中や川底から石仏が多数発見されると、共同体によって地藏として祀られるようになる。19世紀初頭には、地藏盆が共同体による祭事として市中に広く定着している様子が当時の文書や絵巻から読み取れる。

近代以降、明治4（1871）年の京都府令『路傍の大日地藏取除』により、多くの石仏が撤去・売却の対象となる。これにより地藏盆は一時的に廃れるが、その10年後には府令が撤回され、地藏盆は公式に再開する。当時禁止されていた盆行事全般とともに復活したことから、この頃から地藏“盆”という名称が現れる。明治35（1902）年には、コレラ等の伝染病の予防のため食品の供物が禁止される。その代わり、金銭のお供え、お下がりの物品の配布（福引）が行われるようになり、現在もみられる娯楽的要素が生まれる。第二次大戦下には物資統制により規模を縮小しつつも継続され、戦後は人口増加、経済成長とともに地藏盆も一気に賑やかになり、子供を楽しませるための手品や紙芝居等の娯楽的要素が大きくなる。

■ 地藏盆の多様な在り方

京都の街なかの地藏盆の現状について調べる機会があった。調査対象とした3学区・81町内のうち2012年の調査時点で8割強の町内で地藏盆が開催されていた。この数値は市内全域を対象とした別の調査結果とも概ね一致

する。一方、地藏盆の開催規模（行事への参加を呼びかけた人数）は、平均すると50人程度であるが、最小3人、最大135人と、町内によってかなりの幅があることがわかった。たった3人でも開催している町内があるのは驚きである。これは、地藏盆が直面する苦境を表しているとも言えるが、町内の事情に応じて形を変えながら開催できる、地藏盆の持つ柔軟な強さを表しているとも言える。

「お飾り」や「読経」といった仏事はほとんどの町内で行われており、「おやつ」の配布や「お下がりの配布」といった気軽にできる配りものも7割ほどの町内で行われていることがわかった。一方、「数珠回し」や「子供用福引」、「子供の遊び」、「ビンゴ等のゲーム」はゆったりやらなかったりする。

事例① こじんまりとでも持続する地藏盆

高齢化や子供の数の減少により地藏盆を開催する気力と体力を失いつつある町内は今や珍しくない。そのような町内でも地藏盆を最低限の労力で続けることは可能である。

ある町内では僧侶による読経とおやつや福引の配布だけで済ませ、昼前には全ての行事を終える。祭壇やテントといった特別な設えは行わず、祠の前で僧侶が読経する。地藏盆の世話役（その年の町内会長）がビーチパラソルで僧侶のために日陰をつくり、住民たちは道路を挟んで反対側の軒下から祈りを捧げている。

また、ある町内では、開発事業の増加により、これまで地藏盆の会場となっていた一軒家や空き地が減少した。現在はマンションやビルの谷間にある戸建て住宅の一室で地藏盆を開催している。スペースが限られているため、数珠回しの輪も円をつくれず、歪な形にならざるを得ない。マンションには町内会や地藏盆に参加したい住民もいるが、町内の人口に対してマンションの規模はあまりにも大



最小限の行事と空間利用

きい。もとからいる住民とのバランスを考えて、マンション住民を受け入れるかどうか判断を保留している。

事例② 多様な住民の交流を支えている地藏盆

マンションや新築の住宅の住民等、町内に最近住み始めた住民を町内会に巻き込む過程で地藏盆を盛り上げている場合がある。

ある町内では、ボールすくいやかき氷、子供用福引等、数々の行事が町内の空間（路上、町家のミセの間、マンション前の広場等）を目一杯使って行われる。今ではほとんどみられなくなった「ふごおろし」（通りの反対側の建物の2階にロープを渡し、「ふご」（＝畚）に入れた福引の景品をおろしてくる余興）も行われている。さらに、この町内では地藏盆の行事がひと通り終わった後、秋の学区運動会の競技（町内対抗リレー競走）の練習が通りの空間で行われていた。

この町内の地藏盆はなぜこれほどまでに賑やかなのか。実は、10年ほど前まではこの町内の地藏盆も人口減少により存続の危機にあったという。しかし、ある時、町内にマンション建設の話が続けて持ち上がった。町内の住民はこれをチャンスと捉え、マンションの子育て世帯をまずは地藏盆へ誘い、その後、町内会の運営にも徐々に関わってもらい、地藏盆は現在の活気を取り戻したのである。



町内の空間を最大限に活用

事例③ 大人だけでも楽しめる新たな地藏盆

たとえ子供の数が少なくなっても、内容の工夫や外部からの協力によって行事を盛り上げるという地藏盆の新たな形も現れつつある。

ある町内では、高齢化と子世帯の転出が進み、子供の数がついにゼロとなった。それでも、大人（その多くは高齢者）だけで地藏盆を今も行っている。ビルの1階のガレージを借りて地藏を祀り、僧侶による読経が終わると、ゴザの上に景品を並べ参加者全員で輪投

げを行う。その後も食事や御詠歌、ガーデニングといった行事を楽しむ。特に、ガーデニングはこの町内の恒例行事である。鉢植えをそれぞれ自宅に持ち帰って玄関先に飾ることで、町内の環境美化にも役立っている。この町内の他にも、町内の高齢者施設（デイサービス）と連携して地蔵盆を盛り上げているところもある。施設の一部のスペースを借りて祭壇を設え、施設の利用者やスタッフ、ボランティアの学生も参加して数珠回しや食事等の行事を楽しんでいる。



大人だけで楽しむ行事の例（輪投げ）

■地蔵盆のまちづくりへの展開

地蔵盆は本来、町内単位の行事であるが、近年、京都では学区や地域のまちづくりの一環として地蔵盆を行う動きが盛んである。地蔵盆がない町内やマンションに住む子どもたちのために小学校の地域交流室等を借りて地蔵盆を開催する。私が知る学区でも今年8月の最終土曜日に小学校の体育館を借りて学区の地蔵盆を開催した。すると、予想以上に多くの参加者が集まり、主催者である自治連合会の役員も、普段はみかけない参加者（その多くはマンションの住人）の多さに驚いたほどである。子育て期の若い世帯には、地蔵盆に宗教行事という感覚はあまりなく、参加のハードルも高くない。むしろ、京都らしい風習を子供と一緒に楽しめる機会と捉えているようである。この他にも、開発により人口が急増した地域で500人以上の子供を公園に集めて行われる大規模地蔵盆（通称「メガ地蔵盆」）、地蔵の祠をスポットに見立てた「地蔵スタンプラリー」、地蔵盆をガイドの案内とともにめぐる「地蔵盆ツアー」等、従来の枠には収まらない取り組みがある。

このような近年みられる地蔵盆の新しい取り組みには、本来の地蔵盆ではないという否定的な見方もできる。しかし、まちづくりの

観点からみると、このような動きには必然性があるように思う。すなわち、京都の地域コミュニティは「町内」と「学区」という単位の重層的な構造のもと、自治の文化を育ててきた。「町内」の原型は、室町時代、応仁の乱によって荒廃した京の都で、自然発生的に生まれた。通りを挟んだ家々が辻ごとに木戸門を設け自警のための集団（両側町）をつくったのである。「学区」は、明治時代、日本で初めての近代的学校制度を導入する際に行政によってつくられた町内の連合体（番組）が起源である。当時の小学校は、警察、消防等の機能も兼ねた地域自治の拠点であった。小学校自体は統廃合等によってほとんど現存しないが、「学区」という制度は現在も存続し、町内と行政の中間にある地域自治組織として機能している。

このように、京都において「町内」と「学区」は相互に補完しながら高度な地域自治システムを成してきた。このことを踏まえると、町内の体力低下が著しい昨今、地蔵盆においても学区が受け皿となっていることは不思議なことではない。むしろ、きわめて京都らしい地蔵盆の在り方と言えるのではないだろうか。

■結：地域に“在る”ということ

地蔵盆はこれまで、時代とともに意味と形を変えながら続いてきた。人と人の関わり、そして人と空間の関わりを媒介することで私の関係を調整する緩衝資源であり、それを使いこなす「公共的人」の育成装置であると筆者は考えている。このことは、地域のまちづくりやコミュニティ形成において地蔵盆への期待が高まっていることにも表れている。

それにしても、なぜ地蔵なのか。地域コミュニティの“核”となり得る資源は他にもあるはずなのに。これには、地蔵が京都の人々によって“お地蔵さん”と呼ばれ、長きに渡って親しまれてきたということも確かに関係している。しかし、それ以上に、地蔵という存在の質に今こそ目を向けたいと筆者は考えている。

地蔵が地域に“在る”とはどういう状態なのか。よく考えてみると不思議である。例えば、京都の壬生寺には地蔵の出開帳（通称「レンタル地蔵」）という仕組みがあり、地蔵がない町内が、地蔵盆の期間だけ寺から地蔵

を借り受けることができる。また、安置する場所がなくなった地蔵が、ひと目に触れにくい個人宅の敷地内に移される場合がある。すなわち、信仰対象としての地蔵は必ずしも特定の場所や物を必要としない、環境から切り離れられた存在である。このことは“定位置を持たない”という地蔵本来の性質に由来するのかもしれない。人々の振る舞いをみても“物”としての地蔵にはあまり強いこだわりがないと感じることがある。

一方、実体としての地蔵や地蔵盆は具体的な場所や管理・運営する人、すなわち環境（物理的と社会的の両方）を求める。現在みられる多様な地蔵盆は、地域的な差異であると同時に、人々が時々の変化に対応しながら、臨機応変に環境に働きかけてきたことの蓄積を表している。このように、地蔵という存在の質に立ち返ると、地蔵盆では環境への「接続」と「切断」が同時に可能である。そして、地蔵という存在と人々の環境への働きかけの関係の中にもこそレジリエンスを見出すことができる。

地域コミュニティの“核”となる資源について、それがどのように“在る”のか。「存在」の質に立ち返って、私たちと「環境」の関わりを捉え直してみる。現代のまちづくりにおいて、このような視点が重要になっていくであろう。（まえだ まさひろ）

注釈

- 1) レジリエント・シティ実現にむけた6つの重点的取組分野のうち「支え合い、助け合うまち」の基盤として、明治時代の番組小学校を起源とする学区コミュニティと並んで、町内単位で行われる地蔵盆等の風習が挙げられている。
- 2) 「唯識」とは、この世界には客観的存在はなく、あらゆる存在は「識」という心のはたらきによる主観的存在であるとする思想である。大乘仏教の「空」の思想を基礎にしていると言われる。西洋哲学における存在論（唯心論）、観念論との類似性も指摘されている。

参考文献

- ・師茂樹：京都の「地蔵」信仰の背景、京都の「地蔵」信仰と地蔵盆を活かした地域活性化事業 報告書、pp.15-21, 2015
- ・村上紀夫：京都 地蔵盆の歴史、法蔵館、2017
- ・速水侑：地蔵信仰、はなわ新書、1975
- ・上田篤：京町家 コミュニティ研究、鹿島出版会、1976
- ・R.セネット著、北山克彦、高階悟訳：公共性の喪失、晶文社、1991
- ・前田昌弘 他：京都市都心部における地蔵盆の運営実態と参加者の多様性—レジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第714号、pp.1833-1842, 2015
- ・前田昌弘 他：地蔵盆運営への関与からみた町内住民間の関係の冗長性—レジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割に関する研究 その2、日本建築学会計画系論文集、第756号、pp.397-405, 2019

1995年のこと

—「西の丸迎賓館」から 「中央公会堂」へ—

太田隆信スタジオ

太田隆信

1934年 台湾生まれ
1958年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
同年坂倉準三建築研究所入所
1982年 同取締役大阪事務所長
1994年 同代表取締役(大阪事務所長を兼ねる)
2005年 同相談役
2008年 太田隆信スタジオ開設
しばらくの間 坂倉建築研究所特任
参与を兼ねる
1994年～1995年 日本建築協会 常任理事
1996年～1999年 日本建築協会 理事

今年4月23日の夕刊、G20晩餐会、大阪城「西の丸迎賓館」と、中之島「中央公会堂」が候補に挙がって、「迎賓館」有力との記事がトップに。

驚いた、いずれも坂倉大阪の作品、私が手塩にかけた仕事だ。

当時の事ども、阪神淡路大震災と重なりあって、忘れ難いものがある。

あの頃の一断面として、以下思いつくままに…。

1994年の夏から1995年の秋にかけて、大阪城公園休憩所（西の丸迎賓館）の設計監理をさせていただいた。

7月中旬、最初の打合せで、西の丸に相応しい御殿風のものを、と言われた。

この「御殿」、新たに創造するのではなく、重文クラスの御殿の写しが相応しい。

となると、二条城の白書院か、即座に提案したところ、すんなりと受け入れていただいた。阿吽の呼吸と言うべきか、ここんところの説明は難しい。

私の発言、蛇足気味に補足させていただくと、坂倉大阪には、戦後こつこつ買い集めた様々な日本建築図集があった。

京都奈良などを散策の翌日は、それ等の書でおさらい、この繰り返しが咄嗟の発言に突ったか。

同様なこと、他のOBの方々も言っておられる。

出だしは上々と言ひ条、ここ迄はプレリウド、その先が大変。

なにしろ、APEC首脳会議が開催されるのだから、見た目、雰囲気は、白書院であっても、言うところの最新最高のホテル並みの機能を備えた空間であって、その上さらに、首脳が一堂に会する場だから、詳しくは省略せざるを得ないが、相応しい強靱な建築が求められる。そんな白書院を造るには、最新の材料を、最新の技術で組み合わせて…、

いやもう大変、建築は工学、基本は技術という事を再確認の大奮闘。

それでも予定通り、12月には着工。

その直後、1995年1月17日に、阪神淡路大震災が、「天災は忘れた頃にやって来た」のだ。

当時の事ども書き出すときりがない。

ここでは省略せざるを得ないが、ただ一つ「復興は平常心で」、災害後の早い時点でこの原点に戻って、復興に臨んだのがよかった。

今後のためにも、このことだけは、明記しておきたい。

予定通り9月には竣工。

直前に、現場を訪れた横山ノック知事（当時）の、大声と爆笑が懐かしい。

そして、APEC開催の11月、中央公会堂プロポーザル要項が発表に。

これラージファームの仕事と、わかってはいたけれど、中央公会堂には、私なりの深い思い入れがあった。

1934年基隆生まれの台北育ち、1946年春大阪に引き揚げてきた私にとって、中之島公園は、台北でいうと新公園。堂島川越し、中央に塔のある大阪控訴院が、台湾総督府（現台湾総統府）なら、中央公会堂は、台北医院（現台大医学院旧舎）。何れも煉瓦造、私にとっては原風景の写しとも言ふべき佇まい。

おまけに、大阪で30年以上も仕事をさせていただいているのだから、なんとか参加出来ぬものか、及ばぬまでも、一矢報いられぬものか。

アトリエ派にとって、プロポーザルのしんどいところは、過去の、同種・同規模作品の実績リスト作成。

なんとか知恵を絞って、目処がたった頃、東孝光さんから、お電話いただいた。



大阪城西の丸迎賓館「建築と社会」1999年2月号より



台北医院（絵葉書）

「中央公会堂、応募したいのだけど、実績リストのハードルが高い、アトリエ派には歯が立たない、もっぱらの噂だけど、実際はどうなの、坂倉もちろんやるんだよね」

即座の返答もあったが、それではかえって意がつたわらぬ。

「要項、ネットで簡単に検索できるから、見ていただいただいて、再度お電話頂いた方がいいのでは」と、応答させて頂いた。

そんな悠長な、でも、これ1995年の応答であること、忘れないで。

当時は今ほどのネット社会ではなかった。

大震災の時、神戸市役所横の広場に仮設の青電話がずらっと並んで、人々が群がっていたシーン、思い出してほしい。

数日後、「巷間噂通り、リストのハードル高すぎる、アトリエ派には無理、応募諦めます。それにしても、太田さん頑張ったね。健闘期待してるよ」

ありがたいエールを頂いて、大震災に始まって、なにかと大変続きのこの年、ようやく、爽やかに年の瀬を迎えることができる思い、嬉しかった。

中央公会堂、昔のまんまの姿と、愛されてきたが、1918年以来、太平洋戦争を挟んで、80年におよぶ歳月のなかで、その時々ニーズに合わせて、補修改装工事がおこなわれて、相当変わっているところもある。

また、当然ながら、今の用途に合わないところもある。

何ひとつ、省く事なく、加える事なく、創建時の姿に戻しながらも、只今のニーズに答えうる建築に…。

これ正しく保存再生という名の創造。

なんだか、「西の丸迎賓館」と相通ずるものがある、思わず微笑。創建時の佇まい、私の原風景になぞらえて、あらまほしい姿をしっかりと描けそう。

この想いが、私の背中を押してくれた。

1996年に設計を始めて1999年に完了、同じ年に工事が始まった。中央公会堂の姿というと、正面玄関が定番だが、梅壇の木橋の上から眺める南面の優しげな姿も悪くない。

南面地階、ドライヤードに面した食堂の外観、見えにくい所だが、上階のファサードを、しっかりと支える力強いデザイン。

この部分が見えてこそ南面の姿が活きてくると、食堂前面にサンクンテラスを計画。

これで、南面全貌をきちんと見ていただくことができる。

惚れ惚れするような姿と、台北でスピーチの折、申し上げたら、「この姿、監察院（旧台北州庁）だね」と言われた。

私にとっては新発見だったが、これは後日談。

世紀を跨いで2002年竣工。

気がつけば、その頃が大震災復興一段落の時、ぴったり重なっている。

今振り返ってみても、あの頃、無我夢中よくやったもんだ。

保存再生の仕事は言わば謎解き、メイズ、ジグソーパズルの面白さがある。

私にとって、最初の増改築の仕事、1960年の「南海ビル高島屋部分一部改装工事」以来、その魅力にハマってしまって、中央公会堂が折り返し点かな、今に至るも続いている。

（おた たかのぶ）



大阪市中央公会堂 正面外観「建築と社会」2002年12月号より



梅壇の木橋からの大阪市中央公会堂 撮影：太田隆信

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

talk baton 14 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのボタンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



今回は初の試みである、マイクロソフトが開発したアプリケーションの「Microsoft Teams」を利用した、遠隔地による場所を選ばない対話型・参加型のトークボタン。

各参加者は自社での自席や会議室で、画面を見ながらゲストとのトークセッションを実施。※準備も含めて数名はMicrosoft大阪事務所から参加ゲストの問いかけに対して、映像を見ながらTV電話による会話と、質疑に対して文字として回答を書き込むチャットを体験し、離れた場所でのコミュニケーションの可能性についても効果を検証することができた。

■はじめてのTeamsの利用

佐野：さのひろです。名前がチャームポイントで、平仮名で4文字という、なかなか周りの男性ではないと思います。タイに1年住んでいました。佐野寛、タイで検索するとたくさんヒットしますが僕ではありません(笑)。大阪大学で建築を専攻していました。意匠設計ではなくて、構造のほうで、プレストレストコンクリートの耐性などをシミュレーションするような研究をしていました。そういうことが楽しくて就職先はIT業界を選びました。今日は皆さんTeamsの利用ははじめてだと思いますが、思ったことをどんどん

書いていって下さい。書かれた意見に対して皆さんで気づき等が得られると良いなと思っています。ぜひ参加型トークボタンで進めたいと思っています。

■ITとの距離

佐野：今日は建築とプログラムというタイトルですが、広くITとも捉えて話します。今建築の仕事をされていて、ITとどれくらいの距離を感じていますか。

参加者：「正直そんなに近くは感じていないです」「最近ではヴァーチャルリアリティなどの進化で少し近いと感じだしています」「まだ良く分からない存在だと感じています」(書き込み)

佐野：今日の目標はITに近いもの、使いやすいと感じてもらえるよう頑張って説明します。

■Microsoftが目指すもの、目標設定

佐野：少し哲学的な話ですが、今仕事で目指している建築や、創ろうとしている世界というのはどういったものでしょうか？

参加者：「居心地良い空間」「地域になじんでいくもの」「人に寄り添う空間」「人とまちを元氣する」「内臓感覚に訴える空間」(書き込み)

佐野：これがすごく大切なことだと思っています。仕事をする上で重要なのは何を指すのかが明快になっていることだと思います。Microsoftが目指している世界を動画で紹介します。

※動画内容は、「Microsoft:Productivity Future Vision」で検索。

この動画は2015年に作られたもので、Microsoftが今後5～10年で実現したい世界です。例えば、離れた場所の人たちと一緒に話をしたり、テーブルの上の3Dモデルで議論、画面を触って打ち合わせができたりという、すでに実現していることが多くあります。



佐野氏のプレゼンテーション



「Microsoft Teams」画面

2015年に定めた目標となる世界を実現するために日々努力しています。何をを目指すのかということをきっちり自分達で定めて、その明快な目標をどのように実現していくかを考えていくことが大切だと思います。

■そもそもAIとは？

佐野：AIって何の略でしょうか？

※残念なことに参加者全員が即答できず。。。。

アーティフィシャル インテリジェンスですね。日本語訳は人工的な知能という意味です。これだけでも、今日の会の価値がありましたね（笑）。AIに対して怖いイメージ、人間にとって替わるターミネーターみたいなイメージをもしかしたら持っている方もいるかもしれませんが、実際は全然違ってきます。AI技術は人を助ける、人がもっと様々な事を達成するために使うものです。Microsoftでは開発にあたっては、①プライバシーとセキュリティ、②透明性、③公平性、④信頼性、⑤多様性、⑥説明責任、という6つの倫理的要件を定めています。

■AI技術の進歩

佐野：AI技術は日々進歩しています。例えばミックスドリマリティやAIによる画像認識、音声認識や文章読解については人間の誤認識より高い精度となっています。機械翻訳も人間同等となる、AIは人間を超えつつあるのは皆様のご認識の通りです。量子コンピューティングの進歩により膨大な計算を瞬時に行うことも可能となっています。

時間をかけている構造や環境のシミュレーションなども今後は一瞬で計算可能となるかもしれません。

※当日は事前提出した参加者の顔写真等を利用して画像認識の正確性や写真からいかに人の感情が読み取れるかをアプリケーションで実験しました。

■より建築とITを近づけるために

キーワードはどうやって“測るか”

佐野：より建築とITを近づけるためには先ほどの説明の通り、まずは自分たちが何を達成したいかという目標が最も大切であり、そのためにどのようにITを利用するのかを考えると良いと思います。その際に意識として新しく持ってほしい大切な事はどうやってそれを“測るか”ということです。自分達が提供する価値をどうやって“測るか”がITを取り入れるための一つのキーワード、最初のステップだと思います。

——佐野氏から、旅行客と地域居住者が共に継続的に安心して快適に過ごせる「観光都市」を目指す例題が出題され、①行きたい場所に行き易い便利さ、②プライバシーと治安を守る環境、③昔ながらの地域の特徴やまちなみを残す、という3つのことを提供する価値としてどう“測るか”を構想段階、設計段階など、段階を踏んで考えてみた。

参加者：「死角の少なさを測る」「移動者数の多い少ないによって室や動線構成をする」「色」「まちの色」「犯罪件数」「タグ付け数」「入場者数」「レビューサイト」「滞在時間」「日常生活との重複」「地場素材の使用量」「Happiness判定される表情の割合」など。

佐野：皆さん上げてもらった上記のようなものが仮に測れれば、便利さ、安全性、地域らしさなどの価値を一定量として測ることができるようになります。

“測る”、つまりまず可視化するということがとても重要です。見える状態にしたあとで、次にそれらはどう新しいのか、また何を優先し、どう順位づけるのかなど、測ったものの“扱い方”を考えることで、人々が豊かになる魅力的な提案が可能になります。これがIT活

用のためのストーリーです。

実際の測定方法については、難しい部分もありますが、“測りたいもの”さえあればさまざまな専門家にも協力してもらって実現していくということも可能だと思います。

測るという視点があるため、このような色々なアイデアが生まれてくるのだと思います。

■おわりに

佐野：少し難しいかなという印象を持たれたかもしれませんが、やろうとしていることはITを使うということが目的ではなくて、“測る”という視点を持つことで、今やっている設計の幅を広げる、より多くのことを実現できるようにする、ということが重要です。提供しようとしている価値をどうやって可視化するのかということを考える意識を持てば、すでに様々な新しい技術が開発されていますので、新しくITを取り入れていける、近づいていけると思います。ただ、実際にはどんなテクノロジーが開発されていて、どう使えるのかを知っていないと対応が難しいという課題もあるので、そこは、私たちのようなITの専門家に相談してもらえればと思います。ITやプログラムを通じて、一緒に新しい価値を提供できればと思います。

「talk baton 14」を終えて

AI技術により職を失う危機感を感じ、そうならないような設計者になりたい、ならないといけなと考えていましたが、今回のtalk batonにより、ITやAI技術と上手に付き合っていきたいと感じました。

対 談 日：2018.09.14

場 所：サイバー空間

Microsoft Teams（アプリケーション）

モデレーター：宮武慎一

（安井建築設計事務所）



各事務所等で参加するトークバトン風景



参加者で二次会トークバトン

イケフェス2019スペシャルツアー 日本建築協会Presents！ 「天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く」 レポート

「生きた建築ミュージアムフェスティバル 大阪（イケフェス大阪）2019」のプログラム「日本建築協会Presents！天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く」が、2019年10月27日に行われました。

同プログラムは昨年に続いての開催で、協会の情報見学小委員会の委員が進行、引率し、史料研究会から委員長の橋寺知子先生、山形政昭先生に案内人として協力いただきました。

冒頭、設楽貞樹会長は「このプログラムは日本建築協会が、一般に広く参加していただける機会を設けようと、イケフェスとタイアップした企画です。今回のツアーでは個々の建築を見て回るだけでなく、界限、街の空気、その歴史も併せて感じ取っていただきたい」と挨拶されました。

好天にも恵まれ、参加者約30人は2班に分かれ、先生手作りの資料を手にツアーをスタートしました。



挨拶する設楽会長（中央）。その右奥は山形先生

出発地点の四天王寺では日本最古の本格的な仏教寺院であること、また中心伽藍の五重塔、金堂、講堂が昭和時代にSRC造で再建されながら飛鳥時代の様式を今に伝えている意義などの説明を受け、それらが一直線に並ぶ「四天王寺式」という伽藍配置を確認しながら回廊を巡りました。



四天王寺の中心伽藍回廊で説明する橋寺先生（左）

次に訪れたのは「大阪にも存在した」清水寺。ここには、まさに台地のへりに立っていることを実感できるテラス「清水寺舞台」があり、四方にハルカスや通天閣、南海サウスタワービルを見渡せる絶好のビューポイントとなっていました。わきの階段を下りると、本家の「音羽の滝」に因む、市内唯一の天然の滝とされる「玉出の滝」が出迎えてくれ、滝をバックに参加者全員で記念撮影しました。



「玉出の滝」の前で記念撮影する参加者

続いて天王寺七坂の一つ「逢坂」を通過して一心寺へ。ここで目を見張ったのは何ともお寺らしくない近代的な仁王門。また信徒会館に架かる六角形のトラス構造の屋根も異彩を放っており、いずれも寺の前住職が建築家でもあるとの解説で合点がいきました。



一心寺仁王門

さらに天王寺公園に歩を進め、和風モダンの名建築、大阪市立美術館を眺めながら住友家庭園跡の「慶沢園」へ。参加者は足を踏み入れるなり、大きく広がる池と黒松を配した中島、点々と浮かぶ岩島が織りなす光景にため息を漏らし、背後にそびえ立つハルカスとともにカメラに収めていました。造園を手がけた庭師もハルカスを借景とすることなど思いもよらなかったことでしょう。



慶沢園と背後にそびえ立つアペノハルカス

3時間という長丁場のツアーの終着点はイベントで大賑わいの「てんしば」でした。皆さん疲れも見せず、お得感満載で大満足の一日となったようです。

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1997～2018

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1997 vol.78	● 建築のロングライフ化をめざして	● 鉄ものがたり *	● 東海支部会員作品 ● 金沢・能登・福井・文化とまちなみ・建築*	● 創立80周年記念 ／建築と私と社会 ー80人の眼ー	● 木造建築の伝統 技術とその継承	● 住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開― ● 住都公園関西支社	● 素材の不思議 ● 大阪ドーム	● 新エネルギー ● 住宅・都市整備公団改革への提言	● クロスワード 都市OSAKA *	● モザイク都市の住むかたち ● 昭和設計40周年	● 私の空間作法 ー会員作品ー	● 第44回 青年技術者 ● 京都駅ビル
1998 vol.79	● 新しいまちづくりの予感 ● 東畑建築事務所創立65周年	● Concrete ● 九州とわたし、そして建築	● 東海支部会員作品 ● 信州―諏訪とその周辺―	● 街並みの演出―最近の外構材料	● 生活環境の安全・安心	● 地球環境 保全と建築	● 心と体を元気にするインテリア	● 建築設備―ビルメンテナンスの立場から	● 建築への証言―98―21世紀に向けて	● ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	● 私の空間作法 ● 2001年の医療施設	● 第45回青年技術者 ● 駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	● “らしさ”のデザイン ● 建築を練る小粋なモノ仕掛人	● 大阪市都市整備局	● 東海支部会員作品・99 北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	● 都市のパブリック	● 関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	● 大阪城天守閣平成の大改修	● 改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	● 私の目でみた環境問題	● アーバンインテリ―ア―都市空間としてのインテリア	● 木とともに*	● 私の空間作法	● 第46回 青年技術者
2000 vol.81	● 21世紀のデザインを見る ● 安井建築設計事務所創業75周年*	● 中国支都―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	● 東海支部会員作品2000 恵中・富山―地域文化の継承と新たな施設づくりの流れ	● こころを癒す環境デザイン	● 測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	● スケルトン&インフィル	● 改正建築基準法―パートII―	● 100年後へのメッセージ ● 日建設計創業100周年	● 来世紀に引き継ぐーわざ、もの、こころー	● 時間*	● 私の空間作法―会員作品― ● 21世紀の高齢者の居住環境	● 第47回 青年技術者
2001 vol.82	● エス・ティ・ティファシリティーズ *	● 21世紀の建築設計教育	● 東海支部会員作品 ● 岐阜・大垣	● IT社会におけるきずな	● 自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	● 成熟社会をささえるまちづくり	● 現代の日本の空間・文化を探る	● 環境―近未来に向けて今できること― ● 大建設―作品特集1996―2001―	● 建築の力都市の力	● 緊張 ● 都市基盤整備公団関西支社	● 私の空間作法―会員作品―	● 第48回 青年技術者 ● NHK大阪放送会館・大東証史博物館
2002 vol.83	● 国土交通省近畿地方整備局管轄部局	● 再生・リサイクル	● 東海支部会員作品 ● 愛知・名古屋	● 生活環境の安全・安心 ーパート2ー	● 塗装のいろいろ	● 都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	● いま、インテリアデザインは● 演習リバープレイス*	● 建築をささえるセンサー	● 建築とボランティア	● 時を超えて―サステナブルエンジニアリングの現在―	● 私の空間作法―会員作品―	● 第49回 青年技術者 ● 大阪市中央公会堂
2003 vol.84	● 東畑建築事務所創立70周年	● 九州の地域づくり・まちづくり	● 東海支部会員作品2003 ● 愛知・芸術と建築・街づくりを考える―	● サスティナビリティ―次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン―	● 建築と五感	● 都市計画法及び建築基準法等の改正	● コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	● 介護と建築・設備	● 建築とノスタルジー―建築の主観的価値について―	● 力と楽しくつき合う方法	● 私の空間作法―会員作品―	● 第50回 青年技術者 ● 青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	● 大阪市住宅局	● 都市緑化	● 東海支部会員作品 ● 愛・地球博*	● 省リクスな「まち再生」	● リニューアルの技	● 地域住民主体のまちづくりと支援制度	● Product Design+1	● 銭湯―心地よさを求めて―	● 建築家とは何か	● 巨大地震にそなえて	● 私の空間作法―会員作品―	● 第51回 青年技術者
2005 vol.86	● 震災から10年	● 「健やか」 ● 長崎医療センター	● 東海支部会員作品2005 ● 東海における施設づくりへの新たな試み	● 建築の経済化	● 住まい方の変化	● 人工栽培	● 次世代に伝える「木」の建築 ● 「建築と社会」1000号記念	● 改正建築基準法と景観緑三法	● 火災から守る	● 構造の過去から未来へ	● 私の空間作法―会員作品―*	● 第52回 青年技術者
2006 vol.87	● 都市環境デザインと参加のまちづくり	● 「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	● 東海支部会員作品2006 十東海支部特集3部作	● 都市再生の本質―光と影のはざまで―	● 変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	● 身近な省エネルギー―エネルギーをたくわえ、有効利用する―	● 設計図が伝えるもの	● 建築物の安全・安心	● 第53回 青年技術者	● 「セキュリティ」	● もしも…～構造が未来へつなぐ夢～	● 私の空間作法―会員作品―
2007 vol.88	● 光り輝く京都の景観まちづくり	● 学校新時代	● 東海支部会員作品2007 十東海支部特集3部作	● 創立90周年記念―この10年、これからの10年―	● あそび考	● こだわりの設備と空間の移り変わり	● 住まいの設備と空間の移り変わり	● 建築系雑誌が伝えるもの	● 建築基準法等大改正	● 第54回 青年技術者	● ガラスを考える	● 楽しい構造の世界
2008 vol.89	● 私の空間作法―会員作品―	● PFI事業、その後*	● 東海支部会員作品2008 十東海支部特集3部作	● まちづくり2011年宣言	● 新ホテル物語	● 設備に役立つ地震対策	● 中国地方を巡る歩いて見えるもの ● 小聖心女子学院	● 建築と景観	● 第55回 青年技術者	● 木造住宅を巡って	● 建築においてROBOTが活躍する日は来るのか?	● 自然と戦う構造
2009 vol.90	● 私の空間作法―会員作品― ● 京都電車中京線―新線が延伸し、新時代―	● 水の都にぎわいのある未来に向けて	● 東海-TOKAI オムニバス	● 楽しい福祉	● 体感するインテリア	● 建築空間が求める空気環境(空気質)	● 建築と水	● 実用レベルで展開される施工管理のIT化	● 第56回 青年技術者	● 地域の歴史資産を活かしたまちづくり	● 第16回 会員作品特集“私の空間作法”	● 構造家日記～頭の中をのぞいてみた～
2010 vol.91	● 創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI	● 建築とエコ技術	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● 食と建築・都市	● ホスピタリティのあるケア空間	● 太陽光発電	● 建築と石	● 再生・受け継ぐ・繋がる*	● 第57回 青年技術者	● 建築ストック社会の形成への展望	● LED照明の活用・将来を考える～人・地球への思いやり～	● 東京スカイツリー
2011 vol.92	● UTM+近畿一帯地ストック再生策議案～ストック活用時代の展開～ 第17回 会員作品“私の空間作法”	● BIMは設計を変革するか?	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● まちなかのサードプレイス	● 変遷する“身の置きどころ”	● ECO―建築設備が出来るECO技術―	● 建築と土	● 鉄道駅に注目する	● 第58回 青年技術者	● 火災に強い建築を考える	● コンクリートという素材	● 構造教育と社会
2012 vol.93	● 自然災害に立ち向かう力を求めて	● 今、私が思う「和」	● 東海支部特集	● 第18回 会員作品“私の空間作法”	● 中国市場に挑む	● ZEB ネット・ゼロエネルギー・ビルを目指して―低炭素社会の実現に向けて―	● 建築と窓	● 巨大地震に備える	● 第59回 青年技術者	● 超高齢社会に求められる住まい	● 歴史的建造物の保存活用	● 身のまわりの世界の「構造」を探る
2013 vol.94	● 東畑建築事務所創立80周年 U-35のまなざし ● 脱成長の時代を考える	● “らしくない”空間 ● 小特集 中之島フェスティバルタワー	● 東海支部特集	● 第19回 会員作品“私の空間作法”	● コミュニティの“かたち”―人と人とのつながりを再考する―	● 無駄から見える節電	● 第60回 青年技術者	● グランフロント大阪	● 素材としての建築	● 建築に携わるものに求められること	● 木の街をつくる	● 実験
2014 vol.95	● エリアマネジメントの新展開に向けて	● 融合する空間―新たな試み～	● 東海支部特集 ● 小特集 「ABENO REBORN」	● 第20回 会員作品“私の空間作法”	● オフィスビル設備の変遷とこれから	● オフィスのこれから	● 第61回 青年技術者	● 建築と時間	● 省エネ・低炭素のこれから	● 大阪・上町台地・あべのハルカス ● 複層・高度化する建築とその技術について	● でっかいものはすごいぞ	● 安井建築設計事務所90周年
2015 vol.96	● フォー・オールの時代に向けて	● 場をつくる～プログラムの挑戦～リノベーションのリアル	● 支部復活55周年記念 東海支部特集	● 第21回 会員作品“私の空間作法”	● あかり・文化・創造	● これからの学びのかたち	● 第62回 青年技術者	● 建築の価値	● 空き家と向き合う	● 職人がいなくなる!!オリンピックと10年後に備えて	● 形態にあらわれた構造	● 「図面」を変える～BIMの深化が誘う建設プロセスの変革～
2016 vol.97	● 都市の記憶をたどって	● 非日常の棲み処～寝泊まりの進化	● 東海支部特集	● 第22回 会員作品“私の空間作法”	● 人の移動・物の移動・情報の移動	● 第63回 青年技術者	● おもてなしと建築	● UR都市機構西日本支社 暮らし輝く先駆けのまちづくり	● 人口減少社会のまちづくり	● 見えないものを語る～新たな技術・新しい施工管理・検査システムへの展開―	● 構造を支える人と技術のつながり	● ボーダレス～消失する境界と拡張する領域
2017 vol.98	● ニュータウンから学ぶこれからの「計画」	● 第23回 会員作品“私の空間作法”	● 日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100	● 東海支部特集	● 建築設備の伝統と革新	● 第64回 青年技術者	● 100年前の建築、100年後の建築―意匠・空間の視点から―	● 観光立国を目指した宿泊施設について	● 100年前の建築、100年後の建築―施工・材料の視点から―	● 社会と繋がるディテール	● 関西で木と生きる	● 時間軸に挑むクリエイター達～時をデザインするということ
2018 vol.99	● 東畑建築事務所創設85周年 ● 温泉と暮らし	● 第24回 会員作品“私の空間作法”	● 東海支部特集	● 働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル	● スポーツイベントを支える設備技術	● 第1回図面調査(日本建築協会調査コンクール)募集テーマ これからの建築と社会―その関係を探る―	● 第65回 青年技術者	● 平成と建築	● 安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと今後の可能性	● 山と建築―そこには山があるから登るのだ!―	● 重さと関わる	● こだわりの空間料理人

*は欠号

建築と社会 第100集総目録

2019

(令和元年)

一般社団法人 日本建築協会

挨拶

●年頭の言葉

2019年を迎えて／設楽貞樹…………… 1

●本年の抱負

常設委員会／勝山太郎・中尾勝悦・西 博康・
山形政昭・中村文紀…………… 1

特集号

共生社会のまちづくり……………	1
第25回会員作品“私の空間作法”……………	2
京都支部創設70周年記念特集景観とまちづくり	
一保全・再生・創造……………	2
東海支部特集「社会と建築」という流れ……………	3
建築と社会を繋ぐプロダクション……………	4
建設業2.0 ～価値・意識・生産性～……………	5
第2回 片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）	
募集テーマ：建築をつくるひと……………	
一これからの姿を問う……………	6
第66回 青年技術者……………	7
建築の仮設性と恒久性……………	8
「災害。逃げる」……………	9
新素材の可能性……………	
一材料の高機能化とハイテク素材……………	10
最先端技術と社会……………	11
オープンマインドな空間……………	12

作品作風

●官公庁舎

四日市北警察署……………	3
建 築 主 三重県	
設計・監理 安井建築設計事務所	
施 工 鴻池・大宗・堀田特定建設工事共同企業体（建築）	
藤原・カキトー特定建設工事共同企業体（機械設備）	
桑名電気・三重電設特定建設工事共同企業体（電気設備）	
高島市役所 新館……………	10
建 築 主 高島市	
設計・監理 安井建築設計事務所	
施 工 建築：桑原組・杉橋建設・高島鉦建JV	
電気：アマナエレン・脇阪電設JV	
機械：富士古河E&C西日本支社	

●学校

常葉大学静岡草薙キャンパス……………	3
建 築 主 学校法人常葉大学	

設計・監理 竹中工務店	
施 工 竹中工務店	
愛知淑徳大学長久手キャンパス健康栄養学科棟……………	3
建 築 主 学校法人 愛知淑徳学園	
設計・監理 日建設計	
施 工 安藤・間	
●幼稚園・保育所	
こねくとキッズ鈴鹿……………	3
建 築 主 住友電装株式会社	
設計・監理 東畑建築事務所	
施 工 トヨタT&S建設（建築）	
住友電設（設備）	
スミセツエンジニアリング（設備）	
兵庫大学附属加古川幼稚園……………	4
建 築 主 学校法人睦学園	
設計・監理 竹中工務店	
施 工 竹中工務店	
幼保連携型認定こども園 いちかわ東こども園……………	9
建 築 主 市川町	
設計・監理 安井建築設計事務所	
施 工 赤鹿建設	
●医療・保健	
和泉市立総合医療センター……………	7
建 築 主 和泉市	
基本設計・監理 内藤建築事務所	
実 施 設 計 清水建設関西支店一級建築士事務所	
施 工 清水建設	
医療法人晴心会 野上病院……………	9
建 築 主 医療法人晴心会	
設計・監理 清水建設関西支店一級建築士事務所	
施 工 清水建設	
●金融機関	
中京銀行今池支店……………	3
建 築 主 中京銀行	
設計・監理 伊藤建築設計事務所	
施 工 日東建設	
東春信用金庫名古屋支店……………	3
建 築 主 東春信用金庫	
総合監修 ティーフラス	
設計・監理 伊藤建築設計事務所	
施 工 滝建設	
●営業所	
愛知トヨタ自動車 瀬戸営業所……………	3
建 築 主 愛知トヨタ自動車株式会社	
設計・監理 安井建築設計事務所	
施 工 杉本組	
施 工 協力 川北電気工業、アベックエンジニアリング	
創栄、協和建材、尾州工業、JOBART	
●工場	
東海興業株式会社 高浜第2工場……………	3
建 築 主 東海興業株式会社	
設計・監理 安井建築設計事務所	
施 工 熊谷組名古屋支店	
●研究施設	
シスメックステクノパーク イーストサイト……………	9
建 築 主 シスメックス株式会社	
設計・監理 竹中工務店	
施 工 竹中工務店	
国立循環器病研究センター……………	12
建 築 主 国立研究開発法人国立循環器病研究センター	
基本設計・実施設計監修・設計監理 佐藤総合計画	
実 施 設 計 竹中工務店・日本設計	
施 工 竹中工務店	
●プレス	
テレビ静岡新本社……………	3
建 築 主 株式会社 テレビ静岡	
設計・監理 日建設計	
施 工 鹿島・静鉄・鈴与 特定建設工事共同企業体	
読売テレビ新社屋……………	11

建 築 主 読売テレビ放送株式会社	
設計・監理 竹中工務店	
施 工 竹中工務店	
●宗教施設	
カトリック芦屋教会 司祭・信徒館……………	8
建 築 主 カトリック大阪大司教区	
設計・監理 安井建築設計事務所	
施 工 コーナン建設	
●その他	
S社社員食堂……………	6
建 築 主 S社	
設計・監理 大林組大阪本店一級建築士事務所	
施 工 大林組	
アサヒファシリティズ蛭池寮 楓……………	7
建 築 主 株式会社 アサヒ ファシリティズ	
設計・監理 竹中工務店 大阪一級建築士事務所	
施 工 竹中工務店 大阪本店	

gallery

モケイ+α（林 洋平+谷 幸治）西田佳代……………	1
対話すること（三竿創+佐喜子）太田栄治……………	2
Casting The Invisible（大西康明）作品作風小委員会……………	3
大正通りポケット（白須寛規）加嶋章博……………	4
京都の狭小住宅（陶山 徹）鞆野淳司……………	5
本と建築（岡田良子）芳谷晴彦……………	6
まなごしに共鳴する芸術（野田睦美）倉渕奈千子……………	7
誘い包み込む緑（清水亮史）増田敬彦……………	8
新町・アワザサーカス 街区公園の新たな活用（ヤマモト ヒロユキ）菊池浩輔……………	9
風呂べら展（山下誠一郎）澤田純一……………	10
低く囲う住まい（長谷守保）居内章夫……………	11
ビジュアルイメージを作る（芝野健太）高木秀晃……………	12

共生社会のまちづくり

総論 共生社会の実現に向けて～2020年東京パラリンピックを契機として～／御手洗潤……………	1
各論1 共生社会における建築とまちづくり～ユニバーサルデザインの課題～／田中直人……………	1
各論2 観光の新たなフェーズ～地域と宿泊施設の関係性を再構築する～／阿部大輔……………	1
各論3 多文化とともに選ばれる団地を目指して／独立行政法人 都市再生機構……………	1
各論4 災害時の対応を考慮したまちづくり～地域力を育む取組み～／小路永守……………	1
各論5 「第三の居場所」～子どもたちを守り育てる新しい拠点～／安場麻里……………	1
各論6 防犯とプライバシー／吉村英祐……………	1
各論7 公共トイレにおける男女共用化の可能性～ユニバーサルデザインの視点から～／老田智美……………	1
アンケート 豊かな共生社会を求めて	
●NPO法人 多言語センターFACIL（医療通訳システム構築事業）……………	1
●一般社団法人 グローバル人財サポート浜松（介護職員初任者研修）……………	1
●NPO法人 ふじみの国際交流センター（多文化が未来を拓く民設民営 外国人相談窓口）……………	1

第25回会員作品“私の空間作法”

Lamp Lit Prose ーアーチの森2018ー／水谷俊博+武蔵野大学水谷研究室……………	2
／多層方式のベンチ／加嶋章博+摂南大学都市文化共生デザイン研究室……………	2
GARDEN FLATS ーBABYLON PROJECTー／塚口洋之……………	2
奥行きと回遊性を持つワンルーム保育空間／中川雄輔……………	2
田園から大空に広がる住まいに／新居照和&ヴァサンティ……………	2

	号
形式の参照とリノベーション／吉永規夫	2
リスタートのためのリノベーション／貴志泰正	2
小さな街づくりプロジェクト／岸 一	2
地域に寄り添う小さな矩形の消防署	
／株式会社現代設計	2
機能的でやさしいクリニック／池上 明	2
奥性・光・素材／遠藤直久・平尾和洋	2
伝統と現代 建築の表現／稲垣元宣・和江	2
地域の小児医療を支える診療所が運営する保育園	
／中尾勝悦	2

京都支部創設70周年記念特集 景観とまちづくり 一保全・再生・創造一

1. 総論 新景観政策10周年の成果と進化 ～10年の総括とこれから～／門内輝行	2
2. 歴史的景観と現代景観 京都の街の色考察 一赤と黒について一／上村明美	2
3. 京町家の保全・継承・活用の行方	
1 京町家の保全・継承の論拠と課題 ／高田光雄	2
2 京町家の保全及び継承に向けた取り組みの推進 ／関岡孝繕	2
3 森林資源の循環利用 京都府産木材を利用した木のまちづくりについて ／西光 広	2
4. 文化財の保存・活用と地域振興	
1 文化庁の京都移転で目指すもの一新・文化庁とは ／松坂浩史	2
2 京都府における文化財保存修理事業について 一歴史的建造物修理工事への取り組み一 ／菅澤 茂	2
3 ヘリテージマネージャーの育成と活動 ／白石秀知	2
5. 日本建築の匠の技	
1 「作って半分、育てて半分」／中村義明	2
2 京の銘木づかい／中川典子	2
3 竹と京都と建築／中川裕章	2
6. 歴史都市の防災化	
1 歴史都市・京都における建築物の防災対策 ／川口 浩	2
2 伝統構法木造～耐震設計・補強設計～ ／鈴木祥之	2
7. 観光都市と地域振興	
観光都市京都の建築と社会／宗田好史	2
8. 地域密着住宅における省エネのあり方 ／岡田圭司	2
9. 京都支部創設70年を振り返って／長瀬博一	2

東海支部特集「社会と建築」という流れ

●東海支部会員作品2019 (作品作風欄掲載)	3
●TOKAI Sketch Book	3
●特集I 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶 (第2回)	3
1：三重県大台町・旧大杉小学校・「大杉谷自然学校」 ／中井孝幸	3
2：地域を学び伝える自然学校一地域の終焉から 未来を見つめる一／大西かおり	3
3：小学校を核に地域で輝く拠点づくり一縮減時代 の地域再生を先取りした大杉谷自然学校一 ／浅野 聡	3
4：廃校活用の実態とその可能性一愛知県・岐阜 県・三重県の事例を通して一／野澤英希	3
5：小学校から自然学校へ 一地域の記憶を未来へ刻む一／中井孝幸	3
●特集II 納まり倶楽部	3
東海支部青年部会における30代前後の若手設計 者の活動報告／塩田哲也・中井孝幸・久保久志・ 三宅伸幸・鈴木豊一郎・小杉嘉文・佐藤 剛・ 鶴飼浩平	3
●東海の建築：屋根	3
施設をつなぐ「縁側モール」 阿久比町庁舎	

	号
／益田正博・川井茂輝	3
超高層ビルの足元に賑わいを生む「第二の大地」 グローバルゲート屋上庭園	
／長谷川寛・上河内浩	3
社員を家族のように大切に企業風土のシンボル として CKD株式会社企業内託児所	
／小谷陽次郎・岡田宏介・富田里央	3
ショッピングモールを印象づけるHPシェル構造の屋 根 ららぽーと名古屋みなとアクルス	
／因 純一・塩野友嗣	3
●東海支部だより	3
上海・杭州建築の旅一速度・密度から記号へそし て記号性の剥奪・漂流一／高木舞人・北川啓介	3

建築と社会を繋ぐプロダクション

■書架の変遷～書架の変遷と地震対策～ ／福山幸二	4
■“ものづくり”から振り返る ～東リ『創業百年』の歩み～／佐藤弘幸	4
■職人が造り出すモノづくり～ハンドメイドタイル～ ／谷川智崇	4
■空間に調和と可能性をもたらす家具～ホール用 シート・スタッキングチェア～／熊澤 工	4
■大規模改修工事における問題解決 ～アルミ手摺新設～／大島拓也	4
■超速硬化ウレタン防水 ～防水が変える建築デザイン～／柿崎順一	4
■高耐候性水性硬質ウレタン樹脂系塗料床材 アイピュール～「ピュールハードAH工法」～ ／田口泰行	4
■高級意匠性塗材～クライマテリア～／井澤卓也	4
■座談会 より良いプロダクトを目指して～設計者 の視点から～／多喜 茂・若江直生・宮武慎一・ 下田康晴・戸川勝之 司会：勝山太郎	4

建設業2.0 ～価値・意識・生産性～

総論 建設業2.0／宮崎ひろ志	5
各論	5
(価値改革)	
1 働く場の健康性評価 ～CASBEE-ウェルネスオフィス～／林 立也	5
2 時間をデザインする！／堀井一孝	5
(意識改革)	
3 働き方いろいろ ～照明メーカーの取り組み～ ／伊藤由紀代	5
4 建築現場の意識改革と生産性向上施策 ／宮地吾郎	5
5 海外の働き方を知る～タイの場合～ ／作田 猛	5
(生産性改革)	
6 BIMで変わる設備設計業務 ～基本要件モデル活用～／松下 文	5
7 電気設備工事の効率化～労働環境の改善～ ／阪口浩平	5
8 オフィスの生産性向上 ／三舩達雄 村田康史	5
9 設備データの活用／伊良子正	5
編集後記／橋本直樹・有尾清二郎・北野勝也・ 佐々木章二・木谷晃之・寺井千佳・夏井重行・ 梶井貴廣・宮崎ひろ志・森山正和・山本雅洋	5

第2回 片岡安賞(日本建築協会論考 コンクール) 募集テーマ：建築をつくる ひと一これからの姿を問う

審査報告／審査委員会	6
【第1次審査通過論考】	6
片岡安賞 集団意識と建築 ～1910年からの問いかけ～／吉野良祐	6
奨励賞 「ポスト建築家」時代の建築家たち ／吉田和弘	6

	号
奨励賞 DIYとギフトエコノミー／山口 純	6

第66回 青年技術者

■設計・計画部門

石黒紘介／常葉大学静岡草薙キャンパス、ATグ ループ本社 北館・南館、竹中工務店名古屋支店	7
菊地健作／学校法人 関西大学 千里山東体育館、 公益財団法人 浅香山病院一般科、社会医療法人 愛仁会 レジリエンスだいまつ	7
岸上和樹／ザ・パークハウス グラン 千鳥ヶ淵、 麻布学園創立120周年記念体育館建築計画、新 JA熊本県会館建設計画、大妻女子大学H棟新築 工事	7
鬼頭朋宏／近畿産業信用組合本店【都市型高層 ZEBの実現／伝統×革新】、アース環境サービ ス(株) 彩都総合研究所T-CUBE【研究者と来訪者の交流 を最大化するTWIN-CUBE】、ツムラ(株)静岡工場 食堂棟【一つ屋根の下 大きな家のような食堂】、 シミックファーマサイエンス(株)バイオリサーチセン ター【森の中の研究所】	7
佐賀淳一／ダイビル本館、新ダイビル	7
柴崎雅也／ベジフルスタジアム(福岡市中央卸売市 場青果卸売市場卸売場西棟)、唐津港湾合同庁舎	7
白井尚太郎／関西外国語大学御殿山キャンパス、 松山大学樋又キャンパス、関西外国語大学インター ナショナルコミュニケーションセンター	7
末重隼人／春日部市立医療センター、光市立光総 合病院	7
滝澤創也／広島修道大学付属鈴峯女子中学校・高 等学校、履正社学園豊中中学校・履正社高校	7
中村篤史／株式会社池戸製作所本社工場、悠旅 (ホテル)、静鉄ホテルプレジオ京都烏丸御池	7
野中広斗／アリオ倉敷、大阪ビジネスパーク 道路 空間活用社会実験、元立誠小学校跡地活用事業、 讀賣テレビ新社屋新築計画、鈴蘭台駅前市街地再 開発事業	7
花村和也／土岐市新庁舎～次世代へのメッセー ジとなる庁舎づくり～、亀山駅周辺2ブロック地区第 一種市街地再開発事業～にぎわいを創出するまち づくり～、静岡県警察学校本館～警察学校の顔と してふさわしい本館～	7
広瀬和也／武庫川女子大学 学校教育館、宝塚 市立文化芸術施設・庭園整備事業、(仮称) 関東 学院横浜都心キャンパスプロジェクト	7
広瀬良太／来訪者を導くホワイトスクリーン■大塚 製薬工場鳴門工場 守衛所(2016)、交差点のシン ボルタワー(2010) ■京橋創生館増築工事、農業 を核としたまちづくり拠点■K地域 地方創生プロ ジェクト(2018～)	7
村田真悟／伏見ミリオン座、Iビルディング	7
柳澤 隆／名古屋プリンスホテル スカイトワー、 某迎賓館、朝霧カントリークラブ クラブハウス	7
山口佳孝／大阪国際空港ターミナルビル再整備、 ボルボ・カー神戸	7
吉田悠佑／神宮会館講堂棟一神宮にふさわしい 「和」をデザインモチーフとした講堂棟一、大阪ソー ダ総合研究開発センター一中庭を核とした立体的な 交流の仕掛け一、GSユアサ草津事業所一最先端の 電池の開発・製造を担う新拠点一	7
吉本一規／大塚倉庫西日本ロジスティクスセンター、 遠藤照明テクニカルセンター	7
余田尚紀／株式会社ダイセル iCube、イワタニ水 素ステーション 関西国際空港、大阪第6地方合 同庁舎	7
渡邊有祐／明石駅前南地区第一種市街地再開発 事業(施設棟)、上京区総合庁舎、エクセディ伊賀 上野事業所	7

号	
■構造部門	
河井翔太郎／引抜きを抑制した塔状比5.5の超高層免震集合住宅の設計	7
佐々木淳一／ダイナミックに浮遊する開放的な執務スペースを実現する架構の設計～日亜化学工業諏訪技術センター～	7
正野和司／キューブユニット面で構成する構造久光製薬ミュージアム	7
中嶋 拓／木造屋根を浮遊させた混合構造免震オフィスの構造設計と極大地震対応	7
堀本明伸／ガラスダブルスキンを支えるホールトラスの構造デザイン 国立京都国際会館ニューホールの構造設計	7
三谷 淳／傾斜した支持地盤に建つ大型免震物流倉庫	7
■設備部門	
今吉 健／GLP吹田プロジェクトの設備計画～BIM活用によるステークホルダーとの効率的な合意形成の取り組み～	7
古我卓真／BIMを活用した施工管理への取り組み	7
迫田裕之／ヤンマー本社ビルー思いの実現と挑戦ー、岩国錦帯橋空港ー建築・設備の融合ー	7
永吉敦行／近畿産業信用組合本店～都市型高層ZEB Readyの実現～、A美術館における設備計画～文化財を守る空調システム～	7
宮崎亜由美／大阪ガス北部事業所低炭素化改修工事ー入居者の特性を考慮した設備システムー、広島県庁舎耐震補強工事・維持保全工事ーLCD改修プロジェクトにおける取り組みー	7
吉田 淳／ダイキンアレス青谷Ⅱ期における設備計画	7
吉田裕紀／京都四條南座における設備改修計画	7
■施工部門	
赤尾悟史／建築生産における環境負荷低減と生産性向上への挑戦	7
荒木秀樹／働き方改革に向けた取り組み～小さな事からコツコツと～	7
熊田健太／本設躯体を利用する大深度の根切り山留め工事の施工計画についてーアイランド工法に伴う鉄骨躯体の検証ー	7
櫻井勇輔／廃棄物焼却施設解体に伴うダイオキシン除染工事の計画について	7
橋本真彰／伝統と革新を結び付ける～地下工事と外装工事～	7
建築の仮設性と恒久性	
総論 建築における仮設性と恒久性	
／五十嵐太郎	8
各論 1 祝祭建築の仮設性と恒常性	
／土居義岳	8
各論 2 大礼建造物の下賜過程にみる意味の継承	
／原戸喜代里	8
各論 3 宗教にかかわる建築の仮設性と恒久性	
ー伊勢神宮の創立経緯と祭儀を例にー	
／林 一馬	8
各論 4 仮設的建築に見出せる恒久性	
～茶室に関して～／桐浴邦夫	8
各論 5 「少なさ」の果て～「海の家」から仮設建築の可能性を考える～／岩元真明	8
各論 6 人口減少期における都市の恒久性と仮設性／饗庭 伸	8
編集後記／松岡英緯・桑原悠樹・下坂浩和・中辻浩介・東 拓郎・樋口展寛・三谷帯介・米山剛史・渡部 剛	8
「災害。逃げる」	
総論 「にげることは生きること」～災害文明と災害文化の融合をめざす～／河田恵昭	9

号	
各論 1 5段階の警戒レベルを用いた防災情報の発信～避難勧告等に関するガイドラインの改定～	
／菅 良一	9
各論 2 人はなぜ逃げ遅れるのか～災害の心理～	
／木村玲欧	9
各論 3 JR西日本における計画運休に関する取り組み／中條 昭	9
各論 4 防災直後混乱の中で	
～熊本地震とLINE～／伊藤暢章	9
各論 5 夜間の避難誘導と風景維持のための灯りづくり／小林茂雄	9
各論 6 在宅避難のすすめ 都心港区の防災対策／瀬口智美	9
各論 7 「逃げる」の後の「避難所生活」を考える～欧米との比較も含めて～／榛沢和彦	9
各論 8 事前復興と事前復興まちづくり	
／市古太郎	9
編集後記／岡田耕介・垣内 明・河野 学・高田大輔・福岡誉顕	9
新素材の可能性	
ー材料の高機能化とハイテク素材ー	
総論 新素材で建設産業を立て直す～新材料(CFRTP)の挑戦を通して～／持田泰秀	10
各論 1 鉄筋を使わないCO2で固める素材	
～水を使わない、新しいコンクリートの開発～	
／今川憲英	10
各論 2 有機ー無機ハイブリッドエアロゲルが実現する高性能断熱システム	
／中西和樹 金森主祥 山地正洋	10
各論 3 自己治癒セラミックス～キズを自ら治す～	
／長田俊郎	10
各論 4 ビルの更なる省エネ化に向けて～アモルファス合金変圧器導入の勧め～／中島 晋	10
各論 5 銅からアルミへ～電線の材料変革～	
／隅 直人 瓜生陵太 首藤志介	10
各論 6 安全な空間作りへ～超軽量天井材～	
／稲葉信子	10
各論 7 セメント系材料を用いた3Dプリンタの開発	
／坂上 肇	10
編集後記／吉居 哲・門野 陽・桜井和男・高橋秀一・藤丸啓一・山口紀宏・河合智寛・吉田正友	10
最先端技術と社会	
総論 ゆっくり進化する建築が、技術と社会をつなぐプラットフォームに／金田充弘	11
各論	
〔建築系〕	
1 近未来の建築には生命が宿る	
～EQ Houseでの取り組み～／花岡郁哉	11
2 SYNCVR プロフェッショナル・サービスの取り組み／福島孝志	11
3 品質工学とスパコンによる木造建築耐震設計の取り組み／角 有司	11
〔非建築系〕	
4 水産業とAI～技術の継承～／和田雅昭	11
5 「人工脳SOINN」の可能性／長谷川修	11
6 金属3Dプリンター用合金の造形パラメーター開発～金属3Dプリンターの普及を目指した金属材料ラインアップの充実に向けた取り組み～	
／佐々木信也	11
7 木材研究は樹の力の借り方	
～セルロースナノファイバー～／矢野浩之	11
編集後記／宇野綾真・岡田 健・岸本光平・古島正博・正野和司・瀧野敦夫・竹本孝輔・萩原 学・宮久保秀樹	11

号	
オープンマインドな空間	
各論 1 センセイオフィス	
～働き方改革を職員室から～／ヴィトラ	12
各論 2 『DIYのいえ』 泉北ニュータウンでの試み～DIYで団地コミュニティ活性化～／豊嶋洋子	12
各論 3 開かれた寮 立命館大学分林記念館	
／永井 務 地田 聡	12
各論 4 商店街HOTEL講 大津百町	
～大津の空き町家再生～／玉井 淳	12
各論 5 駅という概念のパラダイムシフト	
／二反田陽介	12
各論 6 人に関して仕事を生む空間	
～障害のある人とともに～／森下静香	12
各論 7 開かれた雲の上の図書館	
／見目佳寿子	12
編集後記／赤川貴世友・東奈生子・今井充彦・岩田圭司・川合隆之・河西孝平・黒柳 亮・塚口洋之・ペリー史子	12
法令コーナー	
西脇小学校の木造校舎の保存・活用～兵庫県「景観の形成等に関する条例」の適用事例～	
／植平浩司	1
全国初!「こうべ茅葺トリセツー茅葺民家あんしん活用ガイドライン」の作成	
／神戸市住宅都市局建築指導部建築安全課	2
実務経験要件を資格登録要件に見直し 建築士法の一部を改正する法律(平成30年改正)の概要	
／佐々木雅也	3
工夫を凝らした夜間景観の魅力をアップ 金沢市の夜間景観形成の取組／中谷裕一郎	4
BIMを活用した建築確認における課題検討委員会の取り組み／武藤正樹	5
適用除外制度を活用した京町家の保存活用	
ー京町家の意匠に合う木製防火雨戸の研究開発ー	
／林欽太郎	6
全国に先駆けて歴史的建造物委員会を設立	
／中村陽二	7
防火規制を見直し～大阪市建築基準法施行条例の一部改正～／赤尾美絵	8
神戸の都心の土地利用誘導策ー特別用途地区による大規模住宅等の建築制限ー／福岡誉顕	9
建築物のエネルギー消費性能の向上に関する法律の一部を改正／高梨 潤	10
建設業の働き方改革ー建設業法及び公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律の一部を改正する法律の改正ー	
／国土交通省土地・建設産業局建設業課	11
許可建築物の適正な維持管理の推進等～大阪市総合設計制度の一部改正～／藤村雅典	12
構造の頁	
COOL TREEの構造	
／加登美喜子・佐々木隆允	1
膜型圧電セラミックスを用いたスマートな制振鉄骨階段SPADA®-stairs／熊野豪人	3
古墳をモチーフにした駅前広場	
ー天理駅前広場コフフンー／橋本宗明	5
デザインエレメントとしての構造体 猪名川霊園礼拝堂・休憩棟／市川幸弘	7
「構造体を見せる」をテーマとした構造計画	
ー瑞浪北中学校ー／正田崇貴	9
RM造を美しく見せる構造デザイン	
～アサヒファシリティズ蛭池寮 楓～／河合智樹	11
設備の頁	
健康視点での建物評価「WELL認証」の概要	
／今井康博	2
電線・ケーブルの最適導体サイズ(ECSO)	

号	
／浜田光真	4
BIM遮音設計ツールの開発について	
／木村文紀	6
病院インフラ～高まる情報ネットワーク設計の重要性～／鳥飼幸太	8
施工図の床面自動描画による生産性向上	
／酒本晋太郎	10
「エネバンク®」—高性能多用途潜熱蓄熱カプセル	
／矢野直達	12

新製品レビュー・記事広告

下階からの騒音対策床衝撃音低減材 サイレントドロップ／フクビ化学工業㈱	5
更なる機能付加で攻めるガラス建材	
／日本板硝子グループ 4 社合同企画	7

建築と社会を考える

東日本大震災の被災地から 大船渡市末崎町「居場所ハウス」の試み／田中康裕	4
参加型景観への展望 社会における景観をめぐる動き／三輪康一	5
旧奈良監獄と旧奈良少年刑務所 学校的な場所としての旧奈良少年刑務所	
／原 泉・神吉紀世子・太田裕通	6
近隣住区の維持に寄与する障害者福祉「施設」障害者の「働く」に着目して／松原茂樹	7
地域ニーズに応える自立した「みんなの場所」—イタリア・トリノの「地区の家」—／小松 尚	8
障害者福祉施策の転換は、支援体制と障害者の生活をどう変えてきたか／石垣 文	9
高齢者の居住移動と日本版CCRC／安藤孝敏	10
インドア郊外～効率の最大化で変質する居住環境～／岩佐明彦	11
存在の質から環境を捉え直す	
～地蔵盆まちづくり試論～／前田 昌弘	12

再読 関西の建築

京都信用金庫の各支店／玉田浩之	1
神戸商工貿易センタービル／橋寺知子	2
池坊／石田潤一郎	3
太陽の塔《生命の樹》／加治大輔	4
大阪府中河内府民センタービル／福原和則	5
兵庫県立図書館・明石市立図書館／竹山清明	6
【特別インタビュー】神戸での西洋館保存とその頃—坂本勝比古先生に聴く（前編）／玉田浩之	7
【特別インタビュー】神戸での西洋館保存とその頃—坂本勝比古先生に聴く（後編）／玉田浩之	8
氷室アパートメント／安田徹也	9
心斎橋筋商店街アーケード／三宅拓也	10
大阪市庁舎（第Ⅰ期 第Ⅱ期）／山形政昭	11
近代建築調査委員会報告／橋寺知子	12

追悼文

追悼 中村昌生先生を偲んで／山形政昭	2
--------------------	---

寄稿文

1995年のこころ「西の丸迎賓館」から「中央公会堂」へー／太田隆信	12
-----------------------------------	----

Member's Forum

イケフェス2018スペシャルツアー	
「船場・堺筋を歩く」大満足!! リポート	1
〈第3回建築セミナー〉直感で理解する! 構造力学の基本	1
U-35委員会企画「設計者のしごと」—組織で働くU-35世代と建築— 活動報告	6
〈第4回建築セミナー〉建築と設備の接点	
トラブル予防のツボ	7
U-35委員会企画 talk baton15 活動報告	9
U-35委員会企画 6th action「建築とOSAKA」	

号	
活動報告	10
〈第5回建築セミナー〉図解 間取りの処方箋	
暮らしから考える住宅設計・改修のポイント	11
U-35委員会企画 talk baton 14 活動報告	12
イケフェス2019スペシャルツアー日本建築協会 Presents!「天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く」リポート	12

レポート

会員の集い IN TOKYO	
トークセッションと懇親の夕べ	6

information

1月～12月掲載	
----------	--

月間の動き・編集委員会委員

2018年11月～2019年10月	
-------------------	--

入賞発表

●第64回工高生デザインコンクール	
設計課題／みんなの「こども食堂」	
最優秀賞／山崎創羽、市蘭祐也	
優秀賞／植田理子、日紫喜華乃	
入選／赤堀さくら、田中琴美、文淵勝哉、細川虹太、細川悠人、前川悠希、松本明莉	1

会告

平成30年度建築工事实務講習会（本部、東海支部）、平成30年度建築工事实務講習会（中国支部）、京都支部主催 勉強会「京都のまちな色について—景観を色で考える—、若き創造者たちへ」第66回青年技術者顕彰」のご案内	1
若き創造者たちへ「第66回青年技術者顕彰」のご案内、平成30年度建築工事实務講習会（中国支部）、京都支部主催 「都市の緑の育成管理」勉強会、＜会員の集い IN TOKYO＞トークセッションと懇親の夕べ、U-35委員会企画 6th action「建築とOSAKA」第2回フューチャーセッション〈予告〉、論考コンクール公開プレゼンテーションのお知らせ	2
＜会員の集い IN TOKYO＞トークセッションと懇親の夕べ、U-35委員会企画 6th action「建築とOSAKA」第2回フューチャーセッション〈予告〉、第4回建築セミナー 建築と設備の接点 トラブル予防のツボ、論考コンクール1次審査通過論考決定、京都支部主催「都市の緑の育成管理」勉強会、若き創造者たちへ「第66回青年技術者顕彰」のご案内	3
2019年度 第65回工高生デザインコンクール作品募集、第4回建築セミナー 建築と設備の接点 トラブル予防のツボ	4
2019年度定時総会、篠原祥氏講演会と会員交流懇親会のご案内、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）結果発表、第2回学生のための現場見学会「ザ・パークハウス神戸タワー（旧ファミリアホール）」現場見学会、2019年度 第65回工高生デザインコンクール作品募集、第4回建築セミナー 建築と設備の接点 トラブル予防のツボ、ARCH-4KANSAI まちづくり提言シンポジウム、予告 追手門学院大学茨木総持寺キャンパス見学会	5
令和元年度定時総会、篠原祥氏講演会と会員交流懇親会のご案内、第2回学生のための現場見学会「ザ・パークハウス神戸タワー（旧ファミリアホール）」現場見学会、追手門学院大学茨木総持寺キャンパス見学会、日本建築協会中国支部 主催 若手・新入社員技術講習会、予告 第39回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）、2019年度 第65回工高生デザインコンクール作品募集、第3回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項	6

号	
第5回建築セミナー 図解 間取りの処方箋、定時総会議決のお知らせ、通常理事会議決のお知らせ、臨時理事会議決のお知らせ、定時評議員会議決のお知らせ、平成30年度事業報告、平成30年度決算報告、令和元年度事業計画、令和元年度収支予算書、令和元年度日本建築協会役員会務分掌、令和元年度日本建築協会評議員名簿、令和元年度日本建築協会支部長、令和元年度日本建築協会委員、2019年度 第65回工高生デザインコンクール作品募集、第3回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、第26回 会員作品特集号「私の空間作法」作品募集、第39回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）募集要項、主催：日本建築協会京都支部 令和元年セミナー第1回「河川工学からみた日本の洪水災害と課題」	7
第26回 会員作品特集号「私の空間作法」作品募集、第3回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、2019年度 第65回工高生デザインコンクール作品募集、第5回建築セミナー 図解 間取りの処方箋、「民間（旧四会）連合協定 工事請負契約約款契約関係書式」等の価格改定について	8
中国支部主催 中堅社員技術講習会のお知らせ、第5回建築セミナー 図解 間取りの処方箋、東海支部主催 金沢に泊まる 北陸三県 建築の旅、2019年度 第65回工高生デザインコンクール作品募集、第3回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、「民間（旧四会）連合協定 工事請負契約約款契約関係書式」等の価格改定について、第26回 会員作品特集号「私の空間作法」作品募集	9
生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2019連携事業スペシャルツアー日本建築協会Presents!天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く、生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2019公式ガイドブック販売のお知らせ、展示企画&トーク企画のご案内◆展示企画U-35活動紹介（action、talk baton）◆トーク企画「設計者のしごと」—組織で働くU-35世代と建築—、第3回学生のための現場見学会「堺東駅南地区第一種市街地再開発事業 施設建築物新築工事」、＜予告＞第4回学生のための現場見学会「平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事」、「建築と社会」表紙写真募集のお知らせ、第3回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、東海支部主催 金沢に泊まる 北陸三県 建築の旅、京都支部主催 令和元年セミナー第2回「まちづくりと都市計画」—京都市の都市計画行政を省みて—、「民間（旧四会）連合協定 工事請負契約約款契約関係書式」等の価格改定について、第26回会員作品特集号「私の空間作法」作品募集	10
JR講演会第2弾! JR西日本建築グループの駅づくり、第65回工高生デザインコンクール入選者発表—設計課題「2025年のお祭り広場」—、2019年建築関係団体合同忘年懇親会、2020年在阪建築15団体合同新年交礼会、2019年度建築工事实務講習会（本部、東海支部）、第3回学生のための現場見学会「堺東駅南地区第一種市街地再開発事業 施設建築物新築工事」、第4回学生のための現場見学会「平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事」、京都支部主催 令和元年セミナー第2回「まちづくりと都市計画」—京都市の都市計画行政を省みて—	11
2019年度建築工事实務講習会（本部、東海支部）、京都支部共催 黄檗宗大本山萬福寺修理現場見学研修会、＜予告＞京都スタジアム見学会、JR講演会第2弾! JR西日本建築グループの駅づくり、＜予告＞ 2040委員会【2040 FUTURE VIEW vol.1】 発刊のお知らせ、2019年度建築工事实務講習会（中国支部）	12

1

特別展 生誕90年 田中一光 未来を照らすデザイン

田中一光は奈良市内に生まれ、幼い頃から興福寺や春日大社といった奈良の歴史と文化に親しんで育った。その後京都で学生時代を過ごし、大阪、東京と活動の場を移していった。その経歴は日本のグラフィックデザインの黎明と発展に重なるような道のりでもあった。

田中一光はグラフィックデザイナーとして、ポスター、エディトリアルといったグラフィックデザインを初め、デザインのディレクションやプロ

デューサーとして、日本のグラフィックデザインを紹介する場においても高い手腕を発揮した。その膨大な業績の中でも、グラフィックアートを中心とした作家としての創作活動の一部は奈良県立美術館にも収められている。また自身の創作活動のみならず、仕事、プライベートを問わず幅広い交流を持った田中一光は、デザイン分野の枠を超えた現代ならではの日本の文化の発信、そして未来へ向けた創造の展開を目指していた一面もあった。

この展覧会では、幅広い田中一光の作品を通じて、その創作活動の魅力を伝えると同時に、作品を通して、田中一光が目指したデザインによる日本文化の発信を目指す姿勢、デザインの発信する力、創造のエネルギーを感じていただく機会とするものである。



田中一光『JAPAN』1986年
奈良県立美術館蔵
©Ikko Tanaka 1986/
Licensed by DNPpartcom

期 間 2020年1月25日(土)～3月15日(日)

9:00～17:00

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 1/27、2/3・10・17・25

会 場 奈良県立美術館
奈良市登大路町10-6
TEL.0742-23-3968

観 覧 料 一般800円、高大生600円、小中生400円

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

2

坂田一男 捲土重来 格納された世界のすべて、風景のすべて

キュビズム以降の抽象絵画の展開を核心で理解し、その可能性を究極まで推しすすめた画家、坂田一男(1889-1956)。世界的にも稀有な高い次元に到達していた坂田一男の仕事の全貌を展示し、その絵画に織り込まれた世界の可能性をひもとく。

坂田一男は第一次世界大戦後の1921年に渡仏、同時代の抽象絵画と出会い、10年以上にわたってフランスで最前衛の画

家として活躍した。1933年の帰国後、故郷の岡山で制作に励み、また前衛グループ「アヴァンギャルド岡山」を結成し後進の育成にも努める。

しかし、坂田の仕事は生前・歿後を通じて岡山以外で大きく紹介されることはほとんどなく、忘却されていたといって過言ではない。本展は、近代美術史を精緻に解析し、その可能性の再発掘と刷新に挑む造形作家の岡崎乾二郎氏を監修者に招き、〈現在の画家としての〉坂田一男の全貌を提示するはじめての展覧会となる。特に日本帰国後から戦後にかけての坂田の仕事の展開を国内外の作家たちと比較しつつ、20世紀絵画表現の問題群として読み解くセクションは絵画の潜勢力を解き放つ機会となるだろう。



《キュビズム的人物像》1925年
岡山県立美術館

期 間 2019年12月7日(土)～2020年1月26日(日)

10:00～18:00(金曜日は20:00まで)

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日(ただし1/13・20は開館)、
12/29～1/1、1/14

会 場 東京ステーションギャラリー
東京都千代田区丸の内1-9-1
TEL.03-3212-2485

観 覧 料 一般1,000円、高大生800円、

*中学生以下無料

*障がい者手帳等をお持ちの方は100円引き、
その介助者1名は無料

3

コレクション展Ⅲ
特集 もうひとつの日常

兵庫県立美術館では、前身の県立近代美術館が開館した昭和45（1970）年以来、作品の充実に努めてきた。それらを積極的に紹介し変化ある常設展示室の演出を心がけるために、同館では1年を3期に分けて、それぞれ展示のテーマを設けることによって、横断的にコレクションを紹介している。



清水 登之《テニス・プレーヤー》
1918年 油彩・布

平成から令和へと時代をまたがった本年度第3期目となる今期の常設展示室では、「もうひとつの日常」と称して、複数に分かれた同館の展示室ごとにそれぞれテーマを設け、それらが相互に関連しつつ全体を循環する内容として企画している。

ふだんわたしたちがなにげないものとして認識している「日常」は、しかし戦争や災害などによって失われたとき、それ自体がかけがえのない存在として思い起こされる。美術家はそうした日常やあるいは非日常のそれぞれで表現活動を行い、美術館は機会があるごとにそれらを展示し紹介し、さらにはコレクションしてきた。それらが繰り返されることが、美術館のめざすべき姿といえるだろう。同展示がそうした美術館のめざすべき姿へのひとつのささやかなきっかけとなれば幸いである。

期 間 2020年3月1日（日）まで
10：00～18：00
（特別展開催中の金・土曜日は20：00まで）
※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし1/13、2/24は開館）、1/14、2/25
年末年始およびメンテナンス休館（12/31～1/10）

会 場 兵庫県立美術館 常設展示室
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL.078-262-0901

観 覧 料 一般500円、大学生400円、
70歳以上250円、障がい者100円
*高校生以下無料
*70歳以上、障がい者の方は要証明
*障がいのある方1名につき、その介助者1名は無料
*毎月第2日曜日は公益財団法人伊藤文化財団の協力により無料

4

竹工芸名品展：ニューヨークのアビー・
コレクション—メトロポリタン美術館所蔵

日本の竹工芸は、線で構成された軽やかな造形が魅力であり、現代アートとして捉えなおされて国際的に高く評価されている。なかでも、ダイアン・アーサー・アビー夫妻が収集した竹工芸は世界屈指のコレクションとして知られ、2017年から翌年にかけてメトロポリタン美術館において開催された“Japanese Bamboo Art：The Abbey Collection”



初代早川尚古斎 山高帽
1880-1890年代頃 高さ13.7cm
The Abbey Collection,
“Promised Gift of Diane and
Arthur Abbey to The Metropolitan
Museum of Art.”
Image © The Metropolitan
Museum of Art.

（「日本の竹工芸：アビー・コレクション」展）で紹介された。その展覧会を再構成した本展では、アビー・コレクションから近現代の竹工芸品75件を、当館の陶芸コレクションとともに展示する。

さらに、大阪の誇る現代作家、四代田辺竹雲斎氏（1973—）によって、美術館の吹き抜けの空間を活かした巨大な竹のインスタレーションが、大阪会場のため新たに制作される。古くから竹工芸の産地として知られる大阪の地において、竹による軽やかな造形表現の魅力、そして工芸という領域の広がり可能性を楽しむことができるだろう。

期 間 2019年12月21日（土）～2020年4月12日（日）
9：30～17：00（12/21・22は19：00まで）
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし1/13、2/24は開館）、
12/28～1/4、1/14、2/25

会 場 大阪市立東洋陶磁美術館
大阪市北区中之島1-1-26
（大阪市中央公会堂東側）
TEL.06-6223-0055

観 覧 料 一般1,200円、高大生700円
*中学生以下無料
*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料
*大阪市在住の65歳以上の方は無料
（以上すべて要証明）

本欄掲載の1～4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（84円）を日本建築協会事務局までお送りください。

常任理事会

第5回常任理事会

10月23日(水) 16:00~17:50

日本建築協会会議室

出席者 設楽会長ほか9名

- 議 事 (1) 2019年度上半期事業執行状況
 (2) 2019年度上半期収支予算執行状況
 (3) 6月総会講演会の講師
 (4) 第65回工高生デザインコンクール審査結果
 (5) 建築関係団体合同忘年懇親会及び在阪建築15団体午餐会
 (6) 「KENTEN2020」実行委員の派遣と講演依頼
 (7) 大阪都市景観建築賞「大阪まちなみ賞」の経過報告
 (8) 2040委員会の活動冊子
 (9) イケフェス大阪がオープンハウスイベントに認定
 (10) 大阪企業家ミュージアム

編集委員会

第7回広告企画・編集合同委員会

10月15日(火) 18:00~18:45

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか3名

- 議 事 (1) 11月号特集 最先端技術と社会
 (2) 12月号特集 オープンマインドな空間(仮)
 (3) 1月号特集 Osaka Bay エリアの再生(仮)
 (4) 2月号特集 第26回私の空間作法
 (5) 3月号特集 東海支部特集

第5回構造分科会

10月3日(木) 18:30~19:45

日本建築協会会議室

出席者 宇野幹事ほか5名

- 議 事 (1) 構造の頁の企画
 (2) 2019年度特集原稿の検討

第6回設備分科会

10月2日(水) 18:00~19:20

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか2名

- 議 事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 2020年特集

第4回施工材料分科会

10月9日(水) 17:05~17:45

日本建築協会会議室

出席者 吉居幹事ほか5名

- 議 事 (1) 2019年特集の振り返り
 (2) 次期幹事選出
 (3) 2020年特集

第5回作品作風小委員会

10月24日(木) 19:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 池上委員ほか3名

- 議 事 (1) 作品の選定
 (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定

出版委員会

第6回出版委員会

10月29日(火) 18:00~19:00

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか3名

- 議 事 (1) 既刊書籍経過報告
 (2) 制作進行中の書籍
 (3) 今後の出版テーマ
 (4) 建築セミナー

教育委員会

第1回工高生教育小委員会

10月4日(金) 18:00~19:30

日本建築協会会議室

出席者 谷口小委員会委員長ほか4名

- 議 事 (1) 第65回工高生デザインコンクール応募作品の予備審査
 (2) 審査会、表彰式の役割分担

第4回史料研究会

10月1日(火) 18:00~19:15

日本建築協会会議室

出席者 橋寺委員長ほか4名

- 議 事 (1) 新委員紹介
 (2) 協会誌での連載
 (3) 街歩きイベント

第7回大阪府住まい・まちづくり普及協議会

10月18日(金) 10:30~12:00

大阪建築会館会議室

報告・議題

- (1) 出前講座
 (2) 補助金
 (3) 2020年日本建築学会教育賞(教育貢献)への応募

未来創生プロジェクト

第10回2040委員会

10月4日(金) 19:30~

PARK Lab.

出席者 駒井リーダーほか4名

- 議 事 (1) 企画内容
 (2) 今後の委員会活動

第11回2040委員会

10月15日(火) 19:30~

大林組会議室

出席者 駒井リーダーほか4名

- 議 事 (1) 企画内容
 (2) 今後の委員会活動

第7回U-35委員会

10月4日(金) 19:30~

昭和設計会議室

出席者 高畑リーダーほか10名

- 議 事 (1) 活動/予定
 (2) 次回予定/その他

U-35委員会(分科会)

10月16日(水) 19:30~

日建設計

出席者 高畑リーダーほか7名

議 事 (1) AAF発表

U-35委員会

「設計者のしごと」一組織で働くU-35世代と建築一

10月27日(日) 13:00~17:00

委 員 高畑リーダーほか12名

ゲスト 川勝真一氏

参加者 50名

活動紹介パネル展示/トークイベント

審査会

第65回工高生デザインコンクール審査会

10月19日(土) 13:30~17:15

出席者 審査員 矢田朝士審査員長ほか8名

工高生教育小委員会委員

谷口小委員会委員長ほか4名

設計課題「2025年のお祭り広場」

審査結果/応募学校数12校

応募点数97点

最優秀賞1点、優秀賞2点、入選7点

連携事業

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪

2019スペシャルツアー 日本建築協会Presents!

天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く

10月27日(日) 13:30~16:20

阪口委員ほか6名

参加者 28名

案内人 山形政昭大阪芸術大学建築学科教授

橋寺知子関西大学環境都市工学部准教授

編集委員会(2019年度)

■副会長

米井 寛

■編集担当理事

○勝山 太郎

佐藤 榮一

竹中 統一

西 博康

松崎 公一

船越 淳久

吉村 英祐

■副委員長

○戸川 勝之

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

松田奈緒子

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

桑原 悠樹

下坂 浩和

東 拓郎

樋口 展寛

△松岡 英緯

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅系

赤川貴世友

東 奈生子

今井 充彦

岩田 圭司

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

塚口 洋之

ペリー史子

■構造分科会

△宇野 綾真

岡田 健

岸本 光平

古島 正博

正野 和司

瀧野 敦夫

竹本 孝輔

萩原 学

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎

木谷 晃之

北野 勝也

佐々木章二

寺井 千佳

夏井 重行

△橋本 直樹

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山本 雅洋

■施工材料分科会

門野 陽

桜井 和男

高橋 秀一

△藤丸 啓一

山口 紀宏

河合 智寛

吉田 正友

吉居 哲

■法令分科会

岡田 耕介

垣内 明

河野 学

高田 大輔

△福岡 誉顕

■作品作風小委員会

▲東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

太田 栄治

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉渕奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

鞆野 淳司

西田 佳代

芳谷 晴彦

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2019年11月27日

発行 2019年12月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1254円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

出版図書一覧

当協会会員の方で、当会でのご購入を希望される方には、特価：本体価格の1割引＋税にて販売しております。
詳しくは（一社）日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984、E-mail soumu@aaj.or.jp）まで。

最新刊 平成31年4月発行

図解 間取りの処方箋 暮らしから考える住宅設計・改修のポイント

玄関・トイレ・LDK・寝室など住まいの8つの空間について、人が暮らしていく上で不都合が生じる「お困り間取り」と改善ポイントを分かりやすいイラストで解説。

著者 堀野和人・小山幸子
A5判 184ページ
定価 本体2,600円＋税

近刊 平成30年10月発行

図解 建築と設備の接点 トラブル予防のツボ

騒音・振動・漏水・結露…など問題につながりやすい建築と設備の接点（取り合い）を部位別に一覧し、トラブル予防法を設備別にイラストで詳細に図解。

著者 仲本尚志・馬渡勝昭・赤澤正治
A5判 232ページ
定価 本体2,800円＋税

近刊 平成30年3月発行

直感で理解する！構造力学の基本

手描きイラストをもとに構造力学の基本をやさしく解説。力学とその先にある構造設計の魅力が見えてくる一冊。

著者 山浦晋弘
A5判 216ページ
定価 本体2,400円＋税

近刊 平成30年1月発行

原因調査と対策のポイント 図解 雨漏り事件簿

雨漏りの原因調査と対策にプロ集団「雨漏り110番」が、多数の生の事例をもとに実務に役立つポイントを解説。

著者 玉水新吾・唐鎌謙二
A5判 216ページ
定価 本体2,500円＋税

図解 住まいの寸法

堀野和人・黒田吏香 著
A5判 200ページ 定価 本体2,600円＋税

図解 一発で通す！確認申請

野口元・平沢隆志・仲本尚志 著
B5判 192ページ 定価 本体3,200円＋税

直感で理解する！構造設計の基本

山浦晋弘 著
A5判 216ページ 定価 本体2,400円＋税

設計・監理・施工者のための 建築品質トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭 著
A5判 248ページ 定価 本体2,800円＋税

改訂版 イラストでわかる 消防設備の技術

中井多喜雄 著 石田芳子 イラスト
赤澤正治・岩田雅之・西博康 改訂監修
B5判 216ページ 定価 本体3,000円＋税

写真マンガでわかる 住宅メンテナンスのツボ

玉水新吾・都甲栄充 著
A5判 248ページ 定価 本体2,800円＋税

主婦建築家と考える 住まいづくりのウソ？ホント？

井上まるみ 著
四六判 184ページ 定価 本体1,800円＋税

プロが教える 住宅の植栽

藤山宏 著
B5判 176ページ 定価 2,800円＋税

〈プロのノウハウ〉シリーズ

建築現場のコンクリート技術

柿崎正義・玉水新吾 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

写真マンガでわかる 工務店のクレーム対応術

玉水新吾・青山秀雄 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

現場直伝！躯体工事の100ポイント

中川徹 著
四六判 220ページ 定価 本体2,200円＋税

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税

建築主が納得する住まいづくり Q&Aでわかる技術的ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税

チラシ封入サービスのご案内

会員限定

貴社の広告チラシを「建築と社会」発送と“同封”しませんか。
チラシをご提供下さい。

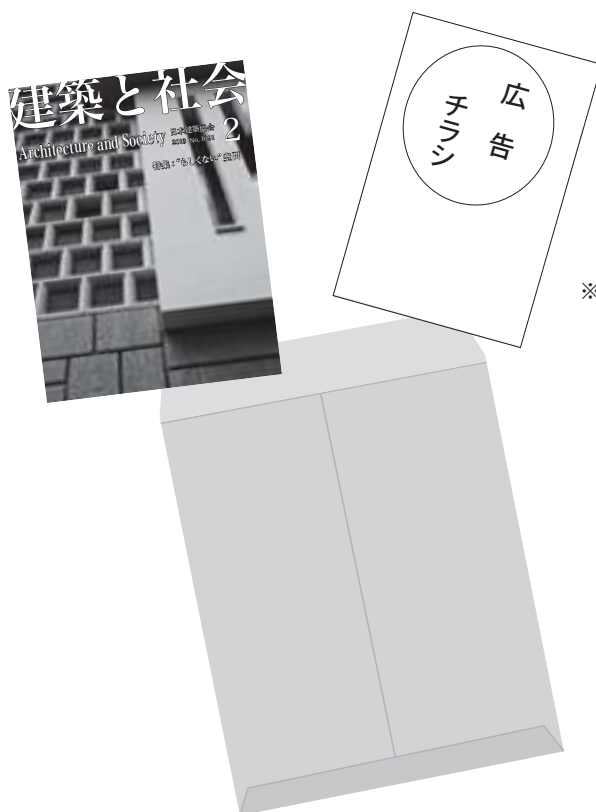
料金 1回につき **20,000円** (税別)

当協会でチラシをプリント（カラー片面）した場合20円/枚必要です。

申し込み方法：申込用紙にご記入いただきFAXまたはE-mailでお送り下さい。

お問合せは（一社）日本建築協会（担当/内山）まで

TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984 E-mail:jigyoka@aj.or.jp



※チラシサイズ：A4版
パンフレット：20頁程度迄

申込用紙 きりとり

会社名		
ご連絡先 (住所・担当者名・部署名)	住所 担当者名	部署名
ご連絡先 電話番号・E-mail	電話番号 E-mail :	

お客様の抱える問題やニーズに より速やかに、より丁寧に対応できるために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://naci.jp> E-mail: nc@naci.co.jp

本部署本部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)8843-1235(代) FAX (06)8853-1832

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目4-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

日本建築協会

会 告

日本建築協会中国支部主催 建築工事实務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供
制度プログラムです。
建築関連CPD (6単位)

■講習会会場

- (広島工業大学 広島校舎)
- ・広電市内電車 袋町または中電前
下車
- ・広島バス 平和記念公園前下車



日 時 2020年 2月18日(火)
9:30~17:00

会 場 広島工業大学 広島校舎
広島市中区中島町5-7

定 員 60名

受講料 16,000円(含テキスト代 税込)

※テキストは、当日配布させていただきます。

■申込方法

FAXまたは中国支部へ直接

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名(フリガナ)
- ④事業所名
- ⑤担当責任者
- ⑥電話番号・FAX番号
- ⑦受講料支払方法(銀行振込等)
- ⑧CPDを申請される方は、申請先の
団体名をお知らせ下さい。

受講料は前払制となっていますので、
併せて銀行振込等で納入して下さい。
受講料入金確認後、受講票をお送り
いたします。

■申込先

(一社)日本建築協会 中国支部
〒730-0805 広島市中区十日市1-1-9
(相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内)
TEL 082-232-6471

FAX 082-291-2233

E-mail: info@aaj-chugoku.jp

URL: <http://www.aaj.or.jp>

<振込先>

- 広島銀行
本川支店(普通 3424438)
シャ)ニホンケンチクキョウカイチユウゴクシブ
一般社団法人日本建築協会中国支部

■趣旨と内容

●本講習会は、官公庁・設計事務所・
建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い
分野の技術者を対象としたものです。

●とくに取り付きにくい施工計画と仮
設見積、現場実務の基礎である積算業
務に重点をおき、講義します。

●都市環境の変化に伴う法令・基準の
改正なども加え、技術の進歩に即応し
た知識の習得をはかります。

●「積算業務」では具体例により、そ
の着工準備から完成に至るまでをわか
りやすく解説します。

施工計画

井上 昇 氏

清水建設(株)広島支店
グループ長

適切な施工計画を立案できることが、
建築現場技術者の必須条件です。
安全で、経済的な施工計画を解説し
ます。

仮設見積

尾野本 悟 氏

広島工業大学
教授

仮設工事費は、一般には非常に把握し
にくい面があって、つつい単位面積
当たり、あるいは請負金比率のみで
処理されがちです。
施工計画に基づいた合理的で迅速な見
積方法を解説します。

積算業務

八道 憲一 氏

鹿島建設(株)中国支店
次長

見積業務の中で基本となるのは、数量
積算です。この手順、基準を基本に、
より合理的で正確な積算業務を解説し
ます。

日本建築協会創立100周年記念誌 頒布のお知らせ

日本建築協会は、2017年3月30日に創立100周年を迎えました。その記念すべき年にあたり、100周年記念事業の一環として、3冊の記念誌を発刊いたしました。

それぞれの誌面では協会100年の歴史を振り返るのみならず、本会が社会の中で果たしてきた役割を見つめ直すとともに、かつて会誌に掲載された貴重な記録を再発見するほか、現在の建築に携わる人々の想いなど、様々な視点から「建築と社会」を取り上げております。

つきましてはこの度、記念誌を頒布することとなりましたので、ぜひお手元に備えていただきたく存じます。

<お申し込み方法>

ご注文の書籍名（もしくは3冊セット）、お名前、ふりがな、ご住所（〒から）、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記宛てにFAXまたはメールでお申し込みください。ご記入いただいたご住所に請求書をお送りしますので、お振込をお願いします。ご入金確認後に冊子を発送いたします。※価格はいずれも税込、送料別です。

お申込先 一般社団法人日本建築協会

FAX: 06-6946-6984 Mail: soumu@aaj.or.jp

◆3冊セットでご注文の場合は

特別価格 **¥5,000** にてご提供いたします。

■日本建築協会100年史1917-2017

¥2,000

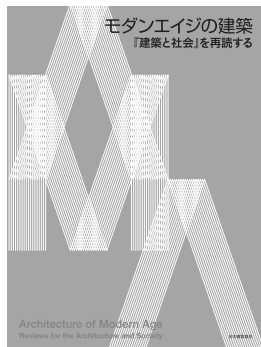


<目次> (全96頁)

- 序 香西喜八郎
- 第1部 日本建築協会100年の概要
石田潤一郎/石川祐一/平井直樹/玉田浩之/三宅拓也
- 第2部 座談会
 - 1 座談会 回顧と展望一坂本勝比古先生を囲んで
坂本勝比古/佐野吉彦/山形政昭/設楽貞樹/和田康由
 - 2 座談会 大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代
上田篤/鳴海邦碩/小林郁雄/天野直樹/大井昇二/設楽貞樹/橋爪紳也
 - 3 座談会 21世紀を拓く建築
本多友常/鈴木 毅/安原 幹/横山俊祐
 - 4 座談会 支部活動をめぐって
香西喜八郎/高松隆夫/篠原佳則/長瀬博一
- 第3部 年表(1917-2017)
- 第4部 協会活動の記録

■モダンエイジの建築『建築と社会』を再読する

¥3,000



2009年~2016年にわたって会誌『建築と社会』に掲載された連載「再読 関西近代建築」をまとめたものです。会誌に収められた貴重な建築記録や論考を取り上げ、解説しています。

<目次> (全352頁)

- はじめに 史料研究会一同
- 第1部 『建築と社会』の100年 山形政昭
- 第2部 建築作品編
 - 1 官庁・公共建築・学校(泉布親・大阪城天守閣ほか全13件)
 - 2 業務ビル(旧住友ビルディング・御堂ビルほか全22件)
 - 3 会館・劇場・博物館(綿業会館・自泉会館ほか全15件)
 - 4 ホテル・病院・駅舎・百貨店(宝塚ホテル・新大阪駅ほか全16件)
 - 5 住宅・住宅地(千里山住宅地・住宅改造博覧会ほか全6件)
- 第3部 論考・記事編(全10件)
- 第4部 掲載記事一覧

■関西の建築界/群像

¥2,000



2009年より70回にわたり『建築と社会』に掲載された、建築に携わる方々へのインタビュー記事をまとめたものです。(追録あり)

<目次> (全164頁)

- 関西の建築界/群像 本多友常
- 「群像」全70組
- 「大阪」フォトギャラリー 撮影:河合止揚
- 公開討論会 1987年と2017年の「関西」
倉方俊輔、本多友常、岡村吉展、奥 貴人、清原健史、河合止揚、駒井陽次、杉山美納、藤原芳寿、三谷勝章、三矢大祐、吉永規夫
- 委員プロフィール